
退魔伝 アヤカ死～百物語篇～

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退魔伝 アヤカ死〜百物語篇〜

【Nコード】

N7870Z

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

“真”とは事の有り様、“理”とは心の有り様。よって、人間と狐の活躍劇、百物語組の“真”と“理”、お聞かせ願いたく候……！

序の幕（前書き）

注意。

本編をお読みになる前に、以下の事にご注意ください。

本作品は、『アヤカシ』地獄録篇』の続編ではありません。作者の都合により、オリジナルの前作をすつとばして、原作通りに京都編の次の物語りと言う設定です。つまり、『アヤカシ』の続編となります。

故に、『地獄録篇』で復活した鯉伴と土蜘蛛は、登場しません。山本は、いまだ地獄で健在（？）です。主人公と羽衣狐は、地獄に堕ちて、ケルベロスと闘ってません。

それから、本作の主人公は、ある条件で最強になります。

そして、自己解釈やメチャクチャな設定と思われる設定があります。

以上の事に注意して、本編をご覧ください。

序の幕

大学を卒業した後も就職せず、自堕落な生活を送り、家を追い出された平凡な男が一人居た。

その男は、ある日、偶然訪れた京都の地で一人の少女と出会う。黒を身に纏った、謎の美しい少女だった。黒の美少女の正体は、この世を闇の世界に造り変えようと企む古の大妖怪・羽衣狐^{いにしえ}。彼女との出会いをキツカケに、男は恐ろしき妖世界^{あやしめかいしよな}に誘われる。陰陽師の使命、奴良組との因縁、京妖怪の宿願、京都の地で、様々な思惑が交錯する。

そして、幾多の死地を潜り抜け、ついに男は出会う。

闇の世界の魔王にならんと、地獄の底より甦った伝説の主・安倍晴明っ……！

だが、しかし、晴明のあまりに強大な力の前に、男は闘わずして敗れた。男は、魔王にならんとする晴明の力を、思い知らされた。こうして、京都での闘いは幕を閉じた。敗北と言う苦い結果を残して……！

そして、時は流れ――。

*

京都にある豪邸のテラスに、一人の少女が居た。椅子に座り、外の景色を眺めながら手に持つティーカップを口につける。優雅に紅茶を愉しむ少女は、全身黒づくめな格好をしていた。艶やかな黒い長髪、底無しの黒い瞳、黒一色に染められたセーラー服、黒いスト

ツキングを穿いた艶めかしい美脚。そして肌は対照的に、透き通るような白で穢す事を許されない美しさだ。全身に余す事なく、異性はおるか、同性をも虜にする魅力を纏っている。

人外の美しさを持つ漆黒の美少女は、名を羽衣狐^{はいうもぎつね}。京に巢食う妖を束ねる大妖怪。転生妖怪でもある彼女は、現代では山吹乙女^{やまぶきおとめ}と言う元・妖だった女性の体に棲みつき、生きている。元が妖怪だったからか、今では山吹の肉体と魂が完全に同化して二人で一つの存在と化していた。

ティーカップをテーブルに置き、

「遅い……」

ボソツ、と言呟いた。

京の妖怪を束ねる大妖怪の羽衣狐は、人間の男と付き合っている。その男の帰りが遅く、眉根にシワを寄せて、幾分ご機嫌斜めの様子だ。

（羽衣狐）

（何だ、山吹？）

肉体の本来の持ち主である山吹が、話しかけてきた。二人は身も心も繋がって一心同体の状態なので、心の中での意思疎通——テレパシーのような事が出来るのだ。

（もしかして、あの方の帰りが遅いのは……）

（うむ……妾^{わらわ}も予想はついておる……）

ムスツとした不機嫌な顔で、羽衣狐は確信を持って言った。

「ギャンブル、じゃろうな……」

*

負けちゃった、と青年は項垂れていた。

夕焼け空の下、石段に腰を降ろす青年は重い空気を背負って、力無く項垂れ、落ち込んでいる。頭を抱え、認めたくない現実に苦しむ。

「競馬……負けちゃった……！」

「だーから、やめときなつて言っただのに」

落ち込む青年の肩から、ひょっこりと顔を出したのは一匹の小鬼だった。短い一角を額に生やし、赤い着物を着こんだ黒髪の少女の名は、鬼美子^{きみこ}。復活した晴明に付き従わず、羽衣狐の下に残った唯一の鬼の一族である。

青年が外出する際は、彼の警護の為に傍に付いているのだ。

競馬に負けた青年に呆れ、鬼美子は溜め息をつき、肩の上で頬づえをつく。

「まったく……もう知らないからね。羽衣狐様のお仕置き確定だから」

「いやアアアアアア！ マジヤベエエエエエエエエ！」

お仕置きと聞いて、青年はオレンジ色の夕焼け空を仰いで声を上げた。

察しのついてる読者も居るかと思えますが、この青年が羽衣狐が恋して、付き合っている人間である。妖怪を好きになる物好きと興味を抱かれ、やがて恋心に変わり、両想いとなった。だが、基本的

に駄目人間であり、今日も同伴の鬼美子の忠告注意も聞かず、新たに競馬に挑戦して、負けた。手持ちの金を倍以上にするどころか、逆に素寒貧になってしまったのだ。

帰るに帰れない事態に、青年は頭を悩める。

「どうすればいいのかなあ、鬼美子……？」

「大人しくお仕置き受けるしかないでしょう？ 二尾の刑か、三尾の刑……どっちかじゃない？」

「うおおおおお……！」

刑の恐ろしさを思い返して、青年は身を震わせた。

自らの尾を使った羽衣狐の刑は、かなりキツイのだ。仕置きでなくとも、青年弄りが大好きな羽衣狐は、たまに自分が愉しむ為に刑を執行する時がある。受ける方は、たまったものではないが。

何とか言い逃れる術は無いものかと、青年は考える。もう夕方なので、悠長に考えてる時間は無いが、希望を捨てたくない。

その時だった。

ちりんっ。

不意に、綺麗な鈴の音が^ね耳に届いた。

音を聞いた青年は一旦思考を中断して、後ろを振り返った。石段には、自分と鬼美子以外に誰も居ない。何となく気になって、青年は石段をのぼった。鬼美子は、黙って青年の肩に乗ってる。

それなりの高さの石段を登り終えると、頂上に古い祠のような建物を見つけた。木造の祠は、所々朽ちて吹き抜けが空いていたり、塗装も剥げて年月の長さを感じさせられる。同時に、酷くボロボロな状態で、手入れがされていない事も解った。

辺りを見回すと、やはり人の姿は見当たらず、鈴らしき物も無い。空耳か？ と思って踵を返して戻ろうとした時だった。

ちりんっ。

また、鈴の音が聞こえた。

慌てて振り返り、音の出所を見る。視線の先にあるのは、古びた祠だ。

流石に不気味に思い、青年は顔を引き攣らせた。

「ち……ちっこい妖怪、か……？」

「でも、妖力は感じないよ」

鬼美子が、妖怪の気配は無いと言う。

音の正体が妖怪で無いと聞くと、ますます不気味に思えてくる。正体不明の鈴の音に、青年は怯えるも、同時に気になって仕方なかった。ゴクリツと喉を鳴らして唾を飲み込み、ジリジリと祠に歩み寄る。普段は臆病なクセに、この時は好奇心が勝っていた。

彼の行動に呆れながらも、鬼美子は何があっても対応出来るように肩の上で身構えた。羽衣狐様から青年の警護を任されているのだから、命に代えても命令は護る。

そして、青年は祠の前で立ち止まった。恐る恐る手を伸ばして、祠の扉を開けた。直後、すぐに身を引く。やはり、根っこの部分は臆病なのだ。

しかし、祠を開けても妖怪が飛び出たりはせず、心配は杞憂に終わった。

ホッと安堵する青年は、高鳴ってる心臓の鼓動を鎮めるように、深呼吸をした。

改めて祠に歩み寄り、中身を覗き込む。

「ん……？」

中を見た青年は、目を細めた。

祠の中に祭られているのは、一本の刀だった。暗くて見えづらいので、思い切って祠の中に手を突っ込み、剣を掴んで取り出した。沈みかけている陽の光に晒した剣を見て、青年と鬼美子はギョツとした。剣の装飾が、普通の物と違っていたからだ。柄の先は獅子のような顔があり、頭部には黄色い鈴が付いた紐が通され、鞘には宝石と思われる綺麗な結晶が幾つも詰め込まれており、美しくも不気味な装飾が施されている。

異様な剣を手に持ち、青年はまじまじと見つめる。
その時だった。

突如、剣が強烈な光を発した。

「うわっ……！？」

「きゃっ……！」

目を開けてられない強い輝きに、二人は咄嗟に手を顔の前にかざして目を覆った。

ややあつて、光は収まったのを瞼越しに解った。

「おやおや、コイツは驚きだね。今度の主は、妖連れの人間とは…

…」

不意に女の声が聞こえ、青年と鬼美子は目を開けた。

「んっ……！？」

青年と鬼美子は、更に目を剥いた。

いつの間にか目の前に、一人の女が突っ立っているのだ。長く白い長髪は大きな黄色い鈴が付いた布で一つにまとめられ、白と赤の巫女装束を着て、神秘的な雰囲気纏っている。瞳は血塗られたよ

うに紅く、顔も綺麗に整っていて、衣装の胸部は豊かな胸で膨らみが出来ている。突然現れた謎の美少女は、羽衣狐とはまた違った魅力を感じられた。

半ば茫然と見惚れていると、巫女少女は薄笑いを浮かべた。

「おーい、大丈夫かい？」

「えっ……！？ あ、ああ……はい……！」

声をかけられて、ハッと青年は我に返る。

同時に、ある事に気付く。

「あれ……？ 剣が無い……！？」

ついさっきまで握っていた剣が、手の中から消えているのだ。足下や周囲を見回すが、何処にも落ちていない。すると、美しい巫女は可笑しそうに笑った。

「剣なら目の前にあるじゃないか」

「え……？」

訝る青年の前で、美しい巫女は衝撃の事実を口にした。

「僕が剣さ……！」

「え……！？」

「今は人の姿をしてるけど、キミが祠の中から取った剣は、僕さ……！ この世に蔓延^{はびこ}る人ならざるモノ……妖を斬り、払う『退魔の剣』……！ ソレが僕の正体さ……！ そして、僕を手にとったキミは、僕の新しい使い手……主となった……。まあ、一つよろしく頼むよ……！」

ちりんっ、と鈴の音が鳴った。

手にしたのは、妖を払う刃。

闘う力を手にした青年は、新たな妖世界に足を踏み入れる。

退魔伝 アヤカ死〜百物語篇〜

二の幕

京妖怪が巢食う屋敷の一室は、修羅場と化していた。

スツカリ夜も更けた妖の時間^{あやかし}に、羽衣狐は漆黒の自室で椅子に座り、妖力を解放していた。どす黒く、相手を押し潰しそうな程の巨大で圧倒的な妖力が、部屋の中に満ち満ちていく。足を組んで相手を見下ろす様は、どこぞの女王様のようだ。ただし、その顔は眉根にシワを寄せ、目を細めて不機嫌を表している。

羽衣狐の畏^{おそれ}によって重く、冷えた空気の室内に居合わせているのは、彼女の前に正座している青年と後ろに立つ退魔の剣を名乗る美しい巫女姿の少女だった。正座している青年は、明らかに怒っている羽衣狐に怯え、俯けた顔を蒼くして身を震わせている。後ろに居る巫女は、まるで他人事のように気楽な様子で笑っていて、まるで動じていない。

帰りが遅かっただけでなく、女まで連れてきたと知った羽衣狐は、青年と巫女を自室に呼び込んだ。

「人間……！」

「は、はいっ……！？」

羽衣狐に呼ばれ、青年は恐れるあまり裏返った声で返した。

恐る恐る顔を上げると、羽衣狐は白い素肌に合うような冷たく、寒気を感じるような酷く無表情な顔をしていた。目が合った瞬間、青年の本能が危険信号を発した。

「その女は何者だ……？ お主とは、どういう関係だ……？」

「え、えつとお……そそ、それは……」

羽衣狐の畏に気圧されて、青年は声を震わせた。

今の羽衣狐は、相当怒っている。帰りが遅かった事やギャンブルで負けて金を失くした事もあるが、一番の理由は、やはり巫女を連れてきた事だろう。自分の事を主と呼んで、とうとう羽衣狐の屋敷まで付いてきてしまった。

少しでも返答を誤れば、キツイお仕置きをされるに違いない。

口ごもっていると、後ろから巫女が空気を読まずに、軽い口調で口を挟んだ。

「まあまあ、そう怒るなよ、狐様。別に、この男はなんにも悪い事はしてないぜ。僕の事が知りたいなら、僕の口から話すよ」

「ほお……」

緊張感を削ぐ巫女の軽い口調は癪に障ったらしく、羽衣狐は顔を顰めた。

二人の間に挟まれている青年は、一触即発な空気にたじろぐだけだった。

場の空気や相手の不機嫌さなど意に介さず、巫女は自己紹介を始める。

「この人間にも話したけど、僕は人ならざる妖を斬る『退魔の剣』さ……！ 今は人の姿をしてるけどね……」

「退魔の剣だと……？ 嘘ならば、もう少し上手い嘘をつくがよい……！ お主からは、陽の力どころか陰の力さえ感じぬぞ」

「そりゃあそうさ。なにせ、僕の力——刃を解き放つには“ある条件”が必要だからね」

「ある条件……？」

怪訝そうに目を細める羽衣狐に、巫女は続けた。

「^{ほく}剣を抜くには、斬る対象の“^{かたち}形”と“^{まこと}真”と“^{ことわり}理”……この三つ

が必要なのさ……！」

巫女が口にした、“形”と“真”と“理”の三つの条件が揃った時、退魔の剣は解放されると言う。三つの条件の内、“形”は何となく解る。だが、残りの二つはいまひとつピンとこない。

羽衣狐も理解出来ずにいるようで、察した巫女が説明する。

「“真”とは事の有り様……“理”とは心の有り様……！ と言っても、まだピンとこないかもね。簡単に言えば、“真”ってのは妖の素性、正体であり……“理”ってのは妖の目的さ……！ つまり、妖を知り、その全てを斬る事で払うのさ……！」

話を聞いた羽衣狐は、しかめっ面を解いて巫女を見据えた。

妖の“形”と“真”と“理”の三つの条件が揃って、刃が抜かれ、斬り、払う退魔の剣。陰陽術や過去に自分を斬った祢々切丸ねねきりまるとも違う、全く異質の剣だ。転生によって長い時を生きてきた羽衣狐でさえ、見た事も聞いた事も無い代物である。

一つ確かなのは、目の前の巫女が嘘を言ってるようには見えない、と言う事だ。

「その解き放たれたお前の刃なら、どんな妖でも斬れると言うのか……？」

「ああ……！ 自慢になるが、僕の刃は妖相手なら、どんな奴だつてぶった斬れるぜ……！ 勿論、“真”と“理”さえ揃えば……羽衣狐、アンタも例外じゃないぜ……！」

「ほお……！ 面白い剣だ……！」

初めて羽衣狐が、笑みを浮かべた。しかし相変わらず冷たさを纏っており、決して愉快的笑いでは無い。

「お前の言う事が本当ならば、ソコの人間が主と言う事か？」

「ああ。いや、しかし、内心結構驚いてるんだぜ。僕もこれまで色んな主に使われて、沢山の人と妖を見てきた。けど、人間と妖の恋仲は初めて見るよ……！」

「なっ……！？」

巫女の言葉に、羽衣狐は不覚にも動揺して、頬を赤くした。

瞬間、重苦しい空気が和らいだ。虚を衝かれて、畏が弱まったらしい。

羽衣狐の反応を見て、巫女はクスクスと可笑しそうに笑った。

「そんなに驚く事は無いだろう？ 僕と人間が一緒に居るところを見た瞬間、強い畏を発動させた。誰がどう見たって、妬いているのは明白だ……！ 千年を生きる大妖怪が、なかなか可愛い反応をするじゃないか……！ そういうの好きだぜ！」

「お、お前……！ 妾を、^{わらわ}からかっておるのか……！？」

「いやいや、個人的に気に入っただけさ……！」

素敵な笑顔を見せる巫女に対して、羽衣狐は顔を赤くして睨んでいた。

嫉妬の感情を見抜かれ、更に自分の反応を面白がられて、羽衣狐は激しい羞恥心と屈辱を抱く。それも、よりによって愛しい人間の前で、自分の醜い感情を看破されたのだ。これが悶えずにいられるだろうか。

畏が解かれ、張り詰めた空気が弛緩するのを感じて、ようやく青年は口を挟んだ。

「あ、あの……とりあえず、俺の疑いは晴れた、のかな……？」
「ん……？ う、うむ……そうじゃな。疑ってすまぬ……」

羽衣狐は、バツの悪そうな顔で謝った。

「だ、だが……違うのであれば、お主も違つとハッキリ言わぬかつ……！ お陰で、邪推をしてしまったではないか……！」

「いやいや。キミが僕達を見るや否や、畏を発動させたから主はビビっちゃって、口が開けなかったのさ」

「ぬうう……！」

巫女の意見に、羽衣狐は更に赤面する。

そんな羽衣狐を可愛いと思いつつ、青年は巫女に振り向いた。

「あの……一ついいですか？」

「ああ、いいぜ。一つと言わず、二つ三つくらい答えてやろう……！」

控え目に尋ねる青年に、巫女は気前の良い態度で返事をした。

青年は再び緊張した面持ちになり、問うた。

「貴女の刃つて……その、何でも斬れるんですか……？」

「ああ、人ならざるモノなら、何でも斬れるぜ……！」

「それは……安倍晴明でも、ですか……？」

青年が口にした名に、羽衣狐だけでなく直接問いを受けた巫女も、目を見開いた。

安倍晴明とは人間の名であり、妖としての名は鵺^{ぬえ}。地獄から甦^{ちから}り、陰陽術を操る圧倒的力を持ち、人間を滅ぼして闇に包まれた暗黒の世界を築こうとする魔王である。母親である羽衣狐を犠牲にして世に復活する事を目論んだが、青年の介入により、現世に馴染み切っていない不完全な体になってしまう。完全体となる為、鬼の一族を引き連れて地獄に一時帰還した。

青年は、惚れた女を地獄に突き落とそうとした清明を、いつか必ず倒すと誓った。しかし、悔しい事に青年は妖怪で無ければ、陰陽師でも無い普通の人間であり、闘う力など持ち合わせていない。

だが、今ココに、妖相手に闘える力がある。

臭い言葉だが、愛する女を護れる刃がある。

沈黙して向かい合う巫女は、ジツと青年の瞳を見つめ返す。心の中を見透かし、見定めるように。

羽衣狐も、青年の心中を察して複雑な思いを抱く。清明の為ならば、自分の身はどうなっても良いと思っていた。が、地獄に墮とされる自分を、青年は必死に助けてくれた。とても嬉しかった。命懸けで助け、護ってくれた青年には感謝してもし足りない。そして、より一層愛おしく思った。

愛する息子と愛する恋人。

二人が敵対してる限り、どちらかを選ばなければならない事は、解っていた。

改めて迷いを抱く羽衣狐だが、心の奥底では決まっていた。

決まっていたからこそ、長く憎んできた奴良組と同盟を結んだのだ。

——そうだ……妾は……。

辛い選択をした羽衣狐の視線の先に居るのは、青年だった。

——お主を、愛しておる……！

羽衣狐は、今、自分を愛している青年を選んだ。

一方、巫女も青年の気持ちを見抜いたのか、ニヤリと口元を歪め、笑った。

「ああ、勿論だぜ……！ 例え相手が魑魅魍魎の主だろうが、安倍清明だろうが、何だろうが、僕の刃で等しく、容赦無く、ぶった斬って、ぶっ殺して、無に帰してやるよ……！」

——純妖怪も半妖怪も、強い妖怪も弱い妖怪も、伝説の主も単な

る雑魚も、人ならざるモノは僕の前では皆等しく、ただのくだらねーカスだからね。あつ、羽衣狐は別だぜ。

巫女の妖しくも不敵な笑み、冷たい殺気の籠った声に、青年は寒気を感じた。妖怪の畏にも似た感覚で、体は金縛りにあったかのようには動けない。

しかし、恐ろしい以上に青年は、確信する。この力があれば、晴明を倒せる。羽衣狐を護れる。

小さな勇気を振り絞って、青年は声を絞り出した。

「あの……俺に、俺に力を貸して下さいっ……！　お願いしますっ……！」

頭まで下げて、青年は必死に懇願する。
すると、頭上からクスクスと笑い声が聞こえた。

「おいおい、顔を上げてくれよ。寧ろ、僕の方が使ってくれと頼むところだぜ？　それに、僕は羽衣狐と同じ位にキミの事を気に入ってるんだぜ？　だから、大喜びで力を貸そうじゃないか！」

「ほ、本当ですか……！？」

「ああ！　僕は造られてこの方、嘘をついた事が無いと思うからね」

妙な返答をされたが、『一度も嘘をついた事が無い』なんて言葉よりは信用出来る感じた。

それから巫女は、ああ、と思い出したように付け加えた。

「そうそう、僕の事は親しみを込めて安心院あんしんいんさんと呼びなさい……！
妖を必ず滅する絶対安心な退魔の剣、その名も安っ心院さんっ

……！」

人差し指を立てた右手を上げ、巫女——安心院はポーズを決めた。

その決めポーズに、青年と羽衣狐は毒気を抜かれたように脱力した。空気も白けた感じになって、緊張感の欠片も無い緩々空間に変わった。

ちりんっ、と鈴の音が虚しく鳴った。

「うわーお、ノーリアクションかい？ 大好きだぜ、キミ達ー」

青年と羽衣狐の反応に、安心院は更に好感を持った。

「さて、お喋りの時間はここまでにして……」

「え……？」

次の瞬間、安心院は顔を近付け、青年の口に自分の唇を押し当てた。

接吻を受けた青年は、目を丸くして驚くが、弾力のある唇に塞がれて声が出せない。顔は急速に熱を帯びて、あっという間に茹で上がって真っ赤に染まる。

その時、部屋の温度が一気に下がり、突き刺すような殺気と畏を感じた。

「き、貴様……妾の、人間に、何を、しておるウウウ……！」

憎しみに目を鋭くさせ、怒りに駆られて黒いスカートの中から金色の九尾を生やす。薄暗い室内を照らす淡い光を受け、煌びやかな輝きを放つ九尾は、怒髪天のように毛が逆立っている。

「んんー！ んんんーっ！」

（は、羽衣狐！ 落ち着いて！ 今襲ったら、彼まで巻き込んでしまっわっ……！）

外から青年が、内側からは山吹が羽衣狐を鎮めようとする。
すると、安心院が青年から口を放した。目を細め、妖艶にも似た
笑みを羽衣狐に向ける。

「おいおい、早とちりしないでくれよ……！ 僕は別に、キミの恋
人を奪うつもりなんか、これっぽっちも無いんだぜ……！」
「ならば、何故接吻をしたっ……！」

鋭い目つきで睨みつけ、珍しく羽衣狐は声を荒げる。自分の愛する男が、他の女と接吻をする場面を見るのは初めてなので、激しく動揺しているのだ。

安心院は、あくまで落ち着いた様子で対応した。

「コレは、僕の主となる者には必要な事なのさ……！ 退魔の剣は、さつき言った通り妖を必ず斬り捨てる最強の刃だ……！ けど、コレを操るのは、あくまで主である人間だ。人間の技量には限界があるからね……それも素人となれば、逆に妖に返り討ちにされる可能性100%だぜ……！ だから、使いこなす為に僕と身体を馴染ませる必要があるんだ……！ そうすれば、闘いで妖に遅れを取る事は無くなる……！ キミが惚れた男が強くなる為の、いわば面倒な修行編を抜きにした即効性パワーアップ法のさっ……！」
「ぬう……！」

理由を聞かされ、羽衣狐は表情を陰しくさせる。

頭では理解出来るが、感情面では納得出来る事では無かった。どんな理由であろうと、自分の愛する男が他の女と交わるのは面白くない。

悶々とした気持ちと激しい嫉妬心を抱く羽衣狐の前で、安心院は更に大胆な行動に出る。

衣装をはだけて、綺麗で艶のある肌を晒す。胸元まで露にして、

半ば上半身を裸に近い状態で青年に押し迫った。

予想外の展開に、青年は驚きつつも興奮を禁じ得なかった。

「あ、安心院さんっ……！？」

「なーに、恐がる事なんて何もないんだぜ……！ 身も心も僕に預けて、安心したまえ（安心院だけに）……！」

女の身体を押し当て、青年と密着状態になる。

その時、突如部屋に声が上がった。

「待てっ！」

「ん？」

安心院は後ろを振り向き、押し倒されてる青年も視線を向けた。

ソコには、黒いセーラー服を脱ぎ捨て、白い素肌と美しい身体を露にした羽衣狐が立っていた。豊かな乳房を惜しげも無く見せ、下は黒い下着の上に黒いストッキングを穿いたセクシーな恰好をして、全裸同然の姿をしている。僅かに頬を赤くして、対抗心を燃やしたような顔つきで、腕組みをして見下ろす。

自分以外の人前で、素肌を晒す羽衣狐に、青年は興奮しながらも驚いた。

「は、羽衣狐っ……！？」

「他の女に人間が犯されるのを、黙って見過ごす訳にはいかんっ……！」

声を荒げて、羽衣狐は歩み寄ってきた。

そして、押し倒されてる青年の股間を、黒いストッキングを穿いた足を乗せ、踏みつける。

「いぎつ……！ は、羽衣、狐様あ……！」

「この人間は、妾のモノだっ！ 妾も付き合わせてもらうぞっ！
反論は聞かぬっ！」

「うあっ……！ ああ……はあ、羽衣、狐、様あ……！」

大事な部分を踏みつけられ、青年は声を上げた。羽衣狐に責められる時は、『様』付けで名前呼ぶようになっていた。ズボンの上からだと言うのに、黒いストッキングを穿いた足先は、器用に巧みに敏感な部分を締め付け、しごいて刺激と共に快感を与える。

まんま女王様と奴隷みたいな二人の関係を見て、安心院は不敵に笑った。

「やれやれ、本当に仲良しだなキミ達。その仲の良さ、羨ましいぜ。だから大好きだぜ、キミ達……！」

ああ、別に構わないぜ。二人つきりでなきやいけない神聖な儀式、なんて設定は全く無いからね。二人で思いつ切り人間君をイジメて、強く……いや、最強の人間にしようぜ……！」

夜は、まだまだ始まったばかりだ。

そして、青年が再び妖世界の動乱に身を投じるのは、<件>の預
言から始まる。

三の幕（前書き）

原作突入です。

三の幕

人間とは元来、噂うわさ好きな生き物である。

男女の性別に関係無く、人は噂を好む。コミュニケーションの環にもなっている噂が、世の中から無くなるなんて事はまずあり得ない。大事でも些細な事でも、話題の重要度に限らず噂は広まる。程度こそ差はあれ、人から人へ広がっていくのが噂と言うものだ。今宵の妖物語は、この“噂”から始まる動乱である。

本来なら、まだ学校の授業が続いてる時間に、セーラー服姿の羽衣狐が屋敷に居た。

いつも通りの退屈な授業を山吹に任せ、内側に引っ込んでる時に妙な噂を耳にしたのだ。その事がどうにも引掛かり、山吹は心配になって学校を早退して帰ってきたのである。

屋敷に戻った山吹は、学校で聞いた噂を青年に話した。

「<件>……？」
くだん

話を聞いた青年は、片眉を上げた。

「はい。詳しい事は聞けなかったのですが、その、人と妖あやかしがどうか……何だか、妙な胸騒むねさわぎがしまして……」

語る山吹の顔は、胸の内の不安を表すように暗かった。

噂の中に出てきた、“人と妖”と言う言葉がどうしても気になるのだ。今は亡き元・夫の奴良鯉伴ぬらりはんと新たな妻の若菜との間に生まれたリクオは、文字通り“人と妖”の間に生まれた子である。他の解釈も出来るだろうが、どうしても聞きかじった噂の内容がリクオと

繋がってしまう。直接の血の繋がりは無くとも、亡き元・夫の息子で、自分にとっても大切な存在である事に変わりはない。

それで居ても立っても居られず、青年に相談しに来たのである。

山吹が深刻そうな顔をしてるので、青年はすぐに応じた。

「分かりました。ネットで調べてみます」

羽衣狐に用意してもらったノートパソコンを開いて、電源を入れて立ち上げる。

その間、＜件＞について話をする。

「＜件＞って確か、動物の中から生まれて、すぐに予言をする妖怪だっけ？」

「ああ、その通りさ」

言葉を返したのは、間近の席に腰を降ろしてる安心院だった。

今日も笑顔で、安心院は続ける。

「しかも＜件＞は、予言を言った後すぐにポツクリと死んでしまう。だから、剣を解放して斬る暇が無い、僕でも斬れない妖だ。更に、その言い残す予言ってのは、物騒な内容のみで、全く迷惑極まりない妖だぜ……」

肩を竦めて、安心院は困った様子を表す。

剣を解放するには条件を揃えなければならない為、生まれてすぐ勝手に死んでしまう＜件＞は斬る術が無い。ある意味、一番厄介な妖怪だ。

そんな話をしてる間に、ノートパソコンが立ち上がった。

「えーっと、＜件＞、＜件＞と……」

キーボードを叩き、早速検索を始める。

エンターキーを押して、画面に検索結果がズラリと出た。その中で、アクセス数の多いサイトをクリックした。掲示板には、文字がビッシリと画面を覆い尽くさんばかりに並んでいる。一番上の行に、例の予言を書き写したと思われる文章を見つけた。

■人と妖の間に生まれた、奴良リクオと言う奴良組三代目の妖怪を殺せ！ さもないと、この國は滅ぶ事になる！

「え……？」

予言を読んだ青年は、顔を引き攣らせて苦笑いを作った。

後ろで覗き込んでいた山吹は、シヨックで目を見開き、悲鳴を上げそうな口を両手で覆った。

「おやおや。これはまた、随分と物騒な予言だね……」

安心院だけは、動揺せずに笑みを張り付かせている。

「そんな……リクオが……？ どうして……！？」

信じられないと言った様子で、山吹は声を漏らした。

もし、この予言が本当に人々の間に広まっているとしたら、リクオの身に危険が迫る事になる。

「あれえ……？ コレって、もしかしてかなりヤバイ……？」

いや、まさか、と青年は否定する。

いくらなんでも、たかが予言を鵜呑みにするとは考え難い。しか

も、その予言を口にしたのは人間では無く、妖怪だ。現代では、妖怪など空想の産物と言う認識が圧倒的に強い。そうでなくとも、人間の滅亡予言だって外れてきて、予言自体に信憑性なんて無しに等しい現状だ。こんな予言、信じる訳が無い。

「いやいや、そうとは限らないぜ、主君」

「え？ 安心院さん？」

「確かに、常識的に、普通に考えれば妖の予言なんて、信憑性0に等しいカスみたいなモノさ。だが、内容が内容なだけに、何か作作的なモノを感じるぜ。少なくとも、今ハッキリしてる事は、奴良リクオの命を狙ってる奴……或いは連中がいるって事さ……！」

まるで青年の心を見透かしたように、安心院は意見を語った。

確かに、言われてみると、予言と言うのは、回りくどい表現や曖昧な内容なのがセオリーだ。しかし、このく件>の予言は具体的過ぎる。個人名まで出して、救いの方がハッキリと出ている。

「あの……！」

安心院の意見を考慮して、危険性を感じる青年に山吹が声をかけた。

「私、今からリクオに会いに行こうと思います！ こんな事を知ってしまったら、ジツとしていられません……！」

「山吹さん……」

息子同然のリクオの危機に、関東に行く事を決意する山吹。

「それじゃあ、僕らも行ってみるかいい？」

安心院も、関東行きを押ししてきた。

「もしかしたら、退魔の剣の切れ味を試す、良い機会になるかもしれないぜ？ 腕試しに一つ、どうだい……？」

「いえ……」

手に入れた力を試す場を、欲しくないとはいわない。
ただ、そんな口実が無くても、答えは決まっている。

「俺達も行きますよ！ 山吹さんと羽衣狐だけ行かせるなんて事、したくないですから！」

「ありがとうございます！」

青年の言葉を聞いて、山吹は深く頭を下げて感謝した。

部屋に居る一同が、関東行きを決意した時、扉の外から声が聞こえた。

「ちよーつと待ちなさいっ！」

勢いよく扉を開け、部屋に飛び込むように入ってきたのは、髑髏を両手に持った狂骨（娘）だった。その後ろからは、しょうけら、はくでんす白蔵主、鬼美子と続々と配下の京妖怪達が雪崩れ込んできた。

急に入ってくるもんだから、青年と山吹はビックリした。

「きよ、狂骨！？ それに、皆も……」

「お姉様！ 私達も関東までご一緒します！」

入って来るや否や、狂骨は山吹に同行の意を伝えた。その顔は真剣そのもので、有無を言わせない迫力を感じる。

「闇の聖母様の笑顔を曇らせるような愚かな罪人は、このしょうけらめが裁きましょう……！」

神父の恰好をして、陶醉にも似た忠誠心を抱くしようけらも、閑東行きを志願した。

他の妖怪達も目を光らせ、山吹のお供を決意している。羽衣狐と一心同体の身である山吹も、京妖怪にとって大将のような存在となっているのだ。

狂骨達の方からお供を申し出され、山吹は嬉しさのあまり、涙を浮かべて瞳を潤ませた。

「皆さん……ありがとうございます！」

山吹は、深々と皆に頭を下げる。

ふと山吹は、一番に助けを煽ぐべき相手を思い出す。

（あの、羽衣狐……）

（何だ……？）

羽衣狐だ。一心団体とは言え、一応彼女の意味も確認しなければならぬ。それに、闘う力が無い自分には、強い羽衣狐の協力が必要になる。

（勝手に話を進めて、すいません。でも、どうしても皆さんや貴女の力が必要で……）

（フンッ……。解っておる……）

今までの話を内側で聞いていた羽衣狐は、ぶっきらぼうな調子で答えた。

（行くがよい……！ 妾も力を貸そう……！ 奴良組に貸しを作る、
良い機会じゃ……！）

（羽衣狐……！ ありがとうございます！）

（フンッ……！）

山吹の感謝の言葉に、照れ隠しするように羽衣狐はソツポを向いた。

大将の許しも得て、京都の『羽衣狐連合軍』は関東に赴く事になった。

*

京都を出て、夕方になった頃に関東は東京に到着した。

ソコで青年が目にしたのは、京都で見たような地獄絵図——否、あの時を超える惨劇の場と化していた東京だった。京都では、妖怪に襲われた犠牲者は主に陰陽師だけだったが、今回は規模が違う。東京中で妖怪が堂々と現れ、人々を無差別に襲っているのだ。牙を剥いて、肉を裂き、喰い千切り、踏み潰して現代都市に肉片を散らし、血の雨を降らしている。恐怖に駆られた人々は悲鳴を上げて逃げ惑い、阿鼻叫喚の地獄の中で妖怪が殺戮を繰り返す。

しかし、中には逃げ惑うだけでなく、殺気を漲らせた人々が居た。傘や石、鉄パイプ等の手近な物を武器にして、血眼になって殺しの対象を捜している。その対象とは、<件>の予言に出ていた奴良リクオだ。リクオを殺せば、この事態が終息して、日本が救われると信じて疑わない人間達は、襲い掛かる妖怪から逃げつつリクオを捜索する。

「おいおい……メチャクチャじゃねーか……！」

背中にリュックを背負ってる青年は、狂気の光景を目にして絶句した。

人間達に見つからないように、皆、建物の屋上から街を見下ろしている。京妖怪の中には、東京の現状に少なからず驚いてる者がチラホラと居た。

恐怖と狂気に満ち満ちている街の様子を、安心院は動揺するどころか、愉快げな笑みで見下ろしている。まるで、イベントを楽しむ客のようだ。

「生温い現代にしては、なかなか賑わってるじゃないか」

「いや、賑わいじゃなくて、騒ぎでしょう、どう見ても……」

平然としてる安心院とは逆に、青年は猛烈な吐き気に襲われていた。何とか抑えているが、少しでも気を緩めれば胃の中の物を口から出してしまいそうだ。グロい場面は苦手だが、遠目で見てるのが幸いした。

気分を悪くする青年の背中を、さり気なく擦りながら身体の主導権を貰った羽衣狐が命じた。

「まずは、奴良リクオを捜し出すのだっ！ 見つけ出したら、すぐに妾に伝えよっ！」

「はっ！」

「御意っ！」

命令を受けた京妖怪達は、散り散りになってリクオ搜索を開始した。

「人間、妾達も行くぞ」

「え……？ ——っわああああああああああっ！」

羽衣狐は左手に黒い鞆を持ち、空いてる右手で青年の手を掴むと屋上を跳躍した。直後、引つ張られる形でビルとビルの間と一緒に跳ぶ青年は、顔を真つ青にして悲鳴を上げた。

ビルを跳び移りながら移動する羽衣狐の後を、安心院が追いかける。

「やれやれ。よく今まで、生きていられたものだな。感服するぜ、主君」

自分の使い手が涙を流して悲鳴を上げていると言うのに、安心院は暢気だった。

上から街中を眺めて、リクオの姿を捜す。時間帯を考えれば、下校途中のハズだ。それに<件>の予言で人間達をけしかけてる妖怪達が、大っぴらに動いて暴れて殺戮を繰り返してる。人間に仇成す妖怪を許さない彼ならば、外に出ている可能性がある。リクオとは、そういう男なのだ。

広い街中から、個人を見つけ出すのは難しいと思われたが、意外にも簡単に居場所は分かった。

ビルの屋上を跳び移る羽衣狐の視界に、路地裏から飛び立つ影を見つけた。翼を羽ばたかせているが、鳥にしては大き過ぎるし、形が違う。ソレは、背中に黒い翼を生やした鴉の妖怪で、奴良組の諜報員の三羽鴉さんぱがらすだった。

羽衣狐は、いまだ悲鳴を上げ続ける青年を連れて、三羽鴉が飛び出た場所に向かった。

そして屋上から飛び降り、金色の尻尾を出して、衝撃を和らげて着地した。

其処には、妖怪の姿に変化したリクオと雪女の氷麗ひいり、それからリクオの同級生の家長カナと言う学生が居た。

「見つけたぞ、ぬらりひよんの孫……！」

「羽衣狐っ!？」

突然現れた羽衣狐に、リクオとつらは驚いて目を見開く。

「何でお前達が、こんな所に……?」

「なに、妾の中の山吹が、お前の身を案じてな……。いつまでも落ち込まれては困るので、仕方なく手を貸しにきたのだ」

「そうか……」

駆け付けた事情を聞いて、リクオは山吹の想いを知り、笑みを浮かべた。血は繋がっていなくても、大切な妖^{ひと}であると思ってる。その想いが自分だけでなく、山吹も同じのようで、“こんな状況”だと言っのに自然と顔に笑みが浮かんだのだ。

すると、羽衣狐の後ろから、安心院が声を上げた。

「キミ達、話するのは結構だけど、僕の主君の身も案じてくれな
いか? かなりヤバい事になってるぜ」

「高いトコ怖い……! 高いトコ怖い……! 高いトコ怖い……!
高いトコ怖い……! 高いトコ怖い……!」

半ば強制的に、ビルの飛び移りを味わわされた青年は、頭を抱えて蹲り、蒼ざめた顔でブツブツと呟いていた。

恐怖体験で震えてる青年に気付き、羽衣狐が歩み寄った。

「人間、大丈夫か?」

「コレが大丈夫に見えますか……?」

「……見えぬな。すまぬ」

流石の羽衣狐も、今回は素直に謝った。

羽衣狐が青年を立ち直らせようと声をかけていると、リクオは安心院に話しかけた。

「アンタは見ねえ顔だな。京妖怪の仲間か……？」

「いや、僕は妖じゃないさ。今は人の姿をしてるけど、ソコで震えてる人間君に使われてる退魔の剣だ」

「退魔の剣……？」

リクオが怪訝そうに片眉を上げた時だった。

突如、建物の壁が亀裂を走らせ、轟音と共に粉々に砕けた。異変に気付いた一同が振り向くと、壁に空いた巨大な穴から大きな二つの手が伸びているのが見えた。粉塵が立ち込める建物の中から、手の主が瓦礫の山を踏み越えて現れる。

出てきたのは、身長二メートルをゆうに超す大男だった。黒髪で目つきは鋭く、逞しい筋肉の塊の体躯をしている。ただ立って見下ろすだけで、相手を威圧する存在感だ。

リクオ達を見つけると、大男はニヤリと笑った。

「お？ いたいた〜。見イつけた……！ いや、見つかった？ ま

あ、どっちでもいいや」

「デカっ！？」

大男を見上げて、青年は目を丸くした。土蜘蛛と比べると小さいが、人間の姿でここまで大きい男は見た事が無い。

その時、頭上から「リクオガ、イタゾ〜！」と言う喧しい声が聞こえてきた。空を見上げると、鷲のような白い鳥が人語を発して鳴いている。

「何だ？ 奴良リクオ以外にも、妖怪が増えてるじゃねーか。奴良組の仲間か？ まあ、全員まとめて潰せばいいか！

オレは“げきてつ檄鉄の雷電”……！ 百物語組七人の幹部の一人だつ……

……！
「百物語組……！？」

組織の名前を聞いた羽衣狐は、ピクリと反応した。彼女と山吹にとっても、百物語組とは浅からぬ因縁がある。鵺復活の裏では、百物語組が糸を引いていたのだ。

睨み合っていると、路地裏に人が集まってきた。

「オイッ！ 居たぞー！ あの鳥本当だったぞー！」

先ほどの鳥の声を聞いて、駆け付けたようだ。続々と集まってきた人々によって、リクオ達は囲まれて逃げ場を無くす。

「リクオ様！」

つららは、リクオの背中を護るように背後に回った。すると、駆け付けた人々は、リクオと羽衣狐達と対峙してる雷電を見て、ざわついた。

「おおっ！ 何だ、あのでっかい兄ちゃん！？」

「奴良リクオを、追い詰めてるじゃん！」

「スゲー兄ちゃん！」

雷電を味方と思い、集まった人々は歓声を上げる。

その事に気分を良くしたのか、当の本人は笑顔で観衆と化した人々を見渡した。

「お？ ギャラリーが増えてきやがったぜえー。じゃあ、ちよつと

サービスしといてやるか。

おりゃあああああああ！」

雷電はギャラリーに向け、ポーズを決めて声を張り上げた。

ソレに応えるように、ギャラリーも声を上げて盛り上がった。

「兄ちゃん、倒せばヒーローだぜ！」

「任せろい！」

人間を前にハイテンションな雷電に、青年は訝り、すぐ側に居るリクオに囁く。

「ねえ、アイツ本当に敵なの？ 何かスッゲー陽気っつか、ノリノリな男なんですけど……」

「それでも、油断するな。自分で名乗ってたが、アイツは百物語組の幹部だ……！ おい、お前！」

青年に答えた後、リクオは雷電に声をかけた。

「幹部って言ったが、コレは“かくれんぼ”じゃなかったのかよ……」

「おうよ！ コイツは、鬼ごっこであって鬼ごっこじゃねえ！ 何故なら、鬼ごっこじゃねーんだ！ いや、えーっと違うな……」

——かくれんぼ？ 鬼ごっこ？ 鬼ごっこであって鬼ごっこじゃない？ 何のこっちゃ？

リクオと雷電の問答に、状況を把握していない青年は頭を悩めた。どうやら、連中の間で何かルールのような物があるようだ。ソレが何かは、皆目解らないが。

すると、雷電がリクオをさっさと潰しにかからない事に焦れてき

て、ギャラリーが声を飛ばした。

「早くやれよー！」

「そうだそうだ！」

「やらねーなら、俺が出てやるぞ！」

野次を飛ばし、自分達がリクオを叩きに出ようとした時だった。

「ああ？」

雷電の雰囲気が一変した。

陽気な笑顔が消え、怒りに染まった恐ろしい形相で人間達を睨んで威圧する。さっきまでとは、まるで別人だ。

迫力に気圧されたギャラリーは、一睨みで黙った。

「今、何だった……？ 人間如きが指図するとか……」

言いながら手近な破片を指で掴み、

「ねーし」

人間達に向けて、投げた。

人一人潰す大きさの破片が、ギャラリーに突っ込もうとした時――金色の何かが弾き、破片は軌道を変えられて壁に激突した。

「ん？」

異変に目を細めた雷電は、視線をギャラリーから外した。

視界に入ったのは、ゆらめく金色の尻尾を持つ羽衣狐だった。鞆を片手に腕組みをして、雷電を見上げている。先ほど破片が人間に

当たる寸前、尾を伸ばして助けたのだ。

「羽衣狐……！？ お前……」

彼女の意外な行動に、リクオは動揺を隠せなかった。人間に対する憎悪は、いまだ消えていない。その羽衣狐が、人間を助けるなんて行動に出た事に、驚いていた。

すると、振り返らずに羽衣狐が言った。

「勘違いするな。別に人間が何人死のうが、妾にはどうでもよいが……目の前で死なれては、こ奴の精神に負担をかける」

羽衣狐の後ろでは、胸を撫で下ろしてる青年が居た。目の前で死人が出たら、気分が悪くて我慢してた吐き気をぶり返す事になった。

雷電から目を離して、羽衣狐は周囲のギャラリーを見回し、

「失せろっ……！」

「ひいい……！」

畏を受けた人間達は、怯えた顔でゴキブリのように散って逃げ出した。

あっという間に人が居なくなり、路地裏は静まり返った。

「あら……ギャラリーが減っちゃったよ……」

雷電は困ったように頭を掻いた。

そんな彼の前で、羽衣狐の後ろに居る青年は、彼女に声をかけた。

「羽衣狐……いいんですか？」

大妖怪の羽衣狐も、普段は自分が妖怪である事を隠していた。正体が人間に知られると、色々と面倒なのだ。闇が薄れた現代では、尚更である。しかし、愛する男に対する気遣い一つで、正体を明かしてしまった。

ところが、羽衣狐は何ら気にした様子はしていなかった。

「構わぬ……。お主が居てくれれば、他の人間共にどう思われようと……！」

羽衣狐の青年に対する想いに、揺らぎは無かった。

「美しい愛情だね。惚れ惚れするぜ」

狐様の想いと行動に、安心院は笑顔で呟いた。

そして、羽衣狐と向かい合う雷電は、笑みを浮かべた。今度の顔は、潰し甲斐のある獲物を見つけたハンターの笑いだ。

「羽衣狐つてのは、アレだろ？ 確か、京都の大妖怪だ。圓潮えんちょうから聞いた事あるぜ。鵜復活に利用されてる事に気付かなくて、しかも人間なんか愛した、間抜けな大将だろう？」

「デメエ……！」

羽衣狐を馬鹿にした雷電の言葉に、青年は怒りを燃え上がらせた。背中に背負ってるリュックを降ろして、中から退魔の剣を取り出す。今、傍に居る安心院は、本体けんから分離した半身のような存在なのだ。

「ふんっ！」

両手に力を込めて、剣を抜こうとする。が、微動だにせず、抜ける気配が無い。

すると、呆れた様子で安心院が言った。

「おいおい、気持ちは解るけど忘れた訳じゃないだろう？ その剣は、斬る対象の“形”と“真”と“理”が揃わなきゃ絶対に抜けないんだぜ」

「くう〜！ 今更ながら、何て使い勝手の悪い剣だ……！」

大切な女性^{ひと}を侮辱されたと言うのに、何も出来ない自分に憤りを憶える。闘える武器を得たのに、使えないんじゃないじゃあ意味が無い。自分の無力さが憎らしい。

「人間……！」

剣抜きに苦戦してると、羽衣狐に呼ばれた。

顔を上げた瞬間、青年は背筋を凍らせた。目の前に立つ彼女が、怒りと殺気を漲らせた畏を放っているのだ。直接当てられてはいないが、間近に居るからか、寒気を感じて冷や汗を流す。

雷電と対峙したまま、羽衣狐が言う。

「こ奴は妾^{めかけ}が殺^やるっ……！」

羽衣狐は怒^{いか}っていた。

自分の事を馬鹿にされたからではない。そうではなく、雷電は言った。

人間なんか、と。

愛しい男を、この木偶の坊は見下し、侮辱した。
許す訳にはいかない。生かして帰さぬ。

「お？ 何だ？ オレと闘る気か？ いいぜ！ 奴良リクオを潰す前に、お前から先に潰してやるよ！」

雷電は不敵に笑い、自身の畏を発動させた。

三の幕（後書き）

原作には無い、羽衣狐 VS 雷電

原作主人公であるリクオが、新たな力を発動させる最初の見せ場でもあるシーンですが、この作品では羽衣狐が奪いました！

いや、別に嫌がらせじゃないですよ？ ええ、羽衣狐を斬ったりリクオを恨むなんて事は……（黒）

いや、しかし……相変わらず、描写に苦戦です。
では。

四の幕

狂乱の場と化した東京の一角で、二匹の妖が対峙していた。

一匹は、コンクリートの壁を軽々と突き破る程の怪力巨漢。奴良組と因縁が深い百物語組の幹部で、名を雷電と言う。

もう一匹は、京妖怪を束ねる大妖怪の羽衣狐。こちらも奴良組とは因縁を持つが、理由あって今は同盟を結んでいる。

古の妖狐は、怒りと殺意を乗せた畏を発していた。周囲の空気を凍てつかせ、突き刺すような恐ろしい畏だ。目の前の巨漢は、愛する男を侮辱した許されざる者だ。必ずや息の根を止めて、毛一本すらこの世に残さん。

腸が煮えくり返るような激しい怒りを抱く羽衣狐とは対照的に、雷電は楽しむように笑っていた。その笑いは、単に闘いや殺しを愉しむモノでは無く、己の実力に裏付けられた絶対の自信の現れでもあった。

そして、雷電が先に仕掛ける。

「フンヌツ……！」

顔を膨らませ、力を込める。

その直後、雷電の体に異変が生じた。右腕に何筋もの割れ目が生じ、内部の筋組織と思われる筋が伸びる。伸びる。伸びる。表面の皮膚には鱗のような物が出来て、異形の不気味さを醸し出している。そうして変化した右腕は、元の腕の倍程もある巨腕となった。逆に左腕は、最初の頃よりしぼんでいる。

変化を目の当たりにした一同は、驚愕して目を見開く。

畏を発動させ、力を解放した雷電は気分を高揚させて笑った。

「ハハハ！ 久しぶりだなあ、これやんの！」

言っておくが、こいつはそんな尻尾じゃ防げねえぞ……！ 当たれば、全て爆ぜちまうからなっ……！
おるるるRUああああっ！」

異形の腕を振り下ろし、羽衣狐に襲い掛かる。

迫りくる巨大な拳は、リーチが長く、更に凄まじい拳圧けんあつを乗せていた。指先を伸ばしてまとめ、拳と言うより巨大な槍と化している。目の前に対峙してる羽衣狐は、直撃を避け、咄嗟に横に跳んで突きをかわ躲す。直後、的を外した槍は、コンクリの壁を軽々と突き破り、破壊した。攻撃を回避した羽衣狐だったが、巨腕が纏っていた拳圧を受け、飛ばされてしまう。

突きを避けられた雷電は、舌打ちして標的を目で追った。

「逃がすかよっ！」

すぐさま巨腕を振り抜き、次の瞬間、恐るべき破壊力を見せた。突き出された巨腕は、自分よりも遥かに大きなビルを、まるごと叩き壊したのだ。コンクリの建築物は、一瞬にして粉々に碎かれ、大小の破片と化す。それだけにとどまらず、雷電の圧倒的パワーによって、瓦礫はまるで散弾銃のように羽衣狐に襲い掛かった。

羽衣狐は顔を陰しくさせ、迫りくる瓦礫散弾を睨み、九尾を出す。金色の輝きを撒き散らし、押し潰さんと飛んでくる瓦礫を、九尾を振り抜いて弾く。だが、瓦礫散弾の奥には、引っぱがされた車二台分の巨大なアスファルトが控えていた。流石に、この大きさは尻尾一本では防ぎきれない。慌てず羽衣狐は、九尾を一塊にまとめ、極太の尾に変えて薙ぎ払った。アスファルトは粉々に碎け散り、散弾の雨はようやく止んだ。

やられっぱなしは性に合わない、羽衣狐は解いた九尾の一本に手をつ込んだ。

「三尾の太刀」っ！」

尻尾の中から刀を取り出し、そのまま勢いに乗せて刃を振り下ろす。

しかし、頭を狙った刃は、巨腕によって防がれた。甲高い音を立て、斬る事叶わず刃は巨腕を通らない。

刃を受ける巨腕の硬さに、羽衣狐はギョツとする。
相手の反応を見て、雷電は不敵に笑った。

「悪いな！ オレを斬るには、骨が折れるぜっ……！」

巨腕を振り抜き、三尾の太刀を弾く。

互いに距離を取って、激しい攻防が終わった。

離れて見守ってる青年達は、目の前の激闘に茫然となっていた。

一分にも満たない攻防で、建物一つが破壊され、薄暗い路地裏は戦場の場と変わり果てていた。

「アイツ、強え……！」

振り絞った声で、青年は呟いた。羽衣狐が一方的に押され、一太刀も浴びせられないところを初めて見た。

リクオと氷麗も表情を険しくさせ、空を飛ぶ蛇二ヨ口の背に乗っているカナも不安を濃くした顔で見下ろしている。そんな中で、安心院だけは、やはり笑みを崩す事なく観戦していた。

圧倒的^{ちから}な力で優位に立つ雷電は、調子づいたように笑う。

「ハッ！ 何だよ何だよ？ 大妖怪のクセに、逃げ回って又ルイ攻撃するだけか？ 拍子抜けだなっ……！ まあ、オレが強えつてのものもあるけどよ。もっとマシな攻撃でなきゃ、最強に頑丈なオレの骨の体は斬れねーぜっ！？」

「骨の体、じゃと……？」

怪訝そうに目を細める羽衣狐に、雷電が答える。

「おうよ！ 言つて無かつたか？ オレは、全部骨で出来てるんだぜえ！ どうだあ、カッコイイだろう！？」

「ガキか……？」

戦闘の最中だと言うのに、青年は思わず小声でツツコンでしまった。

雷電は続ける。

「いいか……？ この世で一番かてえのは何か……？ ダイヤか？ んーダイヤって思うだろう？ 違うんだな！」

——つぜえ……！

無意味に引つ張る雷電に、思わず心中で悪態をつく青年。そんな彼の心の眩きなど知る由も無く、雷電は声を上げた。

「オレだよっ！ 一番硬^{かて}えのは、このオレだっ！ 何故なら！」

突き立てた親指で自分を指差し、自慢する雷電。そして、自分が一番硬い理由を語ろうとして、突然言葉を切った。場に、沈黙が生まれた。

羽衣狐は、無表情に見つめている。

ややあつて、苦笑いになつた雷電が再び口を開いた。

「何故なら……アレだ……。えーっと……密……密度だよ。鏡^{きやう}斎^{さい}が……説明してくれてて……。な。金剛石が炭素の……密度がすげえから……。えー」

——コイツ、馬鹿だっ……！

グダグダな説明をする雷電に、青年は悪態を混ぜたツツコミをした。

リクオ達も呆れ、向かい合っている羽衣狐は表情こそ変わらないが、冷たい視線は更に冷め切っていた。

一同の反応に、さすがの雷電も気まずさを憶える。

「いや、あの……何だっけ？ い……いいんだよ、そこんこは……！」

「自分から説明始めといて投げたっ！？」

ついに青年のツツコミは、声となって出た。

いまいち緊張感が持てない。

しかし、そんな暢気な事を思ってる場合では無かった。

「とにかく！ 一本の腕に骨を集めたのが、この“龍の腕”りゅうかいなだっ！
てめえの軟弱な尻尾や刀じゃ防ぎきれねーぞっ！」

雷電の話を聞いて、青年は表情を陰しくさせた。

一見ふざけた妖だが、その硬さは本物だ。現に羽衣狐の三尾の太刀を受けて、無傷でいる。幹部を名乗るだけあって、なかなか厄介な相手だ。

その時、ふと同時に思った。待てよ……もしかして、コイツ……。青年が自分の気付きを検証してる間に、雷電が動き出す。

「そして……！」

目を凶悪に鋭くさせ、雷電は更なる攻撃の手を見せる。

次の瞬間、羽衣狐の背後に巨大な足が突き出た。瓦礫を吹き飛ば

し、羽衣狐の後ろを取って逃げ場を無くす。

弛緩しかけた空気が、再び張り詰めたモノに変わった。

「足も伸ばせば“双龍そつりゅうの牙きは” ってな！ コイツは避けられねえぞ、羽衣狐えゝ！」

声を上げ、前方から巨腕、後方から巨脚を伸ばして羽衣狐を挟み撃ちにする。

「羽衣狐っ！」

リクオ達が助太刀に動くが、今からでは、どんなに急いでも間に合わない。

——ヤバいつ……！

羽衣狐の危機に、青年は心臓が跳ね上がった。鼓動が早鐘のようになり、胸が締め付けられたように苦しくなる。

絶体絶命の危機。羽衣狐が潰されるまで、もう時間が無い。迷ってる暇など、無い。

青年は、自分の“気付き”に賭ける事にした。

「羽衣狐エエ！ 顔狙ってっ！」

腹の底から、あらん限りの大声を飛ばす。

聞いた羽衣狐は、目をカツと見開き、目にも止まらぬ速さで迷わず金色の尾を伸ばした。己の勝利を確信して疑わぬ雷電の、隙だらけの笑顔に何筋もの金色の線が走る。

「え……？」

顔に線を引かれた雷電が、呆けた声を出したかと思えば、

「あ……ああああああ……あべえええああいえああ……！」

突然、空いてる左手で押さえるように顔を覆い、狂ったように絶叫を上げた。

その顔に、先ほどまでの余裕は全く無く、取り乱したような表情をしている。

突如、豹変した雷電の様子に、リクオ達は足を止めて訝しげに目を細めた。

顔を押さえ、息を荒げ、目を見開き、何かに怯えたように血相を変えて雷電は羽衣狐を睨んだ。

「て、てめえ……！」

「ふふ……！なるほど、確かにお主の手足を斬るには、骨が折れそう……。じゃが、他はどうだ？手足以外の、例えば……顔とか、のう……？」

目の前で苦しむ雷電を、羽衣狐は寒気さえ感じる妖艶な笑みで見つめた。

その笑みに、彼女の畏に呑み込まれ、雷電はゾクリとした。

「き、気付きやがったのか……？オ、オレの体のこ、とに……！」

「ああ。じゃが、最初に気付いたのは、妾^{わらわ}では無い」

羽衣狐は、後ろに居る青年を一瞥した。

そして、誇らしげな笑みを浮かべ、言った。

「後ろに居る、妾の男だ……！」

「な、なに……！？」

怯えと動揺が入り混じった汗まみれの顔で、雷電は青年に目を向けた。

「アンタ、自分で言ってたじゃないですか？ 『一本の腕に骨を集めたのが、この“龍の腕”』って……。ソレを聞いた時、思ったんです……。もしかしたら、その技を発動させてる間は、他の骨の硬度が落ちてるんじゃないかって……。！ 実際、“龍の腕”を出してから、左腕は細くなってるし……。！」

話を聞いた雷電は、グツと歯を食いしばった。凶星だった。

青年の読み通り、雷電の“龍の腕”や“双龍の牙”は、他の骨を集束させて更に硬度を高めて相手を押し潰す技。それ故に、強化された手足以外の肉体は、著しく硬度が低くなるのだ。攻撃力を高める為に、全身の防御力を捨てる諸刃の剣でもあった。

青年は、努めて不敵な笑みを向けてやった。

「アンタ、喋り過ぎたんですよ……。！ 相手の前で、ベラベラと自分の能力を喋るなんて、愚の骨頂ですよ……。！」

「ぐう……。！ うぐうううううああああああ……。！」

歪む雷電の顔に、何筋もの赤い線が伸びた。羽衣狐の尾によって作られた斬り傷から、赤い液体を滴らせる。肌の部分だけでなく、白い眼球にも線は入り、流れ出る血によって真っ赤に染められる。端正な顔が、真っ赤な鮮血の化粧を施され、おぞましい顔に変わった。

死の淵に立たされた雷電は、心中に叫ぶ。

——ば、馬鹿な……。！ 馬鹿な、馬鹿な……。！ たかが人間如きに、オレの……。オレの能力を見抜かれ……。！？ 何だっ……。？ 何なんだよ、コイツ……。！？

圓潮から聞かされていた話を、雷電は忘れていた。
京都は式條城での決戦で、塵地蔵を名乗った山ン本の目玉が一人の人間によって葬られた事を。

「お前は、自分が見下した人間によって死ぬのだ……！」
「ぶあばB Aあああつ……！？」

羽衣狐の睨みを受けた瞬間、ソレが合図のように雷電の顔は細切れに崩れた。

頭を失くした太い首の断面から、夥おびただしい量の鮮血が噴水のように噴き出た。血の噴出の勢いで、巨体は揺れ、やがて操り糸が切れた人形のように地面に倒れる。瓦礫の上に倒れた壊れた人形は、二度と動く事は無かった。

物言わぬ骸むくろと化した雷電を、羽衣狐は恐ろしく無表情な顔で見下ろす。漆黒の瞳は、冷たい眼差しを向けている。その瞳は、哀れんでも笑っているのでもなく、ただ見下しの念のみがこもっていた。

「ふつ……！　たいした硬さじゃ……！」

闘いの一部始終を観ていた安心院は、主である青年の気付きに薄う笑みを浮かべた。

——やはり、僕の目に狂いは無かったぜ……！　僕の使い手になるには、強さ以上に“気付き”が重要だからな。わざわざ鈴の音を鳴らして、呼び寄せた甲斐があつたってものさ。気付きに長け、妖に好かれた人間君、キミこそ僕の主に相応しいぜっ……！

四の幕（後書き）

今回の雷電の倒し方は、あくまで原作での本人の台詞、状態から作者なりに考察した結果です。実際のところは、解りませんが、あり得そうな事だったので自己解釈で描かせていただきました。

五の幕

助かったあ、と青年は溜め息をついた。ソレは安堵であり、緊張を吐き出す行為でもあった。

雷電を倒して、羽衣狐が助かり、安心し切った青年は全身の力が抜けて地面に座り込んだ。正直、小心者の自分には心臓に悪過ぎる読みが当たってくれたからよかったものの、外れていたら羽衣狐は雷電の巨大硬質の壁に挟まれて潰されていたかもしれない。勘弁してくれ、と心底思った。羽衣狐が目の前から在いなくなるなんて、想像しただけで恐ろしく、胸が苦しく辛い事だ。

安心感から頂垂れていると、影が歩み寄ってきた。

「人間」

「は……羽衣狐……！」

顔を上げた彼の目の前に、羽衣狐が立っていた。黒い目を細めて微笑みを浮かべ、青年に手を差し伸べた。

「立てるか？」

「は、はい……」

手を掴み、羽衣狐の体温を掌に感じる。ソレで、彼女は生きて目の前に在るんだと実感した。

引っ張られて、青年は立ち上がった。まだ先ほどの恐怖が抜け切らず、足が小刻みに震えている。妖同士の戦闘の迫力もあるが、やはり、羽衣狐を失うかも、と言う恐れが大部分を占めていた。最愛ひとの女性を目の前で失う事は、自分が死ぬ恐怖に等しいのだ。

次の瞬間、気持ちを抑えられず、青年は羽衣狐に抱き付いていた。人目も気にせず、腕に力を込めて、ただただ放さないように抱き締

める。

急に抱き締められ、羽衣狐は動揺する。

「人間……？」

「よかった……！ ホントに、無事でよかった……！ 羽衣狐え……！」

羽衣狐の耳元で、青年は涙声を漏らす。

彼の想いを察して、羽衣狐は優しく抱きしめ返して、慰めるように背中を擦った。雷電を相手にしていた時とは真逆な、温かみある微笑みで囁く。

「心配をかけてすまぬな。じゃが、お主のお陰で助かった……！」

お主が居たからこそ、妾は生きている……！ 感謝しておる……！」

「羽衣狐……！」

あまり見せない彼女の優しさに、青年は目のダムが決壊して涙を流した。

ややあつて、安心院が声を差し込んだ。

「良い感じになってるところ悪いけど、キミ達、いつまでもラブコメ漫画みたいにイチヤついてる場合じゃないと思うぜ？」

ハッと我に返った羽衣狐と青年は、顔を横に向けた。視界に入っただのは、二人の雰囲気顔に顔を赤くして、気まずそうに目を逸らしてそわそわしてるリク才達だった。慌てて離れ、咳払いをして気を取り直した。

気まずい雰囲気が幾らか払拭したところで、安心院はリク才達に振り返った。

「さて、それじゃあまずは状況確認と行こうか。僕達は東京に来たばかりだからね。キミ達が知ってる範囲で、状況を教えてくれないかい？」

安心院の問いに、雪女の氷麗が答えた。

敵は百物語組と言う妖怪組織で、奴良組とは約三百年の因縁がある仇敵だ。連中は、例の<件>の予言で人間達にリクオの正体をバラし、更に彼を殺さなければ日本が滅びると刷り込ませ、リクオ殺害をけしかけた。しかも敵は、リクオ達に“あるゲーム”を提示した。ソレは、百物語組の圓潮曰く「簡単な追いかっこ」だそうだ。百物語組が人間を襲い、人間は自分達が助かる為にリクオ達に襲い掛かり、リクオ達は百物語組を追い掛ける。タイムリミットは明朝夜明け午前七時で、残り約14時間。それまでに、百物語組の幹部である口、耳、腕、面の皮、骨、鼻、脳を潰さなければ負けとなる。先ほどリクオが、雷電と問答していたのは、この事だ。

説明を聞いて、大体の事情は理解した。

「なるほどなるほど。状況は解ったよ。けど、まさか百物語組とはね……まだしぶとく生き残ってたんだ」

「ん？ 安心院って言ったか。アンタ、奴等を知ってるのか？」

「いや、昔、噂で聞いた程度さ。怪談で妖を生み出して、江戸の町を恐怖で埋め尽くそうとしたくらねーカス集団ってね」

「……最後の方は、明らかにアンタの個人的意見だよな」

安心院と言う女を、何となく理解し始めたリクオは、苦笑いを浮かべた。

暢気で落ち着いた様子の安心院とは反対に、思ったより深刻な状況に青年は顔を陰しくさせる。

「こりゃあ、早いトコ敵を倒さないとヤバいんじゃないの？」

「ああ。羽衣狐が骨の雷電を倒したから、残りは六人だ。急いで捜し出さねーと……！」

早速、捜しに動こうとした時、リクオは何かに気付いて足を止めた。

突如、飛来物が迫り、リクオは咄嗟に片手で受け止める。ソレは、木製の鞘に収められた長ドスだった。

「な、何っ……！？」

長ドスが飛んできた方を見て、氷麗は慌てて身構える。

青年も警戒して体を強張らせ、羽衣狐が庇うように前に立つ。

瓦礫の山に降り立ち、一同の前に現れたのは一人の男だった。黒髪の少年で、額に鉢巻を巻いて、目つきが鋭い。立ち振る舞いに隙が無く、背中には鎌を背負って、タダ者で無い雰囲気を纏っている。少年を見て、氷麗は驚いた様子で声を上げた。

「貴方は、遠野勢のイタクっ！」

「何だ、追ってきたのか」

リクオが歩み寄り、イタクと呼ばれる男と話し込む。

二人の様子を眺め、青年は氷麗に尋ねた。

「氷麗さん……あの男、誰ですか？」

「あの男は、遠野妖怪のイタクです。京都の闘いで一度、奴良組わたしたちに協力してくれたんですけど……まさか、こんな所でまた会うなんて

……」

京都の闘いにも参戦してたと聞いて、青年は記憶を辿った。

あの時は、両軍入り乱れての乱戦、混戦となっていたので、全員

の顔など覚えていない。それに、初めての妖怪合戦に度肝を抜き、鵜の復活など、刺激的で衝撃の展開の連続だったので、覚えるどころではなかった。なので、京都で見かけたかもしれないが、全く記憶に無い。

まあ、味方ならいいか、と楽観的に自己完結した。
すると、イタクがこちらに気付いた。

「なんだ……京妖怪も居たのか」

「何じゃ？ 居たら何だと言うのだ？」

イタクと羽衣狐が睨み合い、険悪な空気が生まれる。

京妖怪は、遠野勢を都合の良い道具として扱ってきた頃があり、その事で連中から毛嫌いされているのだ。奴良組と同盟を結んだ事は知っているが、そう簡単に両者のわだかまりは消えない。

近寄りがたい空気に怯え、氷麗と青年は寄り添う。

「あ、貴方、羽衣狐の恋人なんでしょう？ 何とかして下さいよ……！」

「無理無理無理……！ だって、人間如きが入り込む余地なんてないもん……！ 割って入った瞬間に、殺されそうな空気じゃないっすか……！」

とてもじゃないが、今の二人に声をかけるなど、命知らずな事は出来ない。

安心院も止めようとせず、寧ろ二人の険悪さを愉しんでるように眺めている。

呆れたリクオが、睨み合うイタクと羽衣狐に声をかけようとした時だった。

「リクオ様！ ご報告申し上げます！」

空から三羽鴉の一人、黒羽丸くろはまるが一同の前に降り立った。額に汗を滲ませ、酷く焦った様子をしている。

「ただいま、渋谷駅を中心に妖怪が大量出沒中！ 繁華街を埋め尽くす妖怪に襲われ、人間は大パニックです！」

「何っ!？」

「現地に入った奴良組組員の情報によりますと、まるで渋谷から……妖怪が生まれているかのようだ」とのこと……！」

衝撃の報告を受け、リクオ達の顔に動揺が走る。

しかし、そこは関東妖怪総元締めである奴良組三代目だ。すぐに動揺を収め、目つきを鋭くさせた。

「百物語……！ 誰かが、ソコで生んでるって事かつ……！
行くぞっ！ 次は渋谷に向かうっ！」

刃を構え、リクオは仲間を連れて次なる闘いの場に向かう。

仕切るリクオに羽衣狐が不満顔をするが、状況を考えて文句は控えた。そして近くに居た京妖怪に、奴良組に加勢して、百物語組の妖怪を一匹残らず根絶やしにする事を部下に伝えるよう命じた。

蛇二ヨ口に乗っているカナは、リクオの命と一緒に連れていく事になった。狂暴な妖怪が蔓延る街中で、一人にしておくのは危険だ。自分達の傍に置いた方が、安全だと判断したのだ。

改めて一同は、揃って渋谷を目指して駆け出した。

一緒に来る事を志願したカナに若干のジェラシーを抱きつつ、氷麗は気になっていた事を彼に相談する。

「あの、ちょっといいかしら？」

「え？ 何ですか？」

返事をしたのは、傍を走る青年だ。退魔の剣を片手に、背中にはリュックを背負っている。

口元に白い着物の裾を添えながら、氷麗が言う。

「実は、この“鬼ごっこ”のルールで気になる事があるんです」
「気になること？」と片眉を上げる青年。

「百物語組が人間を襲い、人間がリクオ様を襲い、私達が百物語組を追うルールになってるんですけど……私達が“人間を襲う妖怪”を倒したら、残りは幹部のみで、このジャンケンのような鬼ごっこは成立しないんです……！ ココが、引っ掛かりまして……」

話を聞いた青年は、ふむ、と疑問に頭を働かせて考えた。

確かに、気になる点ではある。まさか、幹部連中まで表立って人間を襲いまくる訳でもあるまい。雷電の場合は、見るからに喧嘩っ早そうな性格だったが、幹部全員がそうとは限らない。それに、雷電も「これは鬼ごっこであって鬼ごっこじゃねー！」と不可解な事を言っていた。改めて考えてみると、どうにも引っ掛かる。

そもそも、連中は何でこんな面倒な事を仕掛けてきたのだろうか？ 戦力分散が狙いだとしても、こんなルールは必要ない。それこそルール無用に散らばって、単純に暴れまわればいいだけだ。

頭をフル回転させて、青年は氷麗の疑問に答えた。

「自分、馬鹿なんで細かい事は苦手なんですけど……もしかしたら、時間稼ぎかもしれません」

「時間稼ぎ？」

「はい。連中には、何か別の目的があって、ソレを達成させる為にこんな面倒なルールを設けたんだと思います」

「なかなか、良い線いってると思っぜ、主君」

すぐ後ろを付いてくる安心院が、同意を示した。

羽衣狐やリク才達は、黙って話を聞いている。

「まあ、流石に何が目的なのかは解らないですけど……。ただ、気になる事なら、俺も一つありまして……」

「何ですか？」

「リク才を狙ってる人達の様子ですよ。

リク才を殺さなきゃ日本が滅びる……。こんな予言一つで、大勢の人が殺気だって動くなんて考え難いんですよ。いや、現状なら解りますよ？ 実際に街に妖怪の群れが現れて、人を襲ってる今なら納得出来ます。でも、氷麗さんの話だと、妖怪の群れが現れる前に二人は人間に襲われた……。！ コレが引つ掛かるんです……。！

確かに、人間って生き物は、情報に左右されやすいです。ネットとか、ニュースとか色々……。けど、今回は違う。＜件＞と言う“妖怪”の予言が情報源だ……。！ こんなモノを本気で信じて、鵜呑みにする人間なんてたかが知れてる……。！ 多くても、実際に＜件＞の予言に立ち合って聞いた極僅かな妖怪オタクのみ。俺だって、ネットで見つけた時は信じなかった。でも、氷麗さんとリク才は、かなり大人数の人に襲われた。しかも相手は、本気で殺す^{マジ}気度かかってきたんですよ……。？ 全員が直接予言を聞いた連中とは思えない。多分、俺みたいにネットとかで間接的に知ったハズです。そう考えると、全員が本気で殺しにかかってきたのは、どうもおかしい……。妙な違和感が……。！」

現実主義の現代で、妖怪の予言なんて不確定要素以下の情報を信じる人間なんて、一握りしかない。ましてや、その類に興味の無い人は、馬鹿にして笑う程度でソレ以上の関心は持たない。

しかし、現実には妖怪の予言を信じて、リク才を襲っていた。何か引つ掛かる。

考え込んでいると、羽衣狐が言った。

「塵地蔵のような、催眠の類かも知れぬ……」
「催眠……！」

そうだ。そんな感じだ。まるで、街の人達が何かに操られてるよう
うな。

ソコで、再び安心院が口を挟んだ。

「うんうん。二人共、なかなかの気付きと考察だぜ。でも、催眠と
は少し違うかな」

「どういう事ですか？」

「予言と言つやり方から考えるに、敵は恐らく“言霊”ことだまを使つて
る。噂自体に“畏”を乗せて、聞いた人間を操り、更に人から人に
噂は広がって言霊の規模も広がっていく……！ たった一つの噂で、
何十何百人もの人間を操る呪詛となつてゐるんだと思つぜ……！ 全
く姑息な手を使う、厄介な相手だぜ……！」

安心院の笑顔で語られた見解を聞き、一同は心中で納得した。
ただの噂だけで、大勢の人間の行動を支配するなんて不可能だ。
しかし、安心院が言うように言霊などの仕掛けが施してあるとすれ
ば、可能性はある。いや、そうとしか思えない。

「問題は、誰が言霊使いかじゃが……」
「アイツだつ……！」

心当たりがあるらしく、リクオは表情を陰しくさせた。鋭くした
目は、この場に居ない敵を睨んでいる。

「圓潮だつ……！ 奴は自分を嘶家と言つていた……！ 恐らく、
口の妖怪で言霊使いだつ……！」

青年の気付きで、リクオは自分が真に倒すべき敵を見極めた。

「どうするんだ、リクオ？ 先にその圓潮って奴を捜すのか？」

隣を走るイタクが、確認した。
ややあつて、リクオは答えた。

「いや、まずは渋谷だっ！ 妖を生む奴が居るってんなら、放っておく訳にはいかねえ！ まずはソイツをたたつ斬るっ……！」

「リクオ……くん」

リクオの決断を聞いて、カナは思わず微笑んだ。他人を見捨てないところが、自分の知ってるリクオと同じで嬉しく思ったのである。行動の道筋が決まったところで、安心院が青年に言った。

「さて、それじゃあボチボチとキミも闘おうか、主君。その際、キミに一つ課題を出そう」

「課題……？」

怪訝そうに片眉を上げる青年に、安心院は笑顔で超難題を口にした。

「安心院さんからの課題——『羽衣狐から離れて勝とう！』」

番外編：足（前書き）

過激な描写にご注意ください。
ちなみに、安心院さんと出逢う前の話です。

番外編：足

薄暗い室内に、漆黒の衣を纏った白い素肌の美しい少女が、椅子に座っていた。頬を朱に染め、快感を憶えた顔で自分の足先を見下ろしている。

視線の先——伸ばした足の前には人影があり、足の指先に顔を近づけていた。跪くように座る人影は、開いた口から赤い舌を出して、目の前に差し出されている黒いストッキングを穿いた足の指先を舐める。濡れた舌を這わせて、ひたすら舐め続ける。汗臭い匂いが鼻を刺激するも、彼にとっては良い匂いだった。

犬のように足を舐める男を見下ろして、漆黒の美少女——羽衣狐は妖艶な笑みを浮かべていた。黒い瞳には、サディスティックな光が宿っていた。

「ふふ……！ まったく、喜んで足を舐めるとは、本当に変態だな……！」

罵倒する羽衣狐だが、彼女自身も興奮して息を少し荒くしている。彼女の足を舐める青年は、激しい羞恥心を抱くも、同時に何とも言い難い快感を感じていた。羽衣狐の責めを受け続け、堕ちるところまで堕ちてしまったのである。顔を赤く紅潮させ、荒げた息を当てながら黒い足を舐める。時には指先を咥え、口の中で舐め回す。擦ったさに時折、羽衣狐はピクンツと体が小さく跳ねた。

「そ、そうじゃ……！ ちゃんと指先から……んっ……シツカリ、舐めるのだ……！」

興奮が昂り、顔の熱も上がって恍惚とした表情を浮かべる。奴隷のように自分の足を舐めさせている青年を見下ろす羽衣狐は、

愛する男を跪かせる背徳感を憶えながらも、支配欲を満たす快感にゾクゾクする。いけないと思っても、虐めてしまう。足を舐めさせ、自分だけを見つめさせ、自分の虜にさせて、我が物とする。

ふと羽衣狐の目に、青年の唾液まみれになったストッキングが映った。愛しい男の唾液を舐めたい衝動に駆られ、妖しく舌舐めずりをして唇を濡らす。いや、駄目だ、と心中に思い止まる。今は自分が上で、人間が下なのだ。この唾液は、行為が済んだ後で、ゆっくりと味わえばいい。

「よし……！ では、もう片方も舐めよ……！」

濡れた黒いストッキングの足を引っ込め、控えていた左足を代わりに差し出した。

左足はストッキングを脱いで、普段は見せない綺麗な御魅足おみあしを晒す。淡い光の下に出され、白い素肌は雪のように冷たく透き通った美しい印象を受ける。穢す事を許されない美脚を、半ば獣けだものと化した青年の前に突き出す。

「さあ、舐めよ……！」

「はい……！ 羽衣狐様……！」

変態の泥沼に、とうとう全身まで浸かってしまった青年は、興奮を抑えずに禁断の行為に出る。

触れる事すら戸惑われる御魅足に、濡れた舌を這わせた。思い切った大きく開いた口の中に咥え、中で丹念に指と指の間まで舐めて愛撫する。

「あつ……！ く、撥った……！」

直に舌の感触を肌で感じて、羽衣狐は荒い息遣いをより一層激し

くさせ、強い快感を味わう。

指の間から爪の隙間まで、満遍なく舌を這わされ、心地良い擦つたさを感じる。

すると、青年は口を指先から離して、涎の糸を引いた。物足りなさそうな羽衣狐だが、勿論コレで終わりではない。青年は舐めるポイントを変え、舌を出して足の甲に触れる。伸ばした舌先で、ゆつくりと甲の部分をなぞった。

その瞬間、ビクツと羽衣狐の体が跳ねた。

「ひゃうつ……！？ な、人間……！ お主、そんな、ああつ……！ あつ……！ あつ……！ ひい……！」

初めて味わう快感が、足の甲から全身に伝わり、開いた口から嬌声を上げ、背筋に寒気が走るようなゾクゾクした感じがして、全身を震わせる。何度も甲をなぞられ、奇妙な快楽に襲われる。

——な、何じゃ……この、感覚は……！？ 人間め、いつの間に、妾わらわですら知らぬ、弱所を……！

愛する男に弱い所を舐められ、興奮が昂るあまり濡れた舌を突き出す羽衣狐。自分が女王の位置に居る事も忘れ、快楽に身を任せて悶える。珍しく責められ続け、下半身も熱を帯びる。青年も羽衣狐の嬌声に完全に抑えが効かなくなり、執拗に何度も舌でなぞり、スベスベな素肌を味わい、唾液で濡らしていく。

「はっ……！ よ、止せ……！ やめろ……！ わ、妾……軽く、果ててしまう……！ んっ……！」

Sだからこそ打たれ弱い、ガラスの剣しるしと言うのは本当のようだ。甘い吐息を荒げる羽衣狐は、身体を強張らせて目をキツく閉じた。スカートの中の黒いショーツに、小さな染みが生じて一層色が濃くなる。羽衣狐は、軽い絶頂を迎えた。

しばし快感の余韻に浸り、息を整えていた羽衣狐だったが、すぐにキツと目を鋭くして青年を睨んだ。

「調子に乗り過ぎだっ……！」

「うああああああっ！」

感情に任せて、黒いストッキングを穿いた足で青年の股間を攻撃した。大事な部分を足蹴にされて、青年は目を閉じて悲鳴を上げた。反撃に転じた羽衣狐は、サディスティックな笑みを浮かべて弄る青年を見下ろす。

「そらっ！ 足蹴にされて感じるのだろう？ よく味わうがいいっ……！ この変態めっ！」

罵倒しながら、足を巧みに動かして、青年の股間を刺激する。興奮して面白がる羽衣狐は、容赦無く責め続けた。

——きいいい！ 私のお姉様の御魅足を、人間なんかにイイイイイ！

お慕いしてる狐様の足を味わってる人間に、コッソリ覗き見てる狂骨が、おどろおどろしい嫉妬の炎を燃やしていた。

番外編：足（後書き）

安心院先生の豆知識？

安心院先生「良い子の皆、知ってるかい？ 昔の少年ジャンプには、男の恥ずかしい染みネタが普通に使われてた漫画があっただぜ。

現代でも女の子のパンチラとか下着姿が目立つし、少年誌なのに昔も今も過激なのは変わらないよ」

六の幕

安心院からの課題——ソレは、『羽衣狐から離れて勝とう！』と言う青年にとつて、超難題なモノだった。

驚きの課題に、青年は動揺のあまり駆ける足を止めそうになったが、何とか走り続けた。切羽詰まった現状では、一分一秒の僅かな時間すら惜しい。

そして、課題の名前に上げられた羽衣狐も、目を見開いて安心院を睨んだ。一人では無力に等しい愛する青年を追いつ込むような真似に対する怒り、自分から引き離して何かよからぬ事を企んでるのはと言う疑念が混ざった鋭い眼差しを向ける。

羽衣狐が口を開く前に、安心院は先に言った。

「おっと、妙な早とちりや勘違いしないでくれよ、羽衣狐。前にも言ったけど、僕はキミの恋人を奪うつもりは無いし、主である人間君を死なせるつもりも無いぜ。この課題は、前に僕と身体を馴染ませた行為と同様に、彼にとって必要な事なのさ」

「……言うてみよ」

鋭い目つきのまま、羽衣狐が説明を促した。

走りながら安心院は、息を乱す事無く説明をする。

「なあに、簡単な事だよ。主君の周りから、『助っ人』を無くしたいのさ！ 僕はその場に居合わせていないけど、多分、これまでの闘いで主君は羽衣狐に助けられてきたと思うんだ。さっきの雷電との勝負だつて、主君は助言程度で実際に倒したのは羽衣狐だろ？

そんな助けられ、助言程度の脇役ポジションで、しかも凡人の主君が、この先の妖大戦で勝ち、生き残れると思ってるのかい？ 今は大丈夫でも、その内限界がきて、必ず取り返しのつかない事になる

ぜ……！」

安心院の言葉を聞いて、羽衣狐は押し黙ってしまふ。

今のところ、反論の余地は無い。安心院が言ってる事は、正しい。式條城での塵地藏との闘いも、最後は羽衣狐に助けられていなければ、青年は間違いなく地獄に堕ちていた。

リクオ達も口を挟まず、黙って耳を傾けてるだけだった。

無言は理解の証と捉えて、安心院は続ける。

「だから僕は、次の戦場となる渋谷では羽衣狐は勿論、リクオ君達やその他からの助けも一切無しにした状況で主君を闘わせる……！　そろそろ“他人に助けられてばかりな自分”を卒業して、“たまに助けられても決めるべきところは自分で決める自分”になって欲しいんだっ……！」

そこで羽衣狐への説明を終わらせ、前を走る青年の背中に話しかけた。

「主君……キミだつてそうだろう？　いつまでも護られ、助けられてばかりいる自分に嫌気が差したからこそ、退魔^{ほく}の剣を求めたんじゃないのかい？　今が機会^{チャンス}だぜ……？　ココで羽衣狐から一旦離れて、僕を扱うキミの力で妖を倒して、勝利をもぎ取るんだ……！　まあ、護られてばかりで良い、恐いから嫌だ、と断るなら無理強いはしない。アッサリと、僕は身を引くよ。軟弱以下の真正正銘のクズに用は無いぜっ……！　負け犬以下のくだらねーカスは、惨めに大好きな女の尻の後ろで護られてろっ……！」

安心院の笑みが、一変した。

これまで穏やかに、可笑しそうに、愉快に笑っていた安心院。喜怒哀楽で言うところの“楽”の笑顔が、今この時は、異質な笑みで

青年を見下ろしている。見下し、馬鹿にした侮蔑の意では無い。半ば興味を失いかけているような、“どうでもいいモノを見るような目”だ。返答次第では、彼女の青年に対する興味や関心は完全に消え失せ、どうでもいい存在と認識されるだろう。全ての妖怪がただのくだらねーカス、と言うのと同じ枠組みになるのだ。

最後は厳し過ぎる言葉だが、全体的には安心院の言ってる事は間違っていない。特に最後の辺りは、的を射ている。晴明に闘いもせず敗れた青年は、確かに負け犬以下の存在だ。

一同が事の成り行きを見守る中、青年は険しい顔で、歯を食いしばっていた。

彼は、安心院から迫られた選択肢に、迷っているのではない。そうではなく、怒っていた。課題を聞かされて、怖気づいた自分に憤りを感じているのだ。安心院の言った通り、いつまでも羽衣狐に護られてばかりいる自分を不甲斐無く、恰好悪く思い、自分の手で晴明を倒したいと決め、退魔の剣を求めた。なのに、いざ一人で闘えと要求された時に、怯え、躊躇した。臆病な性格だから仕方ないかもしれないが、それでも、そんな自分を恥じて、情けなく思い、憤った。

そして、青年は答えた。

「やるっ……！ やります、安心院さんっ……！」
「人間っ……！？」

青年の決断に、羽衣狐は目を丸くして声を上げた。
申し訳なさそうに目を伏せ、青年は彼女に言った。

「すみません、羽衣狐……！ でも、安心院さんの言う通りなんです……！ 羽衣狐に護られるのは居心地が良いけど、ずっとこのままじゃあ、流石に駄目……！ そりゃあ、確かにスッゲー恐いですけど……この機を逃せば、俺、本当に真正銘のクズになっちゃう

……！　ココで断つて、今は良くて、後々モヤモヤした気持ちを抱えて、きつと後悔する……！　だから……！」

羽衣狐に心配をかける事になるが、惚れた女を護れないどころか、ずつと護られっぱなしの男にはなりたくない。

だから、安心院の協力を得て、退魔の剣を手にした時に決めたのだ。闘える力を持った自分が、羽衣狐を護るのだと。ココで安心院の課題を投げたら、その決意が無意味になるところか、口先だけの中身の無い嘘になってしまう。

羽衣狐が猛反対しても、ココは譲れない。

「人間……！」

隣を走る羽衣狐は、辛そうに顔を歪め、目を逸らした。

彼女は、失う事に臆病になっていた。愛する晴明が我が身から離れ、更に恋人である青年まで在なくなるなど、恐くて恐くて、想像するだけで息苦しくなり、身を震わせてしまう。

だが、青年の顔は、決意を固めた表情をしていた。目にも光が宿り、心の揺らぎが見られない。おそらく、こちらがどんなに説得して引き止めようと、青年は決断を変えはしないだろう。

胸の苦しみを抱えるも、羽衣狐も覚悟を決めて言った。

「……分かった。妾は、もう何も言わぬ……！」

「羽衣狐……。すいません……。ありがとうございます……。！」

青年は勝手な決断を謝り、ソレを許してくれた羽衣狐に感謝した。二人のやり取りを見て、安心院は満面の笑みを浮かべた。

「よく決断してくれたぜ、主君。羽衣狐も、男の決断を許した器の広さに感謝するよ。だから大好きだぜ、キミ達……。！　まあ、安心

したまえ（安心院だけに）……！ 主君に使われる退魔の剣として、その半身として、僕が全力でサポートするからさ！」

「安心院さん……！」

顔だけ振り向く青年に、安心院は珍しく真顔で頭を下げた。

「さっきの暴言を詫びるよ、主君。キミを試す為とは言え、酷い暴言を吐いた。

そして改めてキミを主と認め、誓おう！ 僕はキミの剣となり、力となるよ！ 僕がキミを助けるんじゃない、キミが僕を使うんだっ……！ キミの剣である僕は、人間^{ひと}では無くキミの道具だからね。遠慮せずに命じて使いたまえ……！」

*

渋谷は、夥しい量の妖怪が蔓延り、恐ろしくおぞましい地獄絵図と化していた。

人の形から昆虫、動物、異形の化け物等、多種多様な姿の妖怪が次々と生まれ、人々に襲いかかっている。車やバイクはひっくり返り、割れた窓ガラスには血のペンキが塗られ、あちこちに妖怪と人間の骸が転がっている。やはり人間の死体の数が圧倒的に多く、血の池が溜まるアスファルトの地面には頭や腕を失くし、腹をかつさかばれて胃や大腸等の内臓をブチ撒け、生々しく残酷な光景と化した渋谷の街は、まさしく地獄絵図と呼ぶに相応しい。

この地獄絵図を描き上げた妖怪絵師、鏡斎は渋谷の108の入り口前に居た。褐色の肌^{すずい}に、白い着物を着た長身の男で、左手には道具の筆と黒い硯^{すずい}が握られている。この道具を使って、妖怪の絵を描き、生み出しているのだ。彼こそ、妖怪を生み出す“山本^{さんぽん}の腕”

である。

己の欲に忠実に動く鏡斎は、新たな標的を見つけていた。彼の前に、二人の女子中学生が妖怪に囲まれ、逃げ場を失くして立ち尽くしている。長髪の女子生徒は巻紗織、黒髪を後ろに束ねて短いポニテールにしてる女子生徒は鳥居夏実。二人共、リクオのクラスメイトだ。危険地帯と化した108の中から何とか脱出したが、外で妖怪に囲まれて恐怖に蒼ざめた顔で震えている。

怯える少女二人を見て、鏡斎は薄く笑う。

「さて、キミ達を妖怪にしたらどのようなのかな……」

創作意欲に駆られ、ゆっくりと歩み寄る。

すると、鳥居が巻を庇うように前に出た。胸の内の恐怖を必死に抑え込んで、鏡斎の前に立つ。

「お願い……！ 巻は助けて……！ 私が代わりになるから……！」
「鳥居っ……！？ 何やってんだよ……！？」

後ろで巻が声を上げた。

実は、鳥居は以前に鏡斎の作品として一度描かれている。地下鉄に現れる幽霊少女として、怪談の犠牲者となるが、奴良組によって救出された。鏡斎の恐ろしさを味わった事がある彼女が抱く恐怖は、並大抵ではないだろう。

歩みを止めて、鏡斎は親友を庇う鳥居を見据える。

「ホウ……キミが……。いいね……美しい友情だ」

次の瞬間、鏡斎は右手に持つ鞭を振り抜く。黒い鞭の先は、鳥居の左手首に巻き付いた。

その際に、手首に巻かれてる数珠が露にされた。

「あつ……！」

鳥居の顔が、凍りついた。

手首に付けてる数珠は、京都に行った時に陰陽師の魔魅流から貰った護身用の道具である。手首に付け、近距離で妖怪を拒絶する心を持つと滅する事が出来る。ただし効果は一度つきりで、使用後は碎けてしまう。

108内で巻が同じ物を使ったのを見ている鏡斎は、彼女の意図に気付いていた。

「キミも、その数珠をしたのか……。オレが近付くのを狙ってたのかい？ 悪い娘だ……」

鞭を操って手首を捻り、数珠を遠ざけるように鳥居を引き寄せる。

「あ……あ……！」

「まあ、キミの友情に免じて友達には手を出さないよ。その代わりに、キミを妖怪にする。そして、キミが……その娘を喰べるんだっ……」

「！」

「えっ……！？」

残酷な事を告げられ、鳥居の顔が恐怖で蒼ざめる。

鏡斎は鞭を口に咥え、右手に筆、左手に硯と道具を持って作業準備をする。少女の無防備な背中を見て、鏡斎は描く妖怪のモデルを考える。

「いいだろう？ そんなに友達思いなら、お互いの肉がどんな味か知りたくなる事もあるだろう」

「い……いやっ……！ そんなの……嫌あつ……！」

目に涙を浮かべ、かぶりを振って鳥居は必死に拒絶する。だが、肝心の数珠は遠ざけられ、身動きが取れない状態で成す術が無い。

「夏実イイイ！」

巻が声を上げる。助けに行きたいが、妖怪の壁が邪魔をして前に進めない。

「さて、どんな妖にしようかな」

狂気に歪んだ笑みを浮かべ、背中に筆を走らせる鏡斎。
その時だった。

妖怪の群れの一ヶ所が盛り上がり、風船のように破裂した。肉片と血を撒き散らす中から飛び出たのは、両手に長ドスを逆手に、二刀流の構えを取ったリクオだ。

しかし、普通の夜リクオでは無い。髪の毛は更に伸び、左右に白と黒に色が分かれている。手に持つ二本の長ドスも、刃が黒く変色していた。

異変に気付いた鏡斎が、鳥居から目を離した。

「アレは……」

鏡斎が見ている前で、リクオは襲いかかる妖怪の群れに二本の刃を振り抜く。

その瞬間、妖怪は木っ端微塵になって吹き飛んだ。たった一振りの斬撃で、複数の妖怪を仕留める殺傷力は凄まじい畏を纏っていた。京都の闘いが終結してからの半年間、リクオは何もしていなかった訳ではない。今まで『守り』に回っていた畏を『攻め』に振った。具体的に言えば、刃に畏を乗せて『斬撃』の威力を高めたのだ。自

分の畏を変える為に、再び遠野の地に赴き、イタクの指導の下、奴良組の地下隠し道場で密かに己を鍛えていた。その成果である。

成長したリクオに続いて、他の者達も駆け付ける。

羽衣狐は街灯の明かりを受けて煌めく金色の九尾を振るい、妖怪の首を刎^はね、血飛沫を撒き散らす。

氷麗も冷気を放ち、迫りくる妖怪を凍てつかせてる。

イタクは両の手に持つ鎌を振り抜き、真空の刃で敵を切り裂く。

一騎当千な強さで妖怪を蹴散らす一同の後ろに続いて、青年と安心院の姿が見える。凡人の彼は体力が平均的で、早くも息が上がっていた。

一人突っ走るリクオは、妖怪の群れを飛び越えて鏡斎の姿を捉える。

次の瞬間、右腕が宙を飛んだ。斬られた断面から血を撒き散らし、回転しながら地面に落ちた。

右腕を失った鏡斎が振り向くと、奪回した鳥居を抱えたリクオの姿があった。

「てめえか、妖怪を産み出してるとて奴あ……」

「キミは……奴良、リクオっ……！」

待ち侘びていた男の登場に、鏡斎は笑みを浮かべた。

突然、場に割り込んで鳥居を助けた男がリクオとは気付かず、巻は茫然と立ち尽くしている。

リクオは鋭い刃を向け、凄んだ声を鏡斎に放つ。

「てめえら、いい加減にしゃがれ。節操無く人間に手え出しやがって……！」

しかし対峙する鏡斎は、武器も持たない身で全く動揺をしない。それどころか、嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

「まさか、知り合いだったなんて……」

鏡斎の言葉が合図のように、鳥居の体に異変が発生した。

背中を中心に黒い影のようなモノが広がり、全身を塗りつぶしていく。得体の知れない恐ろしいモノに侵食され、鳥居は涙を流し、恐怖と苦痛に駆られた悲鳴を上げる。

ただならぬ事態に、彼女を抱えるリクオは動揺して、巻も取り乱す。

「な、何っ……？ 鳥居！？ おい、しっかりしろ！」

「夏実い！？」

一人離れた所で、鏡斎は愉しそうに眺めていた。

「面白い……面白いよ、奴良リクオ……！ 丁度今、キミの敵に相応しい妖を作ったところなんだよ……！」

模範は平安期……！ その美しい美貌を捨て、殺された父親の無念を晴らすべく、自ら闇に堕ちた大妖怪っ……！ 滝夜叉姫っ……！

鳥居の姿は、巨大な妖怪に変貌した。

黒い長髪を靡かせ、額に二本の角を生やした夜叉の顔、鋭い爪を持つ手には大きな薙刀が握られている。

妖怪と化した鳥居は、目の前のリクオに薙刀の刃を振り抜く。咄嗟に体を沈め、間一髪でリクオは刃を躲した。

変わり果てた親友の姿を目の当たりにして、巻はショックで涙を流す。

「あああ……！ ウソだ……ウソだあ……！ 夏実があ……！」

知り合い同士が争う図が出来て、鏡斎は嗤う。

「ようこそ、地獄絵図へ……！」

ココは、鏡斎が描く作品の中だ。

「ちょっ……何だよ、アレ……！？マジでかつ！？」

鳥居が妖怪に変えられた場面を少し離れた所から目撃して、青年は我が目を疑った。闇に堕ちた人間が妖怪に変化すると聞いた事はあるが、この目で見るのは初めてだ。しかも、当然と言えば当然だが、見てて気持ちの良いモノじゃない。

「やれやれ。厄介な事をしてくれるぜ。アレじゃあ、リクオ君は手が出せないね」

言葉とは裏腹に、安心院は笑顔だ。

だが、リクオが手を出せないのは事実だ。クラスメイトである以前に、人間を大切に思うリクオでは妖怪と化した鳥居は斬れない。

「しかし、そうなるとかなり分が悪いね。おそらく、ココに溜まっている妖怪の殆どは元・人間の妖怪だぜ」

「えっ！？」

「リクオ君が、その事実を知るのも時間の問題だよ。そうなったら、目の前の敵だけじゃなく、周りの妖怪達にも手が出せなくなる。リクオ君には絶大な効果だぜ」

力技の雷電の次は、狡猾な手段を講じる鏡斎。百物語組つてのは、

本当に厄介な連中だ。

「どうにか出来ないんですか？」

「なあに、簡単な解決法があるぜ。キミが剣^{ぼく}を解き放って斬ればいい……！ 人と妖の因果……僕の刃で断ち切ってやるよ……！」

自信満々の笑みを浮かべる安心院。

彼女の自信に賭ける事を決めた青年は、手に持つ退魔の剣を強く握った。震える両足を叩いて喝を入れ、覚悟を決めて前を見る。

「よしっ！ 行くぞっ……！」

妖怪の群れの大半は、羽衣狐達の方に集中している。リク才達の元に駆け付けるには、今がチャンスだ。地面を蹴って、安心院と共に突っ走る。

その途中、三匹の妖怪が襲いかかってきた。

「うわあああああああっ！」

悲鳴を上げ、青年は急ブレーキをかけて止まる。急な行動で体勢を後ろに崩して、地面に尻餅をつけてしまう。妖怪は容赦なく牙を剥き、喰い殺さんと迫りくる。

しかし、その牙が届く事は無かった。寸前で、迫りくる妖怪は体を弾かれた。

青年を取り囲むように、何枚もの白いお札が浮いていた。陰陽師が扱う札とは違う類で、不気味な一つ目の模様が描かれている。安心院が主である青年に与えた道具の一つで、妖怪から身を護る結果となるのだ。

「ひいひいひい！ だだ、大丈夫って解ってても、泣けてくるぜ……」

「！」

ビビって涙を流しながら、青年は足腰に力を入れて何とか立ち上がり、再び走り出した。

「夏実イイ！ 何やってんだよ——！ 何てことすんだ、バカア——！」

辿り着くと、妖怪と化した鳥居に泣きながら声を飛ばす巻に、背後から襲い掛かるうとする妖怪が目に入った。

「危ないっ！」

声を上げ、リュックから札を取り出そうとした時だった。

頭上から大きな塊が降ってきて、巻に迫る妖怪を押し潰した。肉を潰す不快な音を立て、無残な姿に変えた。

巻と青年は、助けに入ったモノを見上げて目を見開いた。

「がしゃどくろ！ それに、狂骨！」

「うわゝお。派手な登場だぜ」

「あいゝ！」

「ちよっと、何なのよ、この気持ち悪い妖怪！？」

間延びした声で答えたのは、巨大骸骨のがしゃどくろ。その頭に乗っているのは、狂骨だ。がしゃどくろの頭は、彼女の定位置になっている。

二人を見上げて、巻は怯えた声を漏らす。

「何だよ……？ 何なんだよ、アンタ達……！？」

「失礼な人間ね。助けてあげたんだから、感謝しなさいよ！」

「まままま、抑えてよ、狂骨！」

文句を言う狂骨を宥め、とりあえず巻が助かって青年は安堵する。それから、半ば混乱しかけてる巻に声をかけた。

「この二人は味方ですから、ソコでジツとして下さい！ 狂骨！
がしゃどくろ！ その娘頼んだ！」

「ちよっと！ 何勝手な事言ってるのよ！？」
「あいゝ！」

さつさとしてしまう青年に狂骨は声を飛ばし、がしゃどくろは相変わらず間抜けそうな返事をした。
途中色々あったが、何とかリクオ達が居る場に到着した。激しく息を乱して、辛そうな顔で一同を見る。

「や……やっと、着いた……！」

「アンタ……！」

「ん？」

滝夜叉姫と対峙してるリクオと、離れて見ている鏡斎が目を向けた。

二人の視線を受ける中、青年はある程度呼吸を整えて、右手に持つ退魔の剣を前にかざした。柄の頭部にある獅子の顔は、牙の生えた口を開けている。

青年の後ろで、安心院が絶やさなない笑顔で言う。

「さあ、ここからが本番だぜ、主君……！ 剣に三つの条件を示したまえ……！」

「はいっ……！ まずは……妖の“形”を得たりっ……！」

かちんっ、と獅子は音を立てて口を閉じた。

「“真”は……えーっと……。ソコの百物語組の妖怪のせいで、無理矢理妖怪に変化させられた人間の女性……でいいのかな……？」

自信なさげに、ついつい疑問形になってしまう。

しかし、かちんっ、とまたも獅子は歯を鳴らした。

これで、“形”と“真”——二つの条件が揃った。

「やった……！ あと一つ！」

「何をする気は知らないけど、邪魔だよ……！」

鏡斎が睨むと、滝夜叉姫は攻撃の矛先を青年に変えた。薙刀を構え、恐ろしい形相で襲いかかる。

「やめろ、鳥居っ！」

声を上げ、鳥居を止めようと二人の間に割って入ろうとして——
リクオは動きを止めた。

青年の背後に居る安心院が、笑みを向けてきたのだ。凄みをきかせた睨みでは無く、寒気を感じる笑顔だった。妖怪の畏とは違う、異質な不気味さを感じる。僕が言った課題忘れたのかい？ と目で語りかけている。思わずリクオは、一筋の汗を頬に流した。

その間に、滝夜叉姫は、身の丈程もある巨大な薙刀を標的に向かって振り下ろす。だが、刃はお札によって防がれた。目の前の圧倒的迫力に気圧され、青年は二度目の尻餅をつく。お札で護られていても、やはり恐いモノは恐い。そう簡単に恐怖を克服出来るモノじゃない。

だが、ここまで来たんだ。今更、後には引けない。
彼の意思を察した背後の安心院は、アドバイスをした。

「ここまできたら、もう一息だぜ。残るは“理”のみだ……！」

一つ言っておくが、鏡齋あやみの語った設定は全然無視して構わないぜ。あんな薄っぺらい設定なんて、妖怪にされた彼女達の本当の“理”じゃないからね。

さあ、彼女達の気持ちになって考えてみよう、主君。彼女達の“理”を……！ 彼女達の願い、目的は何か……？」

安心院の問い掛けに、青年は半ば恐怖で麻痺しつつある頭で考える。

ここに蔓延る妖怪は、皆、鏡齋によって無理矢理妖怪にされた女性達だ。いわば、犠牲者だ。彼女達は、望んで妖怪になった訳じゃない。

そう考えれば、おのずと答えは出てくる。

「人間に戻りたい……！ ソレが、“理”……！」

かちんつ、と三回目の音が鳴った。

退魔の剣に、三つの条件が示された。

阿阿阿阿阿阿阿阿阿阿つ！

剣に力が宿り、獅子は口を開いて雄叫びを上げた。青年を囲む札は、白から金色に変色した。

解放の時が、来た。

「“形”、“真”、“理”の三つにより、剣けんを、解き、放つ……！」

トキハナツ——っ！

青年の掛け声に、獅子は目を光らせて応えた。
次の瞬間、周りから建物、妖怪、リクオ、安心院達が消え、景色が変わった。文字通り、何も無い真っ白い空間に居た。

突然の異変に、青年は混乱して周辺を見渡す。空間には限りがなく、何処までも続いている感覚だ。

「やあ、よく来たね」

不意に、物凄く聞き覚えのある声が聞こえた。
後ろを振り返り、青年は目を見開いた。

「えっ……！？ 安心院、さん……？」

後ろに立っていたのは、オレンジ色のリボンで後ろにまとめた長い茶髪、白とピンク色を基調としたセーラー服、黒いニーソックスを穿いた女子中学生だった。

茶髪の女子中学生は、笑顔で青年を迎えた。

「ようこそ、主君。キミが来るのを、首を長くして待っていたよ。
ここからはキミのターンで、主人公無双の始まりだぜっ……！」

六の幕（後書き）

安心院先生「良い子の皆、元気かい？　今回から『安心院先生のこれで安っ心！　質問コーナー！』が始まるよー！　と言つても、読者からの質問なんかまだ来てないから、今回はコーナー始動のお知らせだけなんだけどね」

青年「先生」。質問と言うか、気になる事があります」

安心院先生「何だい？　いまだに名前が出てこない、名無しの主人公君」

青年「安心院先生は、一応『教師』と言う設定なのに、巫女装束を着てるのはおかしいと思います」

安心院先生「巫女装束コレが僕の制服なのさ。それじゃあ、今回はここまでだぜ。ばいばい」

七の幕

気が付けば青年は、何も無い真つ白な空間に居た。先ほどまで、大量の妖怪が蔓延る渋谷に居たのに、剣の条件を揃えた途端に風景が一変した。

ソコで出逢ったのは、安心院と同じだが少し容姿が異なる女子中学生だった。髪の色は茶色く、着ている衣服はピンク色のセーラー服で、足には黒いニーソックスを穿いている。ヘアカラーや服装こそ違うが、その可愛らしい顔は見間違える事も無く、安心院の顔だ。何がどうなってるのか解らず、異変に混乱する青年に、女子中学生は横ピースを決めて名乗った。

「僕とは初めましてになるね。僕は、力が解き放たれた安心院さ。封印バージョンの僕も言ってたと思うけど、僕の事は親しみを込めて安心院さんと呼びなさい」

「は、はあ……。初めまして……」

とりあえず青年は、目の前の安心院に会釈した。

神秘的な雰囲気 of 巫女安心院と違って、目の前のセーラー服安心院は学生特有の可愛らしさを醸し出している。ただし、可愛さのレベルは普通の女子中学生の比じゃない。それに、横ピースが彼女の魅力を更に倍増させている。

制服姿が新鮮に見えて、思わず青年は状況を忘れて見惚れてしまった。

彼の様子に、安心院は笑みを浮かべた。

「惚けたりなんかして、どうしたんだい？　もしかして、僕に見惚れてたりするのかな？」

「えっ……！？　あつ、いや、その……！」

我に返った青年は、動揺して顔を赤くする。視線を逸らして、何とか話も逸らそうと考えた。

「えーっと……そう！　ココは、何なんですか！？　俺と安心院さん以外に誰も居ないし、何も無いですけど……」

「必死にごまかそうとするなんて、可愛い男だぜ。もう少し弄ってもいいんだけど、ソレはまた次の機会にするとしよう。キミの質問に対する答えだが、ココはキミが居た世界とは違う別空間さ。そうだね、『遊戯王』のような主人公の心の中や『ドラゴンボール』の精神と時の部屋のような所、とも思ってくれていい。実際、ココと外の世界では時間経過の速さが違うからね」

ハア、と青年は短く答えた。

妖怪の中には領域型の畏を持つ種類が居て、人間界と隔離した空間を作り出すと聞いた事があるが、ソレとは別物だろう。第一、彼女は剣であって妖怪では無い。推測ではあるが、恐らくココは退魔の剣の中か何かだろう。力を解放する事によって、剣の中に引き込まれた。そんなところだろう。

「さて、いくら外より時間の進みが遅いとは言え、いつまでもお喋りしてる訳にはいかないね。それじゃあ、主君。剣ほくを使って、存分に活躍してきなさい！　という訳で……」

途中で言葉を切った安心院は、横ピースを解いて歩み寄ってきた。距離を詰めてくる安心院に、青年は困惑して後ろに引こうとせず、その場に立ち尽くす。甘く良い匂いを纏った、安心院の可愛い笑顔がすぐ目の前に迫る。

そして次の瞬間、

「いつてらっしゃいの、ちゅう」

青年の上唇と下唇に、安心院は自分の柔らかい唇を押し当てた。甘い味、柔らかい感触の接吻を受け、青年は顔の熱を急激に上げた。突然の事に反応出来ず、唇を奪われた後も固まって動けなくなる。

そして、視界から安心院の顔も消えて、今度こそ一面真っ白になった。

*

渋谷108前。

一同の前で、安心院が消えた直後、退魔の剣を解き放った青年の姿が変わった。

着ていた洋服は黒い着物に変化して、冷気を纏って辺りの気温を下げる。解放前には無かった威圧感を撒き散らし、周囲の妖怪を威嚇して、近づく事を許さない。弱腰な態度は微塵も無く、完全に別人と化していた。

「人間……？」

羽衣狐も尻尾の動きを止めて、変化した青年を見つめる。離れていても、感じて彼の異変は分かる。

不可解な現象に、鏡斎も目を細めた。リクオのような妖怪変化とは違い、妖力は全く感じない。

一同の注目を浴びる中、眼鏡の奥の目を鋭くさせて、青年は退魔の剣を強く握った。

同時に、彼の威圧感に当てられ、滝夜叉姫が薙刀を構えて襲い掛

かつてきた。滅茶苦茶に振り回し、触れた物を切り裂く刃の嵐を作る。

しかし、迫りくる滝夜叉姫に怯む事無く、青年は鞘を引き、刃を解き放った。鞘の中から現れたのは、七色に輝く幻想的な刃だった。柄の部分から、まるで燃え上がる炎のように伸びている。

巨大薙刀を上段から振り下ろす滝夜叉姫に、青年は退魔の剣を振り上げる。直後、甲高い音と共に、花火のような豪快で美しい火花が散った。薙刀の刃を受け止めた青年は、剣を斜めにズラして剣戟を流して、一気に懐に入り込む。

「おらあああああつ！」

気合い一閃、滝夜叉姫の巨体に横一文字の斬撃を走らせる。

斬られた箇所から、亀裂が広がっていく。顔に割れ目が入った瞬間、ガラスが砕け散るように滝夜叉姫の体は崩れた。

「なつみイイイイイ！」

親友が斬られ、消えていく場面を見て、巻はあらん限りの声で叫んだ。

夏実 は 死んだ。

そう思っていた皆の目に、驚きの光景が飛び込んできた。

崩れ落ちる滝夜叉姫の中から、鳥居夏実が出てきた。下に金色の札が何枚も敷かれ、衝撃を和らげて受け止める。

「な……夏実イイ！」

死んだと思われていた親友を見つけて、巻は驚きと喜びが混ざった声で名を呼んだ。

リクオ達も驚いて目を見開き、鏡斎も僅かながら動揺を露にする。

巻は急いで駆け寄り、鳥居の体を抱える。背中の部分の制服が破れているが、妖怪変化の発現箇所人間に戻った今では異常は無い。他に外傷も無く、気を失っているだけだ。

「夏実イ……！ 夏実イイイ！」

眠っている鳥居を抱き締め、巻は嗚咽を漏らす。

一方、滝夜叉姫を斬り、鳥居を人間に戻した青年は退魔の剣を片手に妖怪の群れに突っ込む。七色に燃え盛る刀身を伸ばし、一匹の妖怪に突き刺す。

「うおおおおおおおおおおおおお……！」

その場で回転を始め、花型の光を発しながら妖怪を斬り捨てていく。勢いは止まる事無く、次々と妖怪の胴が横真つ二つに切り裂かれ、血潮を撒き散らす。

刃の届かない間合いの外の妖怪は、跳躍して頭上から襲い掛かる。回転乱舞を続ける青年は、勢いを殺さず複数の金色の札を頭上に敷いた。札の壁は、迫りくる妖怪の牙や爪を受け止める。周囲の妖怪を一掃した青年は、弧を描いて真上の妖怪を斬り捨てる。

妖怪地獄の中を舞い、黒の衣に血を浴びながら美しい刃を振り回す。彼の刃から逃れる事は出来ず、鏡斎によって変化された妖怪は全て狩り尽くされた。

だが、妖怪化された女性は、皆、死んではいなかった。意識こそ失っているが、無傷の状態でアスファルトの地面に寝転がっている。

「バツ……バカなっ……！？」

信じ難い事に、鏡斎は思わず後ずさり、青年から距離を取る。

「ど、どうなってるのよ……?」

妖怪を産み出した鏡斎だけでなく、狂骨を含めた一同も理解出来ずにいた。

退魔の剣は、あくまで妖怪を斬り、払う刃。鏡斎が作り出した人と妖の因果を断ち切り、妖怪のみを斬り捨てたのだ。

「おお……おお……！ 人間……よくぞ……！」

青年を見つめる羽衣狐は、声を震わせる。自力で剣を解放させ、快刀乱麻の活躍を魅せた青年に感動感激していた。あの時の決意を、覚悟を、そして己の強さを証明した見事な闘いだった。今の羽衣狐は、愛しい我が子の成長を喜ぶ母のような、慈愛に満ちた顔をしていた。

そんな羽衣狐の熱烈な視線や、驚愕して固まる一同の注目を浴びる中、青年は元の姿に戻った。威圧的な迫力は消え失せ、剣の刃も再び鞘に収められる。

「お……おおおおつ……!？」

妖怪の数が随分と減った渋谷の地を見回して、青年は目を瞬かせた。

「コレ……マジで俺がやったの……?」

退魔の剣を使用してる間、青年本人の意識は残っている。だが、戦闘中は安心院と馴染ませた体が勝手に動き、妖怪を払っているのだ。半ば剣と一体化した感じになり、戦闘に特化した動きを再現する。ソレが、体を馴染ませた効果である。

「そうさ。コレはキミがやった事だぜ」
「安心院さん!？」

後ろを振り向くと、いつの間にか白髪で巫女姿の安心院が立っていた。いつも通り笑っているが、心なしか嬉しそうに見える。

「予想以上の出来だぜ。自力で三つの条件を揃えて、妖を斬って犠牲となった人間達を救い、安心院さんからの課題——『羽衣狐から離れて勝とう!』を見事にクリアした。キミに使われる剣として、嬉しい限りだよ」

「ど、どうも……」

安心院からのお褒めの言葉に、青年は恥ずかしく、照れくさくなつて頭を掻いた。

人前で褒められた事もあるが、何より安心院に認められたのが嬉しい。羽衣狐から好かれた時も、リクオから協力を求められた時もそうだ。他人の中に自分と言う存在が生まれて、初めて心の底からの喜びを実感出来る。

京都に訪れた時から何度も危険な目に遭つて、死にかけたが、彼女達と出逢えたのだから、道は間違えていないと確信した。

初陣での勝利を収め、青年は気を緩めていた。

緊迫した場の空気も、僅かに弛緩した。

ソレが、決定的な隙となつてしまう。

次の瞬間、黒い鞭が奔り、空を切った。伸びた先には青年の顔があり、頬を傷付ける。

「いつつ……!？」

痛みに顔を歪め、青年は鞭を受けた頬を押さえた。

一同の顔に動揺が走る中、鞭を操る鏡斎は目を細め、不快感を露

にした顔で青年を睨みつける。

「キミ……よくもオレの描いた地獄絵図を……作品を台無しにしてくれたね……！ 実に、不快だっ……！」

「貴様っ……！」

「デメエ！」

愛しい男を傷付けられた羽衣狐は怒りに駆られて尻尾を伸ばし、リクオも跳んで畏を乗せた長ドスを薙いだ。

しかし、二人の刃は鏡斎の体をすり抜けた。

驚いて目を見開く羽衣狐とリクオ。

いつの間にか鏡斎は、絵師の能力で自分の身代りを置いていたのだ。

「消えた……？ 何処へ逃げおつた……！？」

怒りを露にした顔で、羽衣狐は周囲を見回す。だが、周りは雑魚妖怪ばかりで、鏡斎の姿は見当たらない。

羽衣狐の後ろで、青年は頬から離れた血の滲んだ掌を見て声を上げた。

「うわっ！ 血い出てる！ 剣がまた封印されたから、札の防御ねーしっ……！ ってか、何でまた鞘に収まってるの！？ まだ妖怪残ってるのに……？」

「ああ、すまない。肝心な事を言い忘れていたぜ」

やはり全く動揺せず、笑顔を崩さない安心院が答える。

「退魔の剣が解放されるのは、揃えた三つの条件の対象となる妖を斬る間だけなんだ。さっき、主君が剣に示したのは元・人間の妖怪

達の条件だ。そして対象を斬り終えた今、剣は再び封印されたのさ。また剣を抜くには、新たに三つの条件を示さないと駄目なんだよ」「はあ！？ 何すか、その超面倒臭い設定！？ 前々から思ってたけど、この剣、超使い勝手悪いですよ……！」

思わず青年は、声を上げて文句を言った。

途端に、安心院は笑顔で固まった。瞬間、周りの温度が少し下がった気がした。かと思えば、次の瞬間に安心院は素早い身のこなしで、青年の足を捕えて懐かしのプロレス技——四の字固めを極めた。足に激痛が走り、青年は目に涙を浮かべて絶叫する。

「ぎゃあああああああ！ いでででで……！」

「まあ、確かにキミの言う通りさ。けど、使用者が誰でも抱く至極当然な苦情文句は、僕じゃなく、剣を造った刀匠にでも言ってくれたまえ……！ もっとも、その刀匠もとっくの昔に死んでるから、文句を言える対象は僕しか居ないだろうけど……」

「いただただ……！ いや、あの、すいませんでした……！ 悪気は無かったんです……！ もう、何にも言いません！ 何にも言いませんから、足放して……！ いででで……！ ギブギブ……！」

激しく地面を叩き、大声で謝罪して限界を訴える青年。

技を掛けてる安心院は、変わらず笑顔であるが、先ほどの青年の文句に内心怒っているようだ。その証拠に、細めた瞳にはサデイスティックの光が宿り、半ば本気で技を極めて痛めつけている。

「安心院っ！ 技を解かぬかつ！」

怒りの矛先を安心院に向け、羽衣狐は怒鳴って尻尾を伸ばした。青年が反省してる事もあり、安心院は足を放して解放した。

*

一同の前から姿を消した鏡斎は、建物の屋上に居た。

座り込む鏡斎の顔は、興醒めしたような無表情になっていた。折角描いてきた地獄絵図を、たった一人の人間に邪魔されてしまった。表面上は落ち着いているが、内心では作品を台無しにされた不愉快さ、青年に対する怒りと憎しみが渦巻く。あまり感情的では無い自分だが、創作の邪魔をされるのは、絵師に限らず創作者共通の不愉快極まりない事だ。

許す訳にはいかない。

罰を与えなければ。

「本当は、一番に奴良リクオの絵を描きたかったが……仕方ない。キミが悪いんだっ……！ オレの邪魔をした、美を穢した、キミがつ……！」

普通の死では、罰としては生温い。

もっと恐ろしく、残酷な死を与えなければ。

リクオに斬られた右腕を、描いて新たな腕を生やす。そうして右手に筆を持ち、左手に半紙を掴み、描く準備を整えた。青年の血を混ぜた“墨”を滲ませた筆の毛先を、半紙に走らせる。

その時、地上に居る青年に異変が起こった。

「ん……なっ……！？」

突然、体が石像のように固まり、動かなくなった。まるで、見えない力に押さえ付けられたように。

彼の異変に羽衣狐を始めとする一同も気付き、不審そうに顔を顰める。

屋上に潜む鏡斎は、筆を走らせる。

「一枚目……“新死相”^{しんしそつ}は死滅の始まり……！ お前の身体は、徐々に蝕まれるのだっ……！」

描き終えると同時に、地上に居る青年の身に更なる異変が襲い掛かった。

「がっ……！？ あ……あっ……あぁっ……！」

心臓が跳ね上がり、体を焼き尽くすような熱さが全身に回る。不気味な黒い炎が、目、鼻、口、手足等、体のいたる所から燃え上がり、広がっていく。

尋常でない異変に、羽衣狐の顔に言いよつの無い不安の影がさす。

「人間っ……！？」

「んっ……何っ……！？」

「すげえ臭い……！？」

気がついた鳥居に続き、巻も異臭を感じて顔を顰めた。

青年の異変と異臭に、口に鎌を咥えたイタクは目を鋭くさせ、表情を険しくさせた。

——この肉が焼けるような臭いはっ……！？

「まずいつ！ ソイツ、“呪い”の類にかかつてるぞっ！」

驚愕動揺する一同の前で、青年にかけられた“絵の呪い”の浸食が進む。

黒い炎は全身を包み込み、燃やし、肉体は朽ちていく。鼻がもげるような腐臭を放ち、地面に倒れて青年はのたうち回る。

「あ……あああああ……！」

目の前で朽ちていく青年の姿に、羽衣狐の顔は蒼ざめ、口から震えた声を漏らす。拒絶したい残酷な光景に、両手で顔を覆い、しかし指の隙間から覗いて目を離さない。心臓を握りつぶされそうな程の苦しみ、大切なモノを失う恐怖に身を震わせ、

「あああああ……うう……うう……うう……うう……うう……
うああああああああああああああああああああああああ
あああああ……！」

絶望に染まつた悲痛な叫びを、漆黒の夜に響かせた。

七の幕（後書き）

『安心院先生のこれで安っ心！ 質問コーナー！』

安心院先生「良い子の皆、元気にしているかい？ 残念な事に、今日も読者からの質問は一通も無いぜ。理由が解る生徒はいるかい？」

青年「はい。やっぱり、先生が教師らしい恰好をしてないからだと思います」

安心院先生「巫女装束は僕の拘りだから、譲れないね。そもそも、僕は今回のコーナーには反対したんだぜ？ 何でもかんでもコーナーを作ればいいと言う訳じゃないし、必ず受ける訳でもないからさ」

夜リクオ「先生。聞いた話じゃあ、前作の『アヤカシ質問コーナー』を乗っ取る為にアンタが企画したらしいじゃねーか」

安心院先生「……一体誰からそんな話を聞いたんだい、夜リクオ君？」

夜リクオ「1年3組の清継だ」

安心院先生「そうか、解ったよ。僕は用事を思い出したから、キミ達は自習してなさい」

青年「先生。保健室行っていいですか？」

八の幕（前書き）

明けましておめでとうございます！
今年もよろしくお願いいたします！

後書きには、ミニコント（？）『安心院先生のこれで安っ心！
質問コーナー！』があります。よければ覗いて見て下さい。
では、本編をどうぞ。

八の幕

“九相図”^{くしうず}。

相手の血を交ざり合わせた“墨”を使い、半紙に描く事で相手を死に至らしめる呪いの類だ。ソレは、人が“死体となり”^{おそ}腐り”^{モデル}“骨になるまで”を描いた悍ましき九枚の連作実写絵であり、模範となった相手に残酷な死を与えて腐り落とし、無に帰す^き。

呪縛の墨を用いた九相図こそ、鏡斎の畏れの真骨頂であり、彼が抱く美の極致なのだ。

「本来なら、ココに描かれるのは魑魅魍魎の主を争う若き半妖だった……。オレの邪魔をしたお陰で、彼を押し退けて究極の美をその身に味わう事になったんだ……。キミは、果報者だよ人間っ……。！」

鏡斎は、恐ろしき狂気の筆を休める事なく、半紙の上に走らせる。一枚目が終わり、二枚目に。

九枚全て描き終えると同時に、朽ち果てた青年の身体は完全に消えてなくなる。

*

「あああああああ……！ うううううううううううあああああああああああああああああああああ……！」

愛する男が目の前で朽ちていく、耐えがたい残忍で残酷な光景を目にして、羽衣狐は発狂して声を上げた。顔を両手で覆い、頭を激しく振って長い黒髪を振り乱す。理性など吹き飛び、自制を失くし

て夜の渋谷に絶叫のような悲鳴を響き渡らせる。

その迫力は、場に居るリク才達を圧倒して、身動きを取らせなくする程だった。

「は……羽衣狐様っ！ お姉様、落ち着いて下さいっ……！」

あまりの音量と迫力に、狂骨でさえ離れた所から声をかける事しか出来ない。

「おい、羽衣狐っ……！」

リク才も声をかけて、何とか羽衣狐を宥めようとする。

皆が騒いでる間に、安心院が動く。発狂して耳障りな声を撒き散らす羽衣狐を放っておき、腐敗が進む青年に白い札を何枚も貼りつける。一つ目模様が赤く浮かび上がり、効力を発揮した。

近くに居たイタクが尋ねた。

「何をしたんだ？」

「なに、札を貼って呪いの侵行しんこうを鈍らせたのさ。でも、安心は出来ない（安心院さんだけど）……！ あくまで浸食を遅らせるだけで止めたり、呪いそのものを断ち切った訳じゃないからね。あの妖……鏡斎を消さなきゃ、主君は呪い殺される事になるぜ……！」

その時、頭上から押し潰されるような、とてつもない重圧が一同に押し掛かった。

背筋に寒気を走らせ、リク才達は冷や汗を流す。体中を鎖で繋がれ、更に重しを背負わされた気分だ。コレは妖怪の畏だ。ソレも並ではない。

その場に居合わせた一同は、畏の発生源に目を向けた。

ソコには、怒り狂った一匹の妖狐が居た。

「殺すっ……！ 殺してくれるっ……！ その身を八つ裂きにして、内臓を引きずり出して踏み潰し、生き肝を喰らうて、我が尾で、この手で殺してくれようぞっ……！」

羽衣狐は凄まじい怒気と殺気を漲らせ、禍々しい畏が全身から迸る。

八代前の花開院妖秘録けいかいんあやしひろくによれば、羽衣狐と言う妖怪は、幼子に憑いて体内で育ち、黒い心根が頂点に達した時に完全に体を奪って支配する。成体になってからは、恨み、嫉みそね、怒り、絶望、憎しみ等と言った怨念を力の源にしている。

最愛の男を目の前でおどろおどろしい呪いにかけられ、彼女自身の負の情念が極限に達し、自らの力に変換して畏を高めているのだ。膨れ上がった強大な畏は京都での決戦以上であり、皮肉にも愛する青年の危機で爆発的に増大した。荒れ狂う怒りと殺意を表すように、九本の尻尾の毛が逆立っている。

近寄りがたい畏をその身に纏い、何処に居るかも解らない憎き鏡斎を殺しに行こうとした時、前に安心院が立ち塞がった。

「……去いねっ」

「いいや、どかないさ」

突き刺すような殺気を向けられても、安心院は笑顔で答える。羽衣狐の圧倒的畏に呑み込まれている一同の中で、彼女だけが平然と動いていた。

己の負の感情に捉われている羽衣狐は、冷静さなど失っていた。

「どかぬかつ……！ 妾わらわはあ奴を殺すっ……！」

「アイツを殺す事は大賛成さ。けど、闇雲に搜したって時間の無駄だぜ」

「五月蠅いつ……！　ならば、ココでジツとしていろうのか！
？　貴様に妾の気持ちが解るかっ……！？　愛しい者を目の前で蝕^{むしば}
まれ、苦しまされ、呪い殺されようとしてる妾の気持ちがっ……！」
目から紅き血の涙を流し、抑え切れぬ負の感情を訴える羽衣狐。
それでも安心院は全く動じず、口を開いた。

「ああ、解らないぜ。所詮、僕は道具だからね……愛だの友情だの、
そんなくだらねー感情は持ち合わせていないから理解なんて出来な
い。だからこそ、キミ達二人の事が本当に羨ましくて大好きだぜ……！
……！
そんな僕だけど、愉快、不愉快位の感情はあるよ。まあ、今はそ
のどちらでもない超不愉快だけだね。言っただろう？　アイツを殺
すのは大賛成だっ……！」

羽衣狐に負けず劣らずの寒気を抱かせる笑顔を浮かべ、安心院も
不快感を露にした。

そして、人差し指を伸ばした右手を羽衣狐の前に出した。すると、
青年のリュックの中から“ある物”が出てきた。宙を浮遊して、安
心院の人差し指に乗った物を見て、目の前に居る羽衣狐を含めた一
同は訝しげに目を細めた。

「何だ、ソレは……？」
「見ての通り、天秤さ」

安心院の言う通り、ソレは天秤だった。
何かの翼をモチーフにしたような奇妙なデザインで、左右のはか
り皿の下に黄色い鈴が吊るされている。コレも安心院が用意した、
対妖怪用の道具だ。

「コイツは、妖との距離を測り、位置を示す天秤さ。もう鏡斎とか言う妖の畏、妖力は覚えさせた。後は、コイツが捜してくれる……！」

説明が終わった直後、天秤の片側が傾き、ちりんつと透き通るような鈴の音が鳴った。

「ほら、早速見つけたようだぜ。鏡斎が居るのは……」

傾きから距離を測り、傾いた方角を見る。

「アソコだ……！」

天秤が示す先を、安心院が指差した。

羽衣狐は目で追って、一つの建物を見つけた。屋上に大きな看板がある建物で、集中してみると確かに畏を感じる。間違いなく、鏡斎はアソコに居る。

居所が判明して、羽衣狐は目を鋭くした。

「生かして帰さぬっ……！」

「羽衣狐！ 氷麗、イタク、ココは頼んだぞっ！」

巻達を二人に任せて、リクオも羽衣狐の後を追って建物に向かう。指し示した建物に向かう二人の後姿を、安心院は笑顔で見送った。妖が人の為に動くなど、実に滑稽であり、珍しく愛らしいモノだ。そう思いつつ、安心院は足元で呪いにのたうち回ってる青年を見下ろした。想像を絶する激痛に顔を歪め、生死の境をさ迷うが如く生き地獄を味わう青年に言った。

「さて、主君。キミの愛しの羽衣狐は、キミを助ける為に鏡斎の所

に向かったぜ。まあ、実力的には羽衣狐が圧倒してるから、ほぼ間違いないで圧勝してキミを救うだろう。ただ、僕としてはちょっと困るんだよ。

このまま羽衣狐に助けられると、『羽衣狐から離れて勝とう！』と言う課題を完全クリア出来ずに終わる事になる……！」

声が届いているかさえ解らない状況にも関わらず、安心院は厳し過ぎる事を続ける。

「確かに僕は、さつき『見事にクリアした』と言ったけど、アレはあくまで課題の初歩である『一人で闘う』事が出来たと言う意味で、完全クリアした訳じゃない。酷な事を言うようだけど、ココで動かなければ今までと殆ど何も変わらないぜ。まあでも、さつきの闘いはお世辞抜きで本当によく頑張ったから、ココで動かなくてもキミを軽蔑したりなんかしないさ。僕の課題も次回の闘いまで、引き延ばしにするよ。」

だから、ココで羽衣狐に助けられるのを待つか、僕の軽い挑発に乗って自力で呪いを解きに行くか、どちらか選んでくれ……！もし、自力で呪いを解く方を選択するなら、僕の袴の裾を掴みたまえ……！」

スパルタ教育以上の過酷過ぎる課題を笑顔で言うのが、安心院と言う女だった。

しかし、課題がまだ途中なのは事実である。産み出された妖怪は斬って払ったが、元凶である鏡斎をまだ倒していない。この渋谷戦において、『真の勝利』とは『妖怪を産み出す鏡斎を倒す』事だ。彼を自力で倒して、初めて勝利を手に掴み、課題を完全クリアとなる。

この時、選択を迫られた青年を突き動かしたのは、ただ一つの感情だった。漫画の主人公が持っているような特別高い志では無く、いじやうただ一つの感

誰もが持っている感情だ。

ソレは、意地。

コレだけは投げ出したくない、と言う平凡な意思のみ。

意地に突き動かされ、青年は、微動だにするだけで節々が痛み、激痛が走る状態で腕を動かし、腐った手で穢れ無い袴の裾を掴んだ。主の選択と意地を見届けた安心院は、心なしか嬉しそうに笑った。

「よく決断してくれたね、主君。正直、本当に驚いてるよ。今回はかりは、本当に強要する気は無かったからね。もしかして、男の意地ってヤツかい？ 臆病キヤラのキミが、いつの間にそんな恰好いい男になったんだい？ 思わず惚れてしまいそうだぜ……！」

まあ、そんな事は置いといて……解ったよ、主君。キミの選択通りにしようじゃないか……！」

言うや否や、安心院は浸食が進む青年の体を軽々と肩に担いだ。臭い匂いも、腐った肉の不快感も一切気にせず、安心院は笑顔でいる。

そして、鏡斎が潜んでる建物に向かって駆け出した。

*

建物の屋上では、鏡斎が絵描きの作業に勤しんでいた。

そして、最後の一枚――仕上げとなる九枚目を描いている時だった。後ろの非常階段から、駆け上がってくる足音が聞こえてきた。気配に気づきながらも、鏡斎は作品に集中する。焦らず、淀みない筆の動きで、最後の一枚を描き終えた。

ソレと同時に、屋上に二つの人影が現れた。羽衣狐とリクオだ。背中を見せて座り込んでる鏡斎に、リクオがドスを利かせた声を

出した。

「テメエ、いつからココに逃げてた……？」

九相図を完成させた鏡斎は、筆の動きを止めて振り返り、答えた。

「キミと出会った時から……」

笑みを浮かべる鏡斎の向こう側を見て、羽衣狐は目を見開き、リクオは不快感と寒気を抱いた。

屋上に設置されてる大きな看板の裏側に、おぞましい九相図の絵が並んでいるのだ。腐り、朽ちていき、骨となるまでを描いた狂気と悪意に満ちた悪魔の絵である。

「その絵が、人間をあのようにしたのか……？」

呪いの正体を目にして一気に不快感が増し、仇敵を前にして爆發寸前となる怒りに声を震わせる羽衣狐。

彼女の負の感情を察しつつ、鏡斎は額の汗を拭って言った。

「どうだ……いい絵だろう？ 模範が違ければ、もっと素晴らしい出来になるんだがね……！ 奴良リクオ……本当は、キミをこの絵の模範にしようと思っていたんだ」

「外道が……！」

リクオは目を鋭くさせ、長ドスの刃を鏡斎に向ける。

直後、屋上を包み込むような圧倒的畏が発生した。殺気と怒気、そして激しい憎悪が混ざった禍々しい畏に、不覚にもリクオは吞まれて背筋を凍らせた。正面から受ける鏡斎も、ゾクリッと悪寒を感じながらも畏の出所を凝視する。

黒い畏を全身から迸らせるは、羽衣狐だ。

「ぬらりひよんの孫……手出しは許さぬっ……！　こ奴は、妾が殺すっ……！」

突き刺すような殺気を乗せた鋭い眼光をぶつけ、羽衣狐は一步步み出る。

一方、鏡斎は近付いてくる羽衣狐を見て、笑っていた。

「美しい……！」

見惚れていた。

怒り、悲しみ、憎しみ、恨み、怨念、ありとあらゆる負の情念によつて成されている畏に、心の底から見惚れていた。地獄絵図に必要な要素を、羽衣狐の畏は持っている。これ程美しい畏を、彼は見たことが無い。青年を呪って、思わぬ光景を目に出来た。

そして、羽衣狐の尻尾の射程距離に入った時だった。

「そこまでだぜ、羽衣狐！」

突如、上から声が降りかかった。

一同は反射的に、一斉に顔を上に向けた。

看板の上に、夜空を背にして二つの人影が立っているのが見えた。朽ちていく青年と、彼に肩を貸して支える安心院だ。

「バカな……！？　オレの九相図を受けて、生きていられる人間など……！」

信じ難い光景に、思わず鏡斎は我が目を疑った。

しかし、呪いは確実に効いていた。札で腐敗の速度を遅めている

が、一枚、また一枚と腐り落ちていく。九相図の呪いを抑え込むのも、限界が近付いていた。

人影の正体が解った途端、羽衣狐は負の感情が和らぎ、驚きの顔になる。

「人間っ！？ 安心院っ！？ お主ら、一体何をしておる……！？」
「なに、僕の主の願いでね……鏡斎ソイツを斬りにきたのさ……！」

見下ろす安心院と目が合い、鏡斎は顔を顰めた。

そして、安心院に支えられて、青年は退魔の剣を片手に解放条件を示す。安心院に張られた札の効力で、何とか繋ぎとめている意識で口を開いた。

「百ひゃくに分がれた……山本の、一部……“山本の、腕”……。ゾレが、“真”……！」

かちんっ。

百物語組の正体は、山本五郎左衛門から分かれた妖怪集団である事は、式條城で倒した塵地藏が口を滑らせた事で解っている。

屋上から見上げる鏡斎は、剣の解放を阻止すべく、床に描いていた妖怪を産み出して襲わせる。

しかし、牙が届く前に妖怪は一瞬で物言わぬ肉塊と化した。羽衣狐の九尾によって、駆逐されたのだ。

「邪魔はさせぬっ……！」

羽衣狐が雑魚妖怪の相手をしてる間に、青年は最後の条件を口にする。

「死じど、恐怖きょうふに満ちだ……地獄絵図を、描いで、完成がんぜいさせる……！」

ゾレが、ア ندダの“理”……！」

かちんっ。

“形”は既に得ている。

コレで、三つの条件が揃った。

「お前のように煩惱に忠実な奴程、“理”が解りやすい奴はいないぜっ……！」

「“真”ど……“理”に、より……剣^{けん}を、解^とぎ、放^{はな}つ……！」

トキハナツ——っ！

退魔の剣の刃を解放して、青年は腐りかけたその身に漆黒の衣を纏う。妖怪を払う存在に変わった。

青年は看板を蹴り、鏡斎は床や看板の一部に描いた妖怪の群れで迎え撃つ。鞘から抜き放たれた七色の刃の前に、妖怪は一蹴され、一気に距離を詰められる。

そして次の瞬間、退魔の剣は鏡斎の身体を斬った。左肩から右わき腹にかけて、バツサリと斬られた傷口から、夥しい量の鮮血と畏が噴き出て、屋上を赤黒く染め、鉄臭い匂いで満たす。

——ああ、ここまでか……。

斬られた鏡斎の顔に、死への恐れは微塵も無かった。

ただ一つ、心残りがあった。

——最後に彼女を……描きたかった、な……。

意識が闇に堕ちる直前、彼の視界が捉えたのは羽衣狐。愛する人を殺されそうになり、怒りと憎悪に身を捕われた、美しい畏を纏った妖狐。

死ぬ前に、あの美しい姿を描きたかった。心奪われる模範を目にしたがら、その手で、筆で描けないのは無念だ。

ソレだけを心残りに、鏡斎は塵となって消えた。

鏡斎を斬り捨て、再び退魔の剣は鞘に収められ、青年も元の姿に戻る。呪術師が消えた事で、身体を蝕んでいた九相図の呪いも解け、腐敗が消えた。おぞましい呪いから解放された青年は、精神的にも肉体的にも酷く追い詰められ、その場に崩れ落ちる。

「人間っ！」

急いで羽衣狐が駆け寄り、手を伸ばして倒れかけた青年の体を抱えた。

体を包み込む温かみを感じて、青年は僅かに目を開いた。ぼやけながらも羽衣狐を見て、何とか口を開く。

「は……羽衣、狐……？」

「うむ。妾はココに居る……！　ココに居るぞ……！　お主は、よう頑張った……！　じゃから、今しばらく休め……！」

呼びかけに答えてくれた事に安堵して、羽衣狐は愛おしそうに優しく頬を撫でた。

羽衣狐の温もりの中で、青年は安心感を抱いて静かに目を閉じた。胸部を規則正しく上下に動かして、静かな寝息を立てる。激痛を味わった苦しみ、ソレに耐えた疲労等もあり、深い眠りについた。

夢の世界に旅立った青年を、羽衣狐は決して放さぬよう抱き締めた。

そして顔を上げた羽衣狐は、雰囲気を一変——禍々しい殺気を漲らせる。

「百物語組……！　必ず、妾の手で潰してくれようぞっ……！」

自分の大切なモノを奪われそうになり、羽衣狐の中の憎悪がより一層濃く、大きくなった。

看板の上では、安心院が座って二人を笑顔で見下ろしていた。

「どつやら僕は、キミを主と認めながら、まだ見くびっていたようだ。謝罪するよ、主君。」

そして今度こそ、合格だぜ……！ 文句なく、キミの勝ちさ……

！ 安心院さんからの課題——『羽衣狐から離れて勝とう！』完全クリアーだっ……！」

八の幕（後書き）

『安心院先生のこれで安っ心！ 質問コーナー！』

安心院先生「良い子の皆、あけましておめでとう！ 寒い日が続くけど、元気にしてるかい？ お年玉をより多くゲットする算段はついてるかい？ 新年一発目の『安心院先生のこれで安っ心！ 質問コーナー！』だけど、記念すべき第一通目の質問が来たぜ。それじゃあ、早速いつてみようか！

投稿者：マキサさんからの質問だぜ。『あ、質問ですが…時折、番外編は書くのですか？ 例えば…“海に行く”とか、“ギリギリ15禁展開”とか、その他もろもろ。』。

おいおい、キミはどれだけエロスなんだい？ 海に行く事も15禁展開も、どっちもエッチな事が共通してるじゃないか。そんなにエロい事が好きなら、エロ同人誌でも読んでなっ……！」

青年「先生。読者を傷付ける発言は、よくないと思います。地味に傷付きます」

安心院先生「いや、僕としては傷付ける気は毛頭無いんだぜ。まあ、でも、多少言い方がキツかったかもしれないね。マキサ君、気を落とさないでくれたまえ。そうそう、番外編は、これからもちょうちよく書いていく予定さ」

夜リクオ「先生。1年3組の清継が、全治三週間の大怪我で入院したそうだが……何したんだ？」

安心院先生「いやいや、特に何もしちゃいないぜ。職員室に呼び出して、進路の事について少し話し合っただけさ」

夜リクオ「アンタ、担任じゃねーだろ」

青年「先生。見舞いに行つていいですか？」

感想、質問お待ちしております！

番外編：正月

読者の皆さん。新年明けまして、おめでとうございます。今年も、『退魔伝 アヤカ死（百物語篇）』をよろしく願います。と、新年の挨拶はこの辺にさせていただきます。

いや、実は今、俺は新年早々に大変な危機ピンチを迎えようとしてるんですよ。いや、本当にヤバいんです。

何の危機って、そりゃあ――。

「ほれ、狂骨、鬼美子。妾わいからお年玉じゃ」

「わあゝ！ ありがとうございます、お姉様！」

「羽衣狐様、ありがとうございます！」

お年玉つすよ。

今日も綺麗な羽衣狐が、これまた綺麗な笑顔で狂骨と鬼美子に手渡したのは、正月イベントの一つでもあるお年玉だ。その小さなお年玉袋の中に、一体どれだけの金が入っているのだろうか。金持ちのお嬢様と言う立場から考えるに、最低でも十萬位は詰まってるんじゃないか？ だって、膨らみが凄いもん。

そんな訳で、俺に迫りくる危機とは、皆さんお解りのように、お年玉だ。ヤッベーよ、俺、全然お金無いんですけど。他人にあげるどころか、自分用の金すら無いんですけど。パチンコと競馬で、バンバン消失していったんですけど。台と馬に落としていつちゃったよ。

俺も二十歳を超えて成人しちゃった身だから、世間的にはお年玉を貰う側からあげる側に強制転身されてしまった。普通に考えれば、いくら成人になっても、金の無い俺からお年玉を貰おうなんて思わないだろう。だが、相手は普通じゃない、羽衣狐だ。無いと知りつつ強請ねだってくるに違いない。主に、困った俺の反応を愉しむ為にな。

ソレに狂骨達が悪乗りしてくる可能性も、充分にあり得る。

「つか、何で学生の羽衣狐が、お年玉あげてんだよ？ 確かにア
ンタ、中身は千年生きる化け狐で山吹さんもそれなりに長生きした
方だけど、今は高校生じゃん。なに、あげる側になつての？ 意味
解んないんですけど。アレか？ 家が金持ちだからですか、コノヤ
ロー！ 俺も欲しいよオオオオオ！」

現状を説明してお解りいただけたかと思いますが、お正月とは金
の無い俺にとって辛い時期なんですよ。まあ、今回はお年玉を強請
られても、後ろで今日も笑顔の安心院さんから策を授かったから、
コレで乗り切ろうと思います。上手くいくかは、神のみぞ知る、と
言ったところか。

「そうじゃ。人間、お主もこ奴等にお年玉をあげてはどうだ？ そ
れに妾も欲しいぞ、お主からのお年玉」

来たアアアアアア！ やっぱり振ってきやがったよ、この女
アアアア！ 最後の方で、さり気なく自分も求めているしいい
！ 真つ黒だよ！ 見た目だけじゃなくて、中身も真つ黒だよ、こ
の妖怪^{ひと}！

俺が顔を向けると、狂骨と鬼美子が、小馬鹿にしたような笑顔を
していた。どうせ、お年玉なんて出せないんでしょ？ とでも思っ
てるんだろう。フツ、甘いな三人とも。残念だが、ちゃんと用意
してあるのさ。

「あゝ、お年玉ね。はいはい。ありますよ、三人分」
「えっ……！？」

俺の予想外の返答に、羽衣狐達は驚いて目を見開いた。

「ほ、本当か……！？ お主が、妾達にお年玉を……？」

「はい。ほらっ」

動揺する羽衣狐に、俺は三つのお年玉袋を見せてやった。
三人の口から、おおっ！ とどよめきが上がる。

「な、何と……！ お主から、お年玉を貰えるとは……！」

「嘘っ！？ 夢じゃないの……！？」

「何処に、こんなお金が……？」

余程衝撃的で、予想外な事だったらしい。お年玉袋を受け取った三人の手が、震えている。プルプルでは無く、ガクガクな勢いだ。相手が衝撃を受ける事は予想してたが、ここまでいくと、何か複雑な気分だな。

すると、羽衣狐は表情が一変して、笑顔で言った。

「まさか、お主からお年玉を貰えるとはのう……！ 妾は嬉しいぞ！ お主から受け取ったこのお年玉、大切に使うからのう！」

ま、眩しい……！ 眩し過ぎるぞ、羽衣狐！ 黒いのに超眩しい笑顔なんですけど！

ああ、そんな穢れ無き笑顔を見せられたら、物凄い罪悪感が……。とてもじゃないが、耐えられない。

「じゃあ、俺はこれで……」

相手がお年玉袋の中身を確認する前に、俺はそそくさと部屋を立ち去ろうとする。

しかし、ドアノブを掴んだ時だった。

「待て、人間……！」

酷く冷めた声が、背後からかけられた。
部屋の温度が、3 くらい下がった気がした。只でさえ寒い季節なのに、背中に危険な悪寒を感じる。

「何じゃ、コレは……？」

凍えてしまいそうな程に冷たい、羽衣狐の声に俺は恐る恐る後ろを振り返った。

笑顔が消え、恐ろしいまでに無表情となった羽衣狐の手には、封が開けられたお年玉袋が握られている。袋から覗くのは、数枚の紙切れた。と言つても、お札^{さう}では無い。

俺は引き攣った笑顔を浮かべ、答えた。

「ば……馬券、です」

「三尾の刑……！」

「ぎゃあああああああああああああ！」

間髪入れず、羽衣狐はスカートの中から三本の尻尾を出して、俺の体を捕えた。

羽衣狐に便乗して、狂骨と鬼美子も声を上げる。

「どうもおかしいと思ったら、アンタ、負けた馬券詰め込んでごまかそうとしてたの!？」

「最低ですっ!」

「待って待って待って! 違っんだよ! そんなつもりじゃなくて、勝って倍以上にしようと思つて……!」

冷や汗を流しながら、俺は必死に弁明した。

「そ、それにホラ、カ●ジみたいに莫大な借金を作るより、マシでしょう……？」

「人間……お主、妾から幾ら借金してると思うておる……？」

そうでしたアアアアア！ 俺、金持ちの羽衣狐から、金借りてましたアアアアア！ しかも、未返済っ！ ある意味、カ●ジより最低だよ！

「い、いやあ……お金なだけに、切っても切れない縁^{えん}、みたいな……？」

「上手いっ！ けど腹立つっ！」と狂骨。

眉根にシワを寄せ、目を鋭くして怒り心頭な羽衣狐による刑を囃^{はや}し立てるように、狂骨と鬼美子が声を上げた。

「お姉様！ やっっちゃって下さい！」

「お仕置き、お仕置き！」

「空^{うつ}け者^{もの}めが……！ お仕置きじゃあつ！」

「あああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ……！」

三尾の刑を処せられ、俺は悲鳴を上げた。

どんな刑を受けたかは、読者の皆さんのご想像にお任せします、とだけ言っておきましょう。

「マリア様！ 今日もお美しい貴女様に、お年玉として私のプロマ
イドを……！」

「去^いねっ！」

「あぶじゅ！」

タイミング悪く、刑の執行中に入ってきたしょうけらが、尻尾の打撃を受けて吹き飛ばされた。

まあ、アイツの場合、お年玉の物が物だから、どんなタイミングで来てもブツ飛ばされてたろうけど。

「やれやれ。新年早々、騒がしいなキミ達」

お仕置きを受ける俺の視界に、のんびりとお茶を啜^する安心院さんが見えた。

番外編：幼女（前書き）

『注意事項だぜ！ 安心院先生！』

安心院先生「読者の皆、元気にしてるかい？ お年玉はゲット出来たかい？ まあ、そんなくだらねー事は遠くにブン投げて、ホームルームを始めるよ。内容は、今回の番外編の注意事項だ。今回の番外編には、作者の初となる挿絵付きだぜ。だから文章や話の内容の他に、絵の感想も書いてくれたまえ」

羽衣狐「安心院先生。作者を殺しに行ってもよいか？」

安心院先生「いやいや、そんな事したら、この小説が終わっちゃうだろう？ だから、10分の9殺しで済ませて来なさい」

羽衣狐「うむ」

青年「先生。ソレ、殆ど死んでます」

番外編：幼女

「安心院さ〜ん！」

青年は某眼鏡少年の如く、助けを求めるように部屋に入った。

室内では、安心院が眼鏡をかけて一人静かに読書をしていた。窓際の日差しが当たる暖かな場所を取り、綺麗な指先でページを一枚捲る。静寂な空間で、黙々と読書に興じていたが、部屋に訪れた青年によって中断を余儀なくされた。まあ、無視してもいいのだが、一応自分を使う主だ。元々、読書をしていたのも単なる暇潰しだった。その手段が、主の相手をする事に変わったただけだ。

ふう、と溜め息を一つ吐き、安心院は眼鏡を外して返事をした。

「どうしたんだい、主君？」

「聞いて下さいよ、安心院さ〜ん！ また羽衣狐に虐められたんですよ〜！」

羽衣狐。趣味は、青年虐めである。

「もう、これで何度目になるか分からない……。やられてばかりじゃあ、悔しいから、羽衣狐をギャフンと言わせる道具出して〜！」
「おいおい。僕はド・えもんじゃあ、無いんだぜ？ そんなに助けが欲しければ、タイムマシンにでも乗って未来に行ってきな」

「そんな事言わないで下さいよ、安心院さん〜！」

すがりつくように、青年は詰め寄った。

すると、安心院が言った。

「と言うか、キミは羽衣狐に虐められて悦ぶ変態君じゃなかったの

かい？」

「ソレはあくまで、その……夜の行為の時であって、単なる暴力で感じる程堕ちてないです……！」

我ながら恥ずかしい答えに、青年は顔を赤くさせて、目を泳がせる。

確かに、足で息子を弄られて感じはしたが、アレにはテクニックがあった。彼女の黒い指先は、巧みな動きで快楽を与えてくるのだ。しかし、やはり通常とは違うプレイなので、青年は変態である事に変わりは無い。充分堕ちている。

羞恥心に顔を赤くする青年の反応を愉しみつつ、安心院は思案顔になった。

「そうだねえ……」

ここで手助けをすれば、退屈な時間も少しは紛れるかもしれない。さて、どうするか。退魔の剣は駄目だ。一度抜けば、対象を斬らない限り鞘に収める事は出来ない。天秤は妖怪の位置を探るだけの道具なので、今回の相談には向いていない。そうなると、消去法で札しかなくなる。しかし、普通の札を使っても面白味に欠ける。

悩んでいた時、ふと“ある物”が頭に思い浮かんだ。

「そう言えば良い物があるぜ、主君」

「えっ？ ホントですか!？」

期待に胸を膨らませ、青年が尋ねた。

安心院は、袖口に手を入れて、何か探す仕草を見せる。出した手にあったのは、お札だった。

ただし、色は白では無く、銀色をしている。

「さつき思い出してね。コイツは、普通のお札以上に強力で、直接妖に貼り付ければ弱体化させる事が出来るのさ。しかも、ただ力を弱めるだけじゃないんだぜ……！」

最後に意味深な言葉を口にして、安心院は企みを抱いた黒い笑みを浮かべた。

*

安心院から特別なお札を貰った青年は、早速羽衣狐の部屋の前にやってきた。

極力物音を殺して、静かに扉を開ける。中に広がるのは、漆黒で塗りつぶされた闇の空間。黒一色の部屋の中心辺りに、大きなお姫様ベッドが置かれてある。黒い掛け布団が小山に膨らんでいて、中に誰かが入っている事を表している。当然、部屋の主である羽衣狐だ。妖怪だからなのか、学校が休みの明るい時間帯は、寝ている場合がある。

静寂な空間に忍び込んだ青年は、抜き足、差し足、忍び足で、羽衣狐が寝ているベッドに忍び寄る。

緊張感で若干動きが固いが、今のところ気配は気付かれていない。ジミー・イリユージョン。その圧倒的地味さによって、周囲に自分の気配を悟らせない番外編限定能力だ。

その能力のお陰で、何とか青年は羽衣狐が寝ているベッドの真横まで辿り着いた。丁度寝顔が見える位置で、静かな寝息を立てて気持ち良さそうに寝ている。素敵な寝顔に見惚れるも、本来の目的を思い出して、青年は札を持つ手に力を入れた。

——よ、よし……！ やるぞっ……！

唾を飲み込み、決意を固めた。こういう事は、即実行するに限る。

下手に心の準備の為に引き延ばせば、かえって失敗してしまうものだ。

意を決して、青年はお札を羽衣狐の癒しの寝顔に貼り付けた。

「むうっ……!？」

流石に直接顔を触れられ、羽衣狐は強制的に意識を覚醒させられた。

青年が危険を感じて、身を引いた時だった。

貼られたお札が、効力を發揮して銀色の輝きを放つ。かなり強烈な光で、目を開けていられず青年は瞼を閉じた上で腕を顔の前にかざして壁を作った。

ややあつて、光が収まったのを瞼越しに感じて、恐る恐る目を開けた。腕を降ろし、羽衣狐の状態を確認した。

その瞬間、青年は目を見開いた。

「え……えええええええええええええええつ！？」

屋敷全体に響き渡るような、盛大なシャウトをした。

「ちよつと、何よ今の大声!？」

青年の大声を聞きつけて、狂骨以下京妖怪が部屋に駆け付けた。明かりを点け、視界に捉えたのはベッドの前で立ち尽くす青年の背中だった。

「人間！ お姉様の部屋で何してるのよ？」

後ろから問い詰める狂骨だが、青年は無反応で見向きもしない。これには狂骨もムツときて、羽衣狐の前で失礼と思いつつも声を

荒げた。

「ちよつと、答えなさいよ！」

隣から顔を覗き込んで、狂骨は少し怒りが収まって、首を傾げた。青年の顔は、ビックリ仰天したと言った様子で、固まっているのだ。大きく見開かれた目は、眼前のベッドを凝視している。気になって視線を追った狂骨も、ベッドの上を見て驚愕した。驚きのあまり、手に持っている髑髏を床に落としてしまう。

「ん……むう……。一体何事じゃ？」

ベッドの上で、一人の少女が眠い目を擦りながら呟いた。黒い掛け布団からはみ出ている身体は、小学校低学年位の小さな身長だ。小柄だが黒髪は長く、左右の髪が胸部を上手く隠している。黒髪少女は、目の前に立っている青年と狂骨に気付いた。

「人間に狂骨……。何を惚けた顔をしておる？」

啞然と立ち尽くす二人に、黒髪少女は不思議そうに首を傾げた。その時、黒髪少女は妙な違和感を憶えた。以前と比べて、目線が低くなっている気がするのだ。

ややあつて、狂骨が動揺を露にした震えた声で言った。

「お、お姉様……！　そ、そのお体は……？」
「ん？　体？」

言われて黒髪少女は、顔を俯けて自身の体に視線を落とした。見た瞬間、黒髪少女は驚愕して目を見開いた。

「な…… なな、何じゃコレはアアアアアアアア！？」

小さな自分の体に、黒髪少女はシャウトした。
直後、弾かれたように馬鹿が動いた。

「もう我慢出来ないっ！」

「ひゃあっ！？」

それまで微動だにしなかった青年が、急に抱きついてきたのだ。
突然の行動に反応出来ず、黒髪少女は可愛い悲鳴を上げて押し倒された。

生まれたままの姿の黒髪少女の美白素肌に頬を付け、恍惚とした表情になる青年。

「ああ、可愛い！ 羽衣狐、超可愛い！」

「コ、コラッ、人間！ やめよ！ 離れぬかつ！」

黒髪少女は、九尾を出して青年の顔を叩いた。

しかし、ぺちんつとこれまた可愛い音が鳴っただけで、以前の威力が微塵も無い。

「効かなくなっいつ！」

「な、何じゃとっ！？」

自身の弱体化に、黒髪少女は動揺して目を剥いた。

その時、黒髪少女の危機^{ピンチ}に、狂骨がハッと我に返り、

「お姉様から離れなさいっ！」

「ごあつ……！？」

拾い上げた髑髏で、青年の頭部に叩きつけた。

ゴスツ、と鈍い音がしたが、多分大丈夫だろう。番外編だし。

青年の手から解放された黒髪少女は、改めて自分の体を確かめた。

「妾^{めかけ}の……妾^{めかけ}の……か、体が……縮んでおるっ!？」

黒髪少女改め、幼女・羽衣狐がソコに居た。

羽衣狐、幼女化事件。

安心院から受け取った青年の札は、一時的に貼り付けた対象の妖怪を弱体化させる強力な道具であり、効力は外見にまで表れる。力の弱体化だけにとどまらず、姿も幼少期まで戻ってしまうのだ。

ベッドの上で掛け布団を身体に包み、白い素肌を隠した羽衣狐は赤くした顔で青年を睨んでいた。事情を聞いて、しかめっ面になっている。

「つまり、コレはお主と安心院の奴の仕業じゃと……?」

「はい……」

ベッドの前で正座させられ、青年は素直に頷いた。

しかし、その顔は沈んだ表情では無く、幼女と化した羽衣狐にニヤついていた。幼い羽衣狐が怒っても、普段の迫力は全く皆無で、寧ろ可愛く見える。

調子を狂わされ、羽衣狐は小さく唸る。

「ぬう……! もう、良いっ……! 早く妾を元の姿に戻さぬか!」
「ええ〜!？」

羽衣狐が当然の要求をすると、青年はあからさまに不満を露にし

た。

「そんな折角、可愛いのに……もうちょっといいじゃないですか。安心院さんも、効果は一日か半日って言ってましたし……」

「こ、この変態めが……！ お主のような奴を、現代では“ロリコン”と言っのじゃろ！？ ええい、狂骨！ お主からも言ってやれ！」

自分が言っても聞かぬと判断して、狂骨に任せる羽衣狐。

京妖怪の中でも、人一倍自分を心から慕っている狂骨なら、助けしてくれるハズだ。

と思ったら、

「お姉様、もう少しくらい、そのお体でもよろしいではないでしょうか？」

頬を赤らめた顔で狂骨が言う。

——狂骨、お主もかアアアアアアアアア！？

まさかの裏切りに、羽衣狐は内心にシャウトした。心から慕うが故に、幼女化した羽衣狐に見惚れ、心奪われてしまったのだ。つまりは、今の青年と同じ状態である。

味方は、他に味方はおらぬのか？ と羽衣狐は視線を巡らせた。視界に入っしたのは、しょうけら。

「マリア様……！ 何と……何と穢れ無き、純真無垢な御姿……！」

感動のあまり、涙を流して跪いている。

いや、あ奴には最初から何の期待もしておらぬ。

次、と早々に他を捜す。

しかし、下僕の妖怪の中からも、「そのまま！ そのまま！」

と今の状態で居る事を訴えるコールが上がっていた。

何じゃこ奴等？ と羽衣狐は軽く頭痛を憶えた。妾の配下には、阿呆しかおらぬのか？

一人頭を悩めていると、何やら珍しく青年と狂骨が話をしている。声が小さくて話の内容は聞こえないが、物凄く嫌な予感がしてならない。

話がまとまったようで、二人は顔を離した。

「人間。今回は、貴方にしては良い案だわ！」
「だろ？」

互いに笑みを浮かべ、サムズアップを交わした。
そして二人は振り返り、羽衣狐を見た。

目が合った瞬間、羽衣狐は顔を引き攣らせ、背筋に寒気が走った。
本能的に身の危険を察して、ベッドの上を後ずさる。

「な、何をするつもりじゃ……？」

「うふふ……！ 大丈夫ですよ、お姉様あ……！ 私達に身を任せ
て下さい……！」

「そうですよ、羽衣狐様……！ 恐がる事なんて無いですよ……！」

妙に優しい声音で、それでいて狂喜に駆られた笑顔で、狂骨と青年は怯える羽衣狐に迫った。

漆黒の部屋に、絶世の可愛さを誇る少女が居た。

透き通るような白い素肌の上に、黒色のスクール水着を着ている。
胸元の名札には、平仮名で『はごろもぎつね』と書かれてあった。
小柄な体と小さな胸を魅せる水着は、コレの他には無い。しかも、
頭に狐耳を付けて、更に可愛いコスチュームに仕上がっていた。

「キヤー！ お姉様、可愛いです〜！」

羽衣狐のスク水姿に、狂骨は大興奮して顔を赤くして、声を上げてハイテンションではしゃぐ。その手にはいつもの髑髏の代わりに、何時何処で購入したのか、髑髏デザインのデジカメが握られていた。

「究極の可愛さだな……！」

「素晴らしい……！」

青年としようけらも、恍惚とした表情で羽衣狐を眺めている。二やけている青年なんか、口から涎を垂らしている始末だ。そして二人の手にも、それぞれ写メ機能を動かしたケータイとデジカメが握られていた。

「うう……！」

当の本人は、自分の恰好に恥じらいを感じて、顔を赤くしていた。学校の水泳授業の時には、何とも思わなかったのに、今は妙に気恥ずかしい気分だった。やはり、カメラを向けられている事と、馬鹿な男共の熱視線が原因だろう。

——何故、妾がこのような目に……？ とんだ茶番じゃ……！
羽衣狐にとつて、半ば罰ゲームと化していた。

その日一日、お札の効力が切れるまで羽衣狐は、着せ替え撮影会を続けられた。

「萌えた……！ 萌え尽きました、お姉様あ……！」

「感無量っ……！」

「ぐはっ……！」

最後に興奮と感激のあまり、しょうけらが吐血をして倒れた。

「お主等、後で覚えておれ……！」

顔を真っ赤にした羽衣狐は、怒りと羞恥心にプルプルと身を震わせた。

ちなみに、事の一部始終を黒幕の安心院は隣の部屋で聴いて、愉しんでいた。

番外編：幼女（後書き）

反省はしてま……せんっ！

えゝ、ただ単にスク水姿の羽衣狐が描きたかっただけです。超恥ずかしい。死ねばいいのに、俺。

と、こんな所でモタモタしてたら、羽衣狐に殺されるので失礼では！

九の幕（前書き）

『やっちまったぜ！ 安心院先生〜！』

安心院先生「はい。良い子の皆、元気にしてるかい？ 今日のホームルームは、挿絵報告だぜ。作者が調子に乗って、また挿絵を描いたのさ。しかも、今度のモデルは……」

青年「先生〜。ソレ以上は、ネタバレになると思います」

安心院先生「おっと、そうだね。それじゃあ最後に、挿絵を描いた赤夜叉君。何か言う事はあるかい？」

赤夜叉「むしゃくしゃしてやった……じゃないや。調子に乗ってやりました。後悔はしていない。安心院さん、大好きです」

青年「先生。色んな意味で作者を訴えていいですか？」

九の幕

後頭部に良い感触を憶えて、青年は目を覚ました。

寝起きの目を擦りながら、記憶を辿る。自分は確か、絵師の妖怪から性質たちの悪い呪いを受けて、死にかけてた。そこに安心院が、このままじゃあ変わらないとか何とか言つてて、妙な意地を張って妖怪絵師を斬りに行ったんだ。剣を解放してる間は、割と意識がハッキリしてたけど、戻ってからまた朦朧とし始めた。それから羽衣狐に抱えられて、意識を失った。覚えているのは、ここまでだ。

と言う事は、後頭部から伝わる感触は、羽衣狐の尻尾か何かか。いや、尻尾独特のモフモフ感が全く無い。しかし、尻尾とはまた別の心地良さを感じる。

「目が覚めたかい？」

女の声が聞こえた。

羽衣狐だと思い、瞼を開けて見た。

視界に映ったのは、美しい黒髪を持つ妖狐では無く、茶髪の可愛い女子中学生だった。

予想外の人物に驚き、青年は目を見開く。

「あ、安心院さん！？」

「やあ、主君。御苦労だったね。元気そうで何よりだよ」

驚く青年を、安心院は笑顔で見下ろす。

その時、青年は初めて自分が置かれてる状況に疑問を抱いた。安心院は、自分を見下ろしている。更に自分の後頭部には、さっきから枕よりも妙に心地良い感触がする。コレ等のことから、青年の脳は自分がどのような状態なのか、答えを導き出した。

その瞬間、急速に顔が熱くなり、赤く染まった。

「ひ、膝枕っ……!？」

「ピンポン！ 大正解だぜ、主君」

笑う安心院の膝の上に、青年は頭を乗せて寝ていた。

膝枕。それは、女子の柔らかい膝を枕代わりにして身を任す、癒しの時であり、男のロマンである。

本来ならば男として嬉しい状況なのだが、青年の場合は違った。嬉しくないと言ったら嘘になるが、それよりも強い恐れを抱いていた。この状況を見せてはならない人物が居るのだ。ソレを思うと、膝の上で寝転がり、心地良さを満喫してる余裕など無い。

「ヤッバ……！ うわっ!？」

「こらこら、僕の膝枕から逃げようたつて、そうはいかないぜ」

すぐに起き上がるうとしたが、安心院に肩を掴まれ、抑え込まれてしまう。細身からは想像出来ない腕力で、青年の動きを封じる。しかし、それでも青年は抵抗を諦めない。

「ちよっ……放してっ！ ホント、マジで放してくださいっ……!」

「ショックだぜ。そんなに僕の膝枕は嫌なのかい？」

「いや、そういうんじゃない……こんな場面を、羽衣狐に見られたら殺されるっ!」

訴える青年の顔は、恐怖で強張っていた。必死な様子から、羽衣狐を恐れている心情が伝わってくる。

しかし、安心院は笑顔を絶やさない。取り乱す青年に言った。

「落ち着きたまえ、主君。ココは現実世界じゃなくて、キミの夢の

中だよ」

「へ……？」

言われて青年は、周囲を見渡した。

自分達が居る場所は、一面真っ白で、何も無い空間だった。まるで、退魔の剣を解放した時に訪れる、あの空間のようだ。

ココが夢の中なのかの真偽はともかく、羽衣狐が居ない事に青年は心底安堵して、深い溜め息をついた。同時に体中から力が抜けて、安心院に身を任せる。

「そうそう。今回、キミは結構無茶をしたんだから、リラックスして休まなきゃダメだぜ」

「はあ……。つてか、何で膝枕……？」

「頑張ったご褒美さ」

横ピースを決める安心院の笑顔に、不覚にも青年は動揺して顔を赤くした。

本当に、この場に羽衣狐が居なくて良かった。

安心した青年は、改めて後頭部に感じる膝枕に興奮する。羽衣狐にもやつてもらった事が無いので、夢の中とは言え、コレが人生初の膝枕体験になる。気持ち良い寝心地と女の子の甘い香りに、頬が緩んでしまいそうだ。

すると、安心院が言った。

「外では愛しの羽衣狐に抱えられ、中では僕の膝枕を堪能してるキミは幸せ者だね」

「え……？ ええ、まあ……」

気恥ずかしくて、青年は曖昧に言葉を返した。

地獄絵図から解放されたせいかな、緊張感の無いフワフワとした空

気になっている。美少女と二人っきりで、しかも膝枕をされてる特殊な状況下である事も要因になってるのだろう。

「そうだ、主君。実はキミに、もう一つご褒美があるんだぜ。と言
う訳で――」

言っや否や、安心院は青年に顔を近付け、

「――おやすみなさいの、ちゅう」

反応する間を与えず、彼の唇を奪った。

唐突なキスに、青年は顔の熱を急上昇させる。柔らかい唇に塞がれて、声を出す事が出来ない。甘いをキスを味わう中で、青年は意識が朦朧として重い瞼を閉じた。

彼が眠った事を確かめ、安心院は唇を離れた。

「はい、出来上がり。主君、夢の中のそのまた夢の世界へ、ごあい
んなーい！

安心院さんからの課題^{しゅくぎ}2――『^{まこと}“真”を探しに行こう！』、スタ
ート！」

死闘を終えた直後だと言うのに、安心院は可愛い笑顔で、容赦無く
敵しかった。

*

一方で現実世界の渋谷では、一触即発な空気が漂っていた。

「何でお前等が、こんな所に居るんだ？」

「それはこちらの台詞じゃ。何故、京の花開院家が江戸に居るのだ……？」

黒髪に黒いマントの出で立ちの男が、羽衣狐と睨み合っている。

彼の名は、けいかいんりゅうじ花開院竜二。破軍使いであるゆらの実兄で、京都の闘いでは一度羽衣狐と対峙している。陰陽術の他に巧みな話術を使って相手を欺くが、羽衣狐には見破られ苦渋を舐めさせられた。

奴良組と京妖怪が同盟を結んだ事は知っているが、長年のわだかまりは簡単には消えず、しかも配下の妖怪に二十七代目秀元や多くの仲間を殺されているので、花開院家とは犬猿の仲が続いている。互いに険しい顔で睨み合い、重苦しい空気が場を包み込んでいた。周りに居る奴良組は、近寄りがたい雰囲気に関顔を悪くする。

「おい、誰か間に入って収めろよ……！」と納豆小僧。

「馬鹿言え！ 入った瞬間、殺されそうな空気じゃねーか……！」

合流した青田坊が、顔を顰めて答えた。

やれやれ、とリクオがかぶりを振り、果敢にも二人の間に割って入って事が起きる前に仲裁した。リクオの説得で、両者は牙を収め、一触即発の空気は去った。見守っていた一同はホッと胸を撫で下ろし、リクオの勇氣ある行動を心中で賛辞した。

「竜二。それで、何でお前が東京コウに居るんだ」

「……近年、都市伝説の異常な出現について調査しててな。その過程で、＜件＞の予言を知ってきたんだ。俺が追ってる都市伝説と何か関係があると思って来たんだが……どうやら、当たりだったみたいだな……！」

目付きの悪い竜二の顔が、更に険しくなった。

その時、三羽鴉の一人の黒羽丸が一同の前に現れ、奴良組にとつて衝撃の事態を報告する。ソレは、本家に居るリクオの母親である奴良若菜が、百物語組の一人に狙われているとの事だった。目眩がしそうな程の衝撃が走る中、黒羽丸は伝令を続ける。本家には首無しが居り、自分が必ず若菜を護る、と。

一刻も早く本家に引き返そうと声を上げる組員だったが、リクオは戻らず、母を首無しに任せる事を決断した。首無しの仁義を通す心意気を信じて、自分は三代目としての責任を果たす。そう決断したのだ。

部下を信じ、前に突き進もうとする大将の後姿に、奴良組の妖怪は声を失って脱帽していた。

そして、彼の姿に感動してる者が、遠目にもう一人いた。

ワカメヘアーが特徴の中学生、清継^{きよつぐ}。人間のリクオと同級生で、清十字怪奇探偵団の団長を務めている学生だ。小さい頃は妖怪否定派だったが、ある事件をキツカケに妖怪の存在を信じ、また彼等の主を尊敬して探し回っていた。

念願の主を見つけ、心に響くような決断に胸を打たれて感激の涙を流している。

「き、清継君!？」

「はっ! いかん! ボーツとしてる場合じゃなかった!」

傍に居るカナの声で、清継は我に返ってパソコンに向き合う。

実は、先ほどから新たな“件の予言”がネット上に出回っているのだ。

その内容とは――。

■夜明けと共に……救世主が現れ、奴良リクオを……殺すだろう!

圓潮の言霊によって、予言を信じる者達の目を覚まさせる為に、

清継はキーボードを叩く。

ノートパソコンの画面を睨む清継に、カナは声をかけた。

「……無理せず、話してきたら？ リクオ君と」

「いや、ボクには使命がある！ ちゃんと役に立ってから……。じやないと、ボクなんか顔見せするに値しないね！」

友達の濡れ衣を晴らそうと頑張る清継の背中を見て、カナは微笑んだ。自分以外にも、リクオを信じてくれる、助けようとしてる友達の様が嬉しかった。

一方、羽衣狐は自分の九尾を見た。金色の尻尾に抱えられて、眠っている青年の姿が目に入った。彼を見つめる羽衣狐の脳裏に、一同の前から消えた安心院の言葉が蘇る。

「いいかい、羽衣狐。目が覚めるまで、キミが主君を護って一緒に連れて行ってくれ。今の状況じゃあ、安全な場所なんて何処にも無いからね。それに、彼の力が必要になる時が必ず来る……！ 頼んだぜ！」

そう言い残して、安心院は一同の前から姿を消した。退魔の剣や天秤等の道具は、リュックの中にしまった。

——言われずとも、人間は妾めかけが護るっ……！

決意を新たに、羽衣狐は振り返って狂骨とがしゃどくろに顔を向けた。

「行くぞ、狂骨！ がしゃどくろよ！」

「はい、お姉様！ 何処までもお供致します！」

「羽衣狐様〜！」

二人の部下を従え、羽衣狐はリクオ達と共に圓潮を捜しに動き出

した。

*

ぽんっ。

ぽぽんっ。

「は……？」

青年は、目を瞬かせた。

茫然と立ち尽くす彼の前に広がるのは、東京の街でも、まして夢の中でも無かった。

輝く太陽の下で、食べ物、身に付ける物、様々な商品が並ぶ表店、届け物が詰まった籠を担いで走る飛脚、道行く人々に愉快な芸を見せる大道芸人、雑多な音と声が入り混じり、街は活気づいている。

目の前の光景を、青年は見た事がある。テレビで観かける時代劇の街の様子に、ソックリだ。

顔を上げて、青年は顔を顰めた。地上に降り注ぐ陽の光が、眩しい。

「何処だココ……？ どうなってんだ、コレ……？」

人々の熱気で活気づいてる街中を見回して、青年は不可解な現状に混乱する。

「おゝい！ 主君！」

不意に女の子の声と呼ばれ、反射的に顔を向けた。

人々の隙間を抜けて、手を振りながら走ってくる中学生安心院が見えた。

「安心院さん……!？」

「やあ、待たせて悪かったね」

「いや……って言うか、コレ何すか!? どうなってるんですか……!？」

「まあまあ。細かい事は気にせず、二人っきりのデートを楽しもうぜ！」

「はあっ……!？」

驚いて目を丸くする青年の腕に、安心院はさり気なく自分の腕を絡めてきた。

自然と二人の体は寄せ合い、腕に柔らかな感触を受けて青年は顔を赤くして動揺する。視線を巡らせるが、誰一人として自分達に注目する人は居ない。

興奮と緊張で唾を飲み込み、青年は尋ねた。

「あの、デートって……?」

「デートはデートさ。それじゃあ行くよ、主君！」

「ちよっ……待っ……!」

半ば強引に腕を引っ張られ、青年は安心院と共に活気溢れる街中を歩く。

> i 3 8 3 0 8 — 4 7 8 5 <

時は現代から約三百年前——元禄年間の江戸。

暗殺された奴良鯉伴が、当時、奴良組の二代目総大将を務め、山本五郎左衛門が私腹を肥やし、闇を支配していた時代。長きに渡る因縁の、始まりの時代――。

九の幕（後書き）

絵を描くのも楽しいな。……安心院ファンの皆さん、すみません。
あと基本、挿絵は白黒です。
いや、しかし……黒の背景に合わない絵ばかり描くな、俺……。

十の幕（前書き）

安心院先生「読者の皆、元気にしているかい？ 冬のコタツを堪能しているかい？ それはそれとして……えー、人の勢いと言うのは酷く不安定なモノでね。維持出来る人もいれば、途中で落ちる人もいる。特に、調子に乗って新しい事に挑戦する人程、すぐに落ちるモノさ」

青年「先生。前書きから挿絵継続の危機を示唆するような、嫌なフリから入らないで下さい」

安心院先生「まあ、ソコは作者の気力次第だね。それはそうと、番外編のネタに困ってるみたいなんだ。作者も考えてはいるんだけど、どちらかと言えば原作に手を加える方を主に書いてきたから、零から話を作るのは苦手なんだよ」

青年「先生。リアルに気まずい理由を、読者の皆に暴露しないで下さい」

安心院先生「先生も不安で仕方ないぜ」

青年「そうですね。僕としては、先生の発言が恐くて不安です」

安心院先生「そんな訳で、何かご希望の番外編の内容ネタがあれば、感想の“一言”にでも書いてくれたまえ」

青年「先生。現実逃避してもいいですか？」

十の幕

安心院が言うには、江戸は夢の中で再現された江戸の街だそう^コだ。そんな馬鹿な、と思ったが他に現状を説明出来る理由が無い。しかし、夢の中で眠って更に夢を見るとは、なんともややこしい事だ。そして、そんな常識外れ——否、妖怪外れまでした業を使う安心院はタダ者ではない。ぶっちゃけ、殆どチートの存在である。

しかし、それにしてもリアルな夢だ。肌を感じる光、熱気、耳に聞こえる雑音、全てが現実の感覚と変わらない位だった。本当に夢なのか疑いたくなり、いつそタイムスリップの方が納得してしまう。まあ、いくら安心院でも、時空を超える事は出来ないそうだ。もし、そんな事まで可能だったら、本当にチートだ。

青年が連れて来られた場所の説明はこれくらいにして、夢江戸に訪れた目的を話そう。

ココに来た目的は、宿敵・山本五郎左衛門の“真”を知る為だ。奴良組から過去話を聞いたが、残念ながら不十分だった。何故なら妖怪である魔王・山本五郎左衛門の誕生についての詳細が無いからである。“真”の話を聞かなければ、退魔の剣は抜けない。誕生に立ち合い、目撃した者から直接話が聞ければ、ソレが一番なのだが、叶わぬ事だった。その目撃者が、他でも無い暗殺された今は亡き奴良鯉伴なのだ。

コレはいけない、と安心院は一計を案じた。

ソレが、夢江戸である。過去の出来事を再現した夢江戸の世界に、主である青年を連れてきて、山本の“真”を探す事を実行した。理由を聞いた青年は、とりあえず頷いてみせた。

「なるほど……。まあ、貴女の狙いは解りました。ただ、幾つか疑問があるんですけど……」

「何だい？ どんな疑問でも、僕はお答えするぜ」

可愛く横ピースを決める安心院の笑顔にドキドキしつつ、青年は赤い顔で尋ねた。

「まず、どうして夢^{ユメ}江戸の住人は、俺達を見向きもしないんですか？ 西洋寄りの恰好なんて、この時代じゃあ凄く目立つのに……」

「ソレはココが夢の世界であり、僕が操作してるからさ。『僕と主君を認識させない』と操作すれば、この世界の住民は誰一人として僕達には気付かない」

「なるほど。それじゃあ、二つ目……何で俺は普段着のままなの？ 安心院さんもだけど……この恰好で江戸の街を歩くのって、かなりシニールなんですけど……」

「ソレは、キミに和服が似合わない判断した僕の親切さ」
「今さり気なく、傷付く事言いましたよね？」

素敵な笑顔で、相手の傷付く事を軽々と言う。ソレが、安心院と言う女だ。

気を取り直して、青年は最後の質問をした。

「じゃあ、最後……何で腕組み？」

「デートと言えば腕組みじゃないか。ベタで常識だぜ？」

江戸の街を歩く二人は、腕を絡ませたままだった。

顔が熱いのは、江戸の熱気だけが理由では無い。美少女と腕組みをした状態が、一番の原因となっていた。羽衣狐と付き合っているとは言え、他の女性に対する免疫は低いままである。しかも腕組みと言う特殊な状況下なので、余計に緊張していた。

それに安心院は安心院なのだが、普段見慣れている巫女姿とは、まるっきり印象が違うので、妙に調子を狂わされる。

「ベタと言つのは、昔から使い古され、愛されているからこそベタなのさ。だから、ベタを馬鹿にしたらダメだぜ？」

「いや、別に馬鹿になんかしてないですけど……」

「そうだね。現にキミは、そのベタな行為で顔を真っ赤にして初心うぶのように照れてるんだ。馬鹿にしてるハズが無いね」

——ぐわあああああああ！　なんつなんだ、この女はアアアアアア！？

顔を逸らして、青年は心中に悶えた。さっきから安心院は、ジャブを連発して精神的ダメージを与えてくる。

「な、何か……目的ズレてません……？」

「そんな事無いさ。僕達の目的は、二人で仲良く楽しく、山本さんの“真”を探す事だぜ」

「マジで、デート？」

外では百物語組によって阿鼻叫喚と化してる東京で、羽衣狐や奴良組が奮闘していると言つのに、随分と暢気で平和な有り様である。しかし、彼の隣に居るのは、ある意味危険で安心出来ない安心院。このまま、波乱騒動が起きずに済む訳が無い。本格的に“真”を探す前に、一騒動起きる事となる。

しばらく江戸の街を歩いていると、一軒の建物が目に映った。それなりに敷地が広く、建物も大きい。門から沢山の子供達が出てくるのを見て、青年は察しがついた。

「ああ、寺子屋か。へー、昔の子供は、こういう所で勉強してたのか」

門の前を通り過ぎようとして、青年の足がピタッと止まった。立ち止まる青年の前で、家に帰る子供達を見送る一人の女性が居

た。長い黒髪を下げた、妙齡の和風美人だ。しかも、その穏やかな笑顔には見覚えがある。

驚きのあまり、青年は名前を口にした。

「羽衣狐……？ いや、山吹さんか……！？」

「え？」

和風美人が振り返り、正面から顔を見合わせる。

やや大人びた感じだが、見間違えるハズも無く、羽衣狐が憑依している山吹乙女の顔だった。

「あゝ！ やつぱりそうだ……！ 山吹さんだ！ 江戸時代の山吹さん！ 現代よりちよつと大人びてて、髪型が微妙に違うけど、山吹さんだ……！ へえゝ！ 昔は、この寺子屋で先生やってたんだ……！ へえゝ！」

ちよつとした感動を憶え、青年は両腕を組んで山吹を見つめた。

着物姿も初めて見るので、いつもより華やかな印象を受ける。

そうしてまじまじと見ていると、予想外の事が起きた。

山吹は訝しげに首を傾げ、言った。

「あの、どちら様でしょうか？」

「え……？」

「すみません。私の方は覚えがないんですが……何処かで、お会いしましたか？」

青年は声を止め、笑顔で固まった。

後ろを振り返るが、いつの間にか腕から離れてる安心院しか居ない。通行人AもBもCも、全然姿が見えない。つまり、山吹の前に居るのは、青年と安心院の二人のみ。

顔を前に戻して、山吹と向き直る。相手は困惑した様子で、青年を見ている。

嫌な予感を抱き、青年は引き攣った顔で尋ねた。

「あの……僕の事ですか……？」

「はい」

「……おかしな事を訊きますけど、僕の事、見えてるんですか……？」

「はい。見えますけど、何か？」

「あつ、いえいえ、こっちの事でして……。あの、ちょっと失礼します……！」

引き攣った笑顔で断り、振り返って小声で安心院に問い詰めた。

「ちよつとオオオオオ！ 何で山吹さんに、俺の姿が見えてるんですかアアアアア！？」

「なに、このまま幽霊の如く誰にも気付かれないままだと、つまらなくてね。キミの姿だけ認識されるように、少し操作をただけさ」
「余計な事しないでいいですからアアアア！ ってか、つまらないって何っ！？」

笑顔で動じない安心院に対して、少し声を荒げた時だった。

突然、青年の体に紐が巻き付き、縛り上げて身動きを封じた。拘束された青年はバランスを崩して、その場に倒れてしまう。

「痛………！」
「痛………！」

「ウチの組の大事な人に、手え出そうとするたあふてえ奴だ………！」

上からドスの利いた声が降りかかり、青年は恐る恐る顔を上げた。

首元にマフラーを巻いた色男だが、その目は鋭く、威圧的な迫力が放たれている。両手には紐が握られており、青年を縛っているのだ。そして、よく見ると、色男は生首はあるが、胴体と顔を繋ぐ“首”が無い。

彼を見て、青年は顔を強張らせた。

「く、首無さんっ……！？」

「ん？ 何で俺の事を知ってるんだ？」

——しまったアアアアアア！ つい口が滑って……！

自分のミスに、青年は心中にシャウトした。

彼を縛り上げた色男の名は、首無^{くびなし}。奴良組の一人で、紐を操る妖怪である。

そして、青年の言葉を不審に思い、首無の警戒心は敵意になりつつあった。

「西洋風だが妙な恰好で、しかも奴良組^{おれたち}の事も知ってるみたいだな

……。てめえが何者なのか、詳しく聞かせてもらうぜ……！」

「待つて待つて！ 違うんです！ 確かに、そちら様から見れば怪しい恰好ですけど、敵じゃないです！ 本当ですっ……！」

「言い訳は本家で聞けっ……！」

必死に誤解を解こうとする青年だが、首無は縛りを緩めず、強制的に連れて行くこうとする。

その時、山吹が口を挟んだ。

「首無！ ちょっと待つて下さい！」

「山吹様！？」

首無の手が、一旦止まった。

「とりあえず、紐を解いてあげて下さい。変わった身なりをしてますけど、悪い人では無さそうですね」

「いや、しかし……」

山吹の言葉に戸惑う首無は、青年に視線を落とした。

縛られて転がってる青年は諦めたのか、情けない顔つきで大人しくしている。言われてみると、確かに悪意は感じられない。それに刃物等の危険物も、持っていないさそうだ。

しばし逡巡した後、首無は言われた通りにした。

「分かりました」

「ありがとうございます」

紐の拘束を解いてくれた事にお礼を言って、山吹は青年の前に歩み寄り、屈んで目線を合わせた。

「大丈夫ですか？ 恐がらせて、すみません。怪我はありませんか？」

ニコリと微笑み、山吹は青年の身を案じた。彼女の優しい心を表す、温かみのある笑顔だった。

そんな彼女の気遣いに、青年は嬉しくなった。容赦なくイジメてくる中学生、組の大事な人を護ろうとしたが故の行為とは言え縛り上げてきた妖怪。そんな中で、彼女だけが、優しく接してくれた。過去を再現された夢の中でも、山吹の優しさは変わっていないかった。思わず青年は、山吹に抱きついた。

「山吹さあああああんっ！」

「きゃっ！？」 ど、どうしたんですか？ やはり、怪我をされたん

ですか!？」

動揺して顔を赤くしつつ、抱きついてきた青年を宥める山吹。咄然とする首無の隣で、安心院は横ピースの構えで言った。

「無事に奴良組と接触出来て良かったね、主君。さて、奴良組と言うグループに入れたところで早速、『山本』の“真”探し大江戸ツアー!」に行こうじゃないか！」

「修学旅行か!？　ってか、この騒動の原因はアンタですよね?　ってか、今の状況で横ピースされると、ものっそい腹立つつ!　男だったら殴りかかってますよ!」

「いやいや、男は基本的に横ピースなんて気持ち悪い事はやらないから、どっちにしるキミは僕を殴れないぜ」

「ファツキンっ……!」

反論は返され、反撃は出来ず、青年は悔しさに声を荒げた。

しかし、安心院の姿が見えない山吹と首無の目には、一人で意味不明に騒いでるようにか映っていなかった。

青年、色んな意味で前途多難である。

*

現実世界の奴良組本家。

屋敷を囲む塀の屋根の上から、二人の妖怪が敷地内の様子を覗いていた。

敷地内にある人影は、三つ。その内二つは妖怪、最後の一つは人間だ。紐を操る妖怪が、女性の姿をした妖怪を縛り倒している。本家に侵入して、リクオの母親である若菜を殺しにきた妖怪を、首無

が捕えたらしい。

様子をうかがっていた妖怪は、つまらなそうに溜め息をついた。

「あーあ。本家が狙われると思って張ってたのに、あっけなく終わりそう。何よ、百物語組って大した事無いじゃない」

頬づえをついてばやくのは、京妖怪の鬼美子だった。

その隣に居るのは、しょうけらだ。

「では、我々は別の場所へ向かうぞ。羽衣狐様の敵は、アレだけでは無い」

「そうね」

しょうけらに促され、その場を離れようとした時だった。

鬼美子は、敷地の異変に気付いた。

「ねえ、アレ！」

「むっ！？」

敷地内を見て、しょうけらも顔を顰めた。

首無と女妖怪を中心に、四角い領域が広がり、外側に“幕”が構成されていく。屋敷の中に入ろうとしていた若菜も、“幕”に行く手を阻まれてしまった。

十中八九、敵妖怪の畏だろう。

この緊急事態に、鬼美子はニヤリと笑った。

「手柄のチャンス！　しょうけら！」

まだ閉じ切っていない上の部分から、しょうけらを連れて鬼美子は領域の中に飛び込んだ。

出口が消え、完全に閉じ込められた空間は、一瞬にして変化した。ソコは、まるで歌舞伎の舞台だった。

舞台に変化した空間に駆け付けた二人を見て、首無は目を見開く。

「お前達は、京妖怪!？」

「羽衣狐様の命令で、特別に加勢してあげるわ。有難く思いなさい！」

三人の妖怪が顔を合わせたところで、捕われていた女妖怪が立ち上がった。

「ふふふ……! 何人かかってこようが、無駄な事だ……! ココは……ボクの“あじやうえんぶ戯演舞”……! 演目が終わるまで、絶対に出不れないっ……!」

どこからともなく太鼓の音が鳴り、女妖怪の姿も変化した。

顔には化粧が施され、腰より下まで伸びた長い髪を歌舞伎の毛振りしながら、手には薙刀を構えて太鼓のリズムに合わせて舞台上で舞う。

「首無に京妖怪……アツ、闘いがいがあ、アツ、あるようだあゝなあっ!？」

山本本の面の皮——狂役者の珠三郎。たまごふう

三対一と言う不利な状況であるにも関わらず、珠三郎は余裕だ。その態度が癪に触って、鬼美子は表情を陰しくさせた。ココが相手の領域だと解っていても、舐められていると思うと不快になる。だが、相手が複数でも気圧されず、自信を持っているのは敵の能力にある事は解っていた。

自分達を閉じ込めた空間から察するに、珠三郎は『領域型妖怪』

だ。特定の範囲内で、絶対的強さを発揮する厄介なタイプである。
冷静に敵を分析して、首無は気を引き締めた。

「若菜様！ 奥に隠れていて下さい！」

「わ、分かったわ！」

言われた通りに、若菜は舞台の奥に身を隠した。
同時に、珠三郎が動く。

「この舞台には、正本ほんぽんがある……！ 立て役者が勝利する、古典的
正本がなっ……！ 闇に散れ、悪漢よっ……！」

「面白え……！ ここでちゃんと仁義通してみろや。ええ……首無
っ……！」

「死にゆく者へ……神よ、慈愛の光あれっ……！」

刃を向けてくる珠三郎に、首無は紐、しょうけらは三本の刃が付
いた巨大な十字架を構えて迎え撃つ。

ひかりあれ！

しょうけらが、畏の光を発する。光に畏れを抱き、目を眩ませた
隙に相手の体に十字の刃を突き刺す。そうして罪人あいてを裁くのが、し
ょうけらの戦法。

しかし、珠三郎は長髪をカーテンに、光を遮って突っ込んできた。

「むっ……！」

しょうけらは動揺するも、十字架の刃を薙ぐ。

珠三郎は手に持つ薙刀で受け、刃の上を走らせて反撃の斬撃を繰
り出す。体に傷を受けたが、咄嗟に後ろに跳んで深手は免れた。青

田坊の時と同じミスは犯さない。

敵がしょうけらと交戦してる隙に、首無は仕掛けを施す。珠三郎の足下を中心に、紐で螺旋を描く。

螺旋刃らせんじんっ！

紐を一気に引き、螺旋の中心の珠三郎を切り刻もうとした。だが、コレも珠三郎は宙に跳び、紐の刃から逃れる。

「くっ……！」

技を抜けられ、首無は齒噛みして睨む。

舞台に舞い降りた珠三郎は、化粧をされた顔に歪んだ笑みを浮かべた。

「正本通り……なかなかの立ち回り……見事っ！ 思った通りの良き役者達だ……！ その息遣い、手に取るように伝わってくる……！」

首無は苦虫を噛み潰した顔になり、しょうけらも眉根にシワを寄せて目を細めた。

——我々の動きが、読まれている……？

珠三郎は、まるで先読みしたかのように、悉くこちらの攻撃を躲かわしている。恐らくは、ソレが敵の畏の能力なのだろう。

「だが、悲しいかな、首無に京妖怪よ……キミ達とボクとでは、役者が違うっ！ “戯演舞”……。主役は、この珠三郎っ……！ 脇役には、そろそろ御退場願おうっ……！」

太鼓の音に合わせた珠三郎の動きに、首無としょうけらは気圧さ

れる。

その隙を衝いて、珠三郎は薙刀を振るい、二人に襲い掛かった。しょうけらが十字架で防御して受けるも、反応がギリギリだったので堪え切れず、二人揃って後ろに吹き飛ばされてしまう。床に打ち付けられ、首無は頭から一筋の血を流した。

「ぐっ……！ 珠三郎（とうづ）の力自体は大した事は無い……！」

「だが、妖怪の闘いは畏の奪い合いだ……！」

——こいつの舞台の中では、その演舞は蠱惑的……！ 悔しいが、俺達は奴の魅力（おそれ）に目を眩まされてる……！

演舞に魅了され、珠三郎の正本通りに事が進んでいるのだ。戦況をひっくり返すには、奴の畏を断ち切る他にない。

逆転の手を模索していると、首無はある事に気付いた。

「おい。お前の仲間の、小鬼は何処に行った？」

「……そう言えば、姿が見えん」

しょうけらも舞台を見渡すが、鬼美子の姿は見当たらない。

その時、突然舞台の明かりが消え、暗闇に包まれた。二人は互いに背中を合わせ、周囲を警戒する。

次の瞬間、太鼓の音と共に舞台の一ヶ所に明かりが照らされた。明かりの下には、隠れていたハズの若菜と彼女の背後に立って薙刀を構える珠三郎の姿があった。

突然の異変に、若菜は目を丸くする。

「え？」

「わ……若菜様アア！？」

心臓が跳ね上がり、首無は声を上げた。

冷酷な笑みで、後ろを取った珠三郎は無防備な若菜を見下ろす。

「ふふ……！ 奴良リクオの母親よ……あ、刀のさあびいになれ
く！」

台詞が終わり、薙刀を振り下ろして、刃を血に染めようとした時
だった。

突如、舞台の主役に思わぬ事態が襲った。

白い和風の寝巻を着た若菜の胸元から、小さな影が飛び出た。突
然の事に対応出来ず、珠三郎は迫ってきた影を顔に受けた。

首無としようけらも、驚いて目を見開く。

動揺が走る一同の耳に、女の子の声が聞こえた。

「アンタ……この舞台には、正本があるって言ってたよね……？
じゃあ、こういう意外性アドリブに弱いんじゃないかな？」

顔に傷を負った珠三郎に向けて言ったのは、姿を消していた鬼美
子だった。しようけらと首無が闘ってる間に、コッソリと若菜の着
物の中に隠れていたのだ。勿論、本人の了解は得ている。

「突発的な事態に弱い……ソレが、アンタの畏の弱点……！ コレ
で、アンタの舞台は台無しね……！」

小柄な少女にしては大人びた妖艶な笑みを浮かべ、鬼美子は畏を
発した。

正本を乱され、心に隙が出来た珠三郎は不覚にも気圧され、畏に
吞まれてしまった。

「はっ……！？」

そして、珠三郎の前から一同の姿が消えた。

いや、一人だけ残っていた。畏を發した張本人の鬼美子だ。他の役者が消えた事に、珠三郎は動揺を隠せず狼狽する。小さな足で、大舞台の上を静かに歩き、動揺してる珠三郎に近付く鬼美子。

小馬鹿にしたように小さく笑い、鬼美子が語る。

「私の畏は、相手を魅了して美しい私しか見れないようにする……！
まあ、羽衣狐様の美しさには劣るけど」

彼女の能力は、謂わばぬらりひよんの明鏡止水と逆の効果である。相手を自分の虜にして、他の存在を認識させない魅惑の畏。

> i 3 8 4 9 9 — 4 7 8 5 <

「ば、馬鹿なっ……！ この舞台で、ボクが畏れを抱くなど……！
？」

信じられない事態に、珠三郎の動揺は増すばかりだった。ますます鬼美子の畏に吞まれる結果となり、もはや彼の目に首無達の姿は映る事は無い。

そして、舞台の幕引きの時は来た。

突然、体の動きが止まった。金縛りにでもかけられたように、身動きが取れない。

「う、動けぬ……！？ ど、どという事だっ……！？」

周りが見えなくなっている珠三郎には、自分の体の異変の正体が解らなかった。

畏で強化された極細の糸が、珠三郎の体を捕えて、拘束しているのだ。仕掛けたのは首無だが、鬼美子の畏によって認識を許さなかった。

「神よ……！ この愚かな罪人の魂を、天に導きたまえ……！」

不気味な程に優しい声を聞いた直後、珠三郎の腹を十字架の刃が貫いた。

顔を苦痛に歪め、口から鮮血を吐く。舞台の主役は、正本を乱された途端に容易く崩れ落ちた。

主役が敗れた事で舞台は無くなり、畏は消え、珠三郎は変身が解けて地面に倒れた。

トドメを刺したしょうけらは、両手を高々と上げ、夜空に声を響き渡らせた。

「闇の聖母様アアア！ このしょうけらが、敵の幹部を一人討ち取りました——」

「ちよつと待ちなさいよ！」

「うづつ！？」

背中に鬼美子の蹴りを受け、しょうけらは地面に倒された。

「アイツに勝ったのは、私とあの人間の女のお陰でしょうが！」

声を荒げて、しょうけらの背中を何度も踏みつける。

すると、怒れる彼女を後ろから若菜が抱きついた。

「小鬼ちゃん、ありがとう！」

「ちよつ……放しなさいよ！ 私に頼ずりしていいのは、羽衣狐様だけよっ！」

拒絶する鬼美子だが、若菜は笑顔で頼ずりを続ける。感触が気に入ったのか、なかなか手放さない。

無事で元気な若菜の姿を見て、首無は安堵の溜め息をついた。一時は肝を冷やしたが、助かって本当に良かった。

「首無くん」

不意に名前を呼ばれ、若菜に振り返る。

「ありがとう……！」

礼を言われた首無だったが、彼の中では逆だった。

自分なんかを受け入れてくれた時から、礼を言うのは自分の方だった。

護るべき奴良組と、ココの妖の為に強くなる事を改めて決意した。

*

奴良組本家での闘いが決着した頃、羽衣狐一行は深川に居た。

清継達を青田坊達に任せ、百物語組の拠点を探しているのだ。コ

コは、旧山本邸があつた場所であり、東京に拠点があるとすればココしかないと睨んだのである。

「よし！　いくぞ、てめえら！　圓潮を見つけ出すっ！」

リクオを先頭に、一行は搜索を開始する。

部下に街中を探させ、リクオ達は人気の無い川を怪しく思い、入

り込む。すると、百物語組の手と思われる妖怪が襲い掛かってきた。リクオは畏を乗せた刃を振り抜き、妖怪を斬り捨てる。氷麗は冷気で凍らせ、イタクは鎌で切り裂き、竜二は陰陽術で次々と滅していく。

羽衣狐は青年を抱える以外の尻尾で、薙ぎ払い、細切れにして目障りな妖怪を始末する。狂骨は蛇を走らせて相手の眼球を喰らい、がしやどくろが巨大な手で上から叩き潰す。

雑魚妖怪を蹴散らす中、羽衣狐は表情を陰しくさせていた。胸中に妙な引つ掛かりと言つか、陰りがあり、雑念となって心を乱される。

戦闘に集中してるリクオ達から少し離れ、周りに聞こえない声で囁く。

「安心院。聞こえておるか？」

「ああ。傍で聞いてるよ、羽衣狐」

まるで手品のように、巫女姿の安心院が羽衣狐の背後に現れた。突然の出現には驚かず、羽衣狐は言った。

「お主、一体何を企んでおる……？」

「急に人を呼びつけておいて、いきなり不躰な質問をするじゃないか」

言葉とは裏腹に、相変わらず笑顔で機嫌を悪くした様子はない。構わず羽衣狐は続ける。

「人間に厳しい課題を出しておきながら、実際にはアドバイスを与えたりと、生温い行為をしておった。お主の事だ……眠っている今も、人間に何か仕込んでいるのだろう？ 人間が主である事を加味したとしても、妾には妙に献身的過ぎるように思えるのだが……」

目付きを鋭くさせ、黒い瞳で射抜くように睨みつけた。隠された相手の真意を探ろうとしている眼差しだ。

対する安心院は、やはり全く動じずに視線を受け止め、笑みを張り付かせた顔で静かに見据え合う。

その間にも、何匹もの妖怪が襲い掛かってきたが、月明かりを受けて金色に煌めく尻尾によって肉塊に変えていった。羽衣狐の九尾は、敵を自動的に倒す防衛システムのような動きをするのだ。

ややあつて、安心院が先に沈黙を破った。

「流石は、羽衣狐と言ったところかな。女の勘ってヤツかい？ まあ、いいだろう。そうだねえ……僕の企みを教える前に、少し聞いてほしい事があるんだ」

「手短にせよ」

「ああ。状況が状況だからね。

一つ、僕はキミの恋人を奪うつもりなんて、これっぽっちも無い。二つ、僕はキミ達のように、愛だの友情だのくだらねー感情を抱いた事が無い。

この二つを踏まえた上で、僕の言う事をよく聞いてくれ……！」

そして安心院は、驚きの言葉を口にした。

「どうやら僕は、人間に恋^{かれ}をしてしまったらしいんだっ……！」

> i 3 8 5 0 1 — 4 7 8 5 <

十一の幕

安心院の言葉を聞いて、羽衣狐は声を上げそうになった。

だが、喉まで差しかかったところで飲み込んだ。掴みかかり、声を荒げる事を我慢して、黙して鋭い眼差しを向けて睨む。

どうやら僕は、人間に恋をしちゃったらしいんだっ……！

この答えは、半ば予想していた。だからこそ、安心院の行動に違和感を覚え、今も爆発しそうな感情を抑える事が出来ている。

しかし、聞いて納得出来る事では無い。本人の口から、自分は愛や友情と言った感情は持っていないと言っていた。羽衣狐が聞いた限りでは、嘘を吐いてるようには思えなかった。

そして、最も不可解な矛盾——羽衣狐の恋人を好いたハズなのに、彼女から奪い取る気は全く無い。この言葉からも嘘を吐いてる印象は、まるで無かった。

何を考えているのか、サッパリ解らない。
すると、安心院は崩れない笑顔で言った。

「そう恐い顔しないでくれよ、羽衣狐。折角の綺麗な顔が台無しだぜ？ いや、主君なら“怒った顔も綺麗だ”なんて言いそうだけだね」

「……そうじゃな。そのような事を、言われた事はある」

「だろうね。さて、それじゃあキミが感情を抑えてくれている内に、本題を続けようか。」

まず、主君——つまり、キミの愛する人間君に恋をしたと言ったけど、ソレが恋愛感情なのか僕自身にも甚だ疑問なんだぜ。さっきも言ったように、僕は物であり、今まで恋愛なんてした事が無い。この長い時の中で、それなりに沢山の主と妖退治の為に付き合っ

きたさ。ただねえ、彼だけは違うんだよ。

どうしてか、放っておけないのさ。面白そうな男だとは思ったけど……何故だか、ソレ以上に気に入っていてね。主従関係とも友情とも戦友とも違う……消去法で、“恋”と断定したってトコだよ。要は、他に例える言葉が無かったのさ。だけど、一人の人間を意識して気にする点では、恋と共通しているから、あながち間違いでも無いと僕は思っているんだ」

これまで恋愛をした事が無かった故に、安心院は今の自分が解らなかつた。そこで色々考えた結果、恋をしてると言う答えに辿り着いたのである。

しかし、コレだけでは充分な答えではない。肝心の“好きになった理由”が不透明であり、まだ最後の矛盾が残っている。

羽衣狐が心中に抱く疑問を見透かしたように、安心院は続ける。

「恋をした理由については、正直なところ僕にも解らないのさ。まあ、どうしても理由が必要なら、幾らでも後付けしてやるぜ？ 面白い男だから、駄目で放っておけないから母性本能を刺激されたから、彼の男気に惚れたとか……。恋愛漫画を読む奴は、どこいつも“ちゃんとした理由”を求めるけど、世の中には一目惚れてヤツがあるだろう？ 僕の場合は、ソレと似たようなモノかな。ああ、そう言えば“人を助けるのに理由なんか要らない”なんてカッコイイ台詞もあるね。

だから理由なんて要らないし、僕自身も特に欲しいとは思わない」

雑魚妖怪を蹴散らしながら安心院の答えを聞いていると、狂骨からアジトの入り口らしき物を発見したとの報告を受けた。

一旦話を中断して、リクオ達が集まっている場所に向かう。川の堀から突き出ている下水管の入り口があり、草で隠されていた痕跡がある。見つけてカモフラージュの草を刈り取ったのは、イタクだ

そうだ。

リクオ達を先頭に、羽衣狐達も下水管内に突入する。
その時、安心院が羽衣狐の耳元で囁いた。

「そろそろ物語も佳境に入ったみたいだから、僕からの話もこれで最後にするよ。僕はキミの愛しの人間君に恋をしたけど、くだらねー泥棒猫のように奪うつもりは無い。そこで僕は、略奪以外の極めて平和的な解決法を見つけたのさ。

ソレは——キミ達二人を、僕に惚れさせるっ……！」

流石の羽衣狐も、コレには動揺を隠せず、ギョツとした目で振り向いた。

この女、羽衣狐から青年を奪わない形で手に入れる為に、とんでもない解決策を口にしたのだ。確かに羽衣狐も一緒に虜にしてしまえば、青年を奪った事にはならない。

安心院の狙いは所謂、ハーレムと言う奴だ。

「言っておくが、僕は本気だぜ……！ 必ずキミと主君を、僕に惚れさせる……！ それじゃあ、後は頼むぜ羽衣狐ちゃん！」

自信に満ちた不敵な笑みで、宣戦布告とも取れる言葉を言い残して、再び安心院は消えた。最後に名前を言った時は、妙に今まで以上の親しみが込められていた。

残された羽衣狐は、半ば放心状態のように、それでも足は止める事なく走り続ける。背後から雑魚妖怪が襲ってきたが、何匹でかかってこようが所詮、雑魚は雑魚。自動防衛の九尾によって、瞬殺されていった。

殺した妖怪など意に介さず、羽衣狐の黒い瞳は虚空を見つめる。

「妾を……惚れさせるじゃと……？」

他人に聞き取れない声で、ボソリツと呟いた時だった。

下水管の上の部分が崩れ、巨大な百足むかでのような妖怪が現れた。横に大きく裂けた口には、鎌のような鋭い牙を持ち、背後から羽衣狐に襲い掛かる。

敵の奇襲に気付き、前に居るリクオ達が一斉に振り返った。

「羽衣狐様アアアアア！」

狂骨が声を上げ、急いで駆け付けようとする。

しかし、次の瞬間、薄暗い下水管内で百足妖怪の顔に金色の線が走った。直後、百足妖怪の顔が、縦真つ二つに割れて崩れた。

だが、敵の攻撃はまだ終わりではなかった。斬り倒された百足妖怪の体内から、骸骨姿の妖怪が複数出てきて、一斉に襲い掛かってきたのだ。

羽衣狐は振り向きもせず、尻尾だけを伸ばす。

四尾の槍“虎退治”っ！

鋭い槍と化した金色の四尾が、容赦無く敵の体を貫いていく。胴体到大穴を空けられ、頭や腕を吹き飛ばされた髑髏妖怪が、羽衣狐に触れる事すら出来ずに下水の中に沈まされた。

雑魚とは言え、一人で複数の妖怪を見向きもせずに秒殺した羽衣狐の圧倒的強さに、一同は言葉を失くす。京都の地ちからで直接刃を交えたリクオは、改めて羽衣狐の実力を目にして、力の強大さを再認識する。この半年の特訓で自分は強くなったが、彼女との実力にはまだ差があるようだ。アレでも、羽衣狐は本気を出していない。

「お姉様……！ ご無事で何よりです……！」

簡単に妖怪を返り討ちにした姿を見て、狂骨は胸を撫で下ろした。
その時、羽衣狐は短く笑った。

「ふふ……！ 面白い……！ この妾を惚れさせるか……！ よか
ろう……その挑戦、受けて立つぞ……安心院よっ……！」

*

場面は変わって夢江戸。

現実世界で羽衣狐達が、百物語組のアジトに突入した一方で、青年と安心院は奴良組の本家屋敷に居た。

寺小屋で山吹と首無と出会った時、気になる話を聞いたのだ。何でも、奴良組でない妙な妖怪が江戸の街をうろついてるらしい。首無から話を聞いた山吹は、帰した子供達の事が心配になり、後を追いついた。首無に続き、青年も百物語組に関係あると思い、安心院を連れて向かった。すると、山吹の不安は的中した。草むらに入り込んだ子供の前に、人の形をした百足の妖怪が現れたのだ。何匹もの大型百足が右腕を形成して、獲物に襲い掛かると蠢いている。子供の危機に山吹が駆け出し、すぐ後に青年も駆け出した。スタートは山吹が早かったが、やはり人間でも成人男性である青年の方が体力があり、彼女を追い抜いて百足妖怪——まんば百足の牙が迫る子供を庇った。青年の足に牙を掠りはしたが、子供は無事だった。そして、子供と青年を標的に定めたまんば百足が、猛毒の牙を持つ百足を走らせようとした時だった。颯爽と人影が間に割り込み、手に持つ刃を振り抜いた。二人を襲おうとしたまんば百足は、体を細切れにされて、その場に崩れた。青年を助けたのは、奴良組二代目総大将・奴良鯉伴^{ぬらいはん}だった。

青年は百足の毒に侵され、苦しい息遣いで茂みに倒れた。その場

で鯉伴が、母親譲りの癒しの能力で毒を消して傷を治し、妻と寺子屋の子供を助けてくれた恩人として本家に招いた。

そして、現在に至る。毒は消えたが、大事を取って案内された部屋で安静にするようにした。

「すまねえな。お前さんが居なきゃ、大事な女を傷付けられるところだったぜ。礼を言うよ」

青年と向かい合い、妻を庇ってもらった礼を言った男が二代目総大将であり、山吹の夫である鯉伴。後ろに伸びた長い黒髪で、後ろに一つ結び、着物を粹に着こなした色男だ。癖なのか、片目を閉じて笑顔を向けている。

「私の方も、寺子屋の子を助けていただいて、ありがとうございます」

彼の隣に座ってる山吹も、頭を下げてお礼を言ってきた。

慌てて青年は、照れた様子で両手を振った。

「いえいえ、そんな……！ こちらこそ、百足の毒から助けてもらって……ありがとうございます！」

ちなみに、彼が助けに入ったのは、決して子供を救う為では無い。山吹に被害が及ぶのを防ぎたかったのが、本当の理由である。厳密には羽衣狐と山吹は別人だが、そんな理屈では無く、惚れた女を傷付けたくなかったのだ。羽衣狐と出逢って、彼も変わったようだ。

互いにお礼を交わした後、青年は誰も居ない後ろを一瞥して、鯉伴と山吹に言った。

「あのお、すいません。ちょっと、失礼していいでしょうか？」

「ん？ 厠かわやだったら、俺が案内してやるぜ？」

「いえいえ、そうじゃなくて……ちよつと、ね……」

複雑な笑いを漏らして、青年はそそくさと部屋を出た。

残された二人が訝しげに顔を合わせると、襖越しに青年の抑えた声が聞こえてきた。屋敷の中は静かなので、耳を澄ませば部屋の中に声が届くのだ。

「お札使えないなら、最初からそう言っておさいよオオオオオ！
お陰で俺、お札の防御使えるもんだと思って突っ込んで、百足の毒受けちゃったじゃないですかアアア！」

「心配いらないぜ、主君。例え百足の猛毒で死のうが、爪で切り裂かれようが、噛み殺されようが、夢の中で本当に死ぬ事は無いからさ」

「そういう事も、初めに教えて下さいよオオオオ！ もう心臓に悪過ぎ！ ホントに死ぬかと思ったんですから……！」

声を抑えながらも感情を込めて文句を言うが、安心院は素敵な笑顔で処理していく。口論で安心院に勝つのは、不可能だと青年は心中に悟った。

襖越しに口論をする二人だが、安心院の存在を認識していない山吹と鯉伴には青年の声しか聞こえず、妙な独り言に揃って首を傾げる。

口論に敗れた青年が、部屋の中に戻った。

「あ、どうもすみません」と頭を下げる青年。

「お前さん、寺子屋の前でも妙な独り言を言ったらしいじゃねーか」

笑みを浮かべる鯉伴の言葉に、青年はドキツとする。

「後ろに、何か見えないもんでも在るのかい……？」

妙な凄みと言うか、真に迫るような迫力で鯉伴は訊いてきた。伊達に、百鬼夜行の主をやっていない。しかし、決して敵意が込められてる訳ではない。寧ろ、相手を見定めるような目で、好奇心の色が混ざっているように見える。

とは言え、静かな迫力に気圧されて、青年は目を逸らしてしまった。

「え……背後霊^{はいしれい}、みたいな……」

青年にしか姿は見えず、彼の後ろに付いているから、表現としてはあながち間違っではない。

しかし、本人は氣に入らなかったようだ。青年が答えた瞬間、周囲の空気が凍りつき、寒氣を感じた。異変に気付いた直後、青年は安心院に背後からスリーパーを極められた。

「確かに、僕の存在は主君にしか認識されてないから、そういう言い方も出来る。けど、僕個人としては、愉快的表現ではないね」

「ちよっ……！ タップ、タップっ！ す、すいませんでした……」

！ 悪氣は無かったんです！

「おいおい、大丈夫かい？」

急に苦しみ出した青年の様子に、鯉伴は腰を上げた。

丁度その時、安心院が腕を解いた。解放された青年は、呼吸を整えて鯉伴に片手を向けて制した。

「だ、大丈夫です……！ ちょっと、み、見えない相方が、機嫌を悪くしまして……」

「見えない相方……」

聞いて鯉伴は、青年の後ろに目を向けた。

何も見えないし、気配も感じない。何かある、とも思えない。例え幽霊だとしても、妖怪の血が流れてる自分なら何らかの気配を察せるハズだ。しかし、実際は何も感じない。

青年に顔を戻して、面白そうに鯉伴は笑った。

「面白え男だ。お前さんみたいな奴は初めて見るぜ。妖怪だったら盃交わして、俺の百鬼夜行に加えてートコだ」

「いえ、そんな……。つまらない男ですよ、俺は……」

謙虚な態度で、青年は答えた。

二人の会話を、山吹は微笑ましく聞いていた。自分達を妖怪と知っても恐れず、まるで普通の人と接するような青年の態度に好感を抱き、自然と笑みを浮かべてしまう。

すると、鯉伴が立ち上がり、踵を返して廊下に出る襖に歩みを進めた。

「山吹。ちよいと出てくるから、後は任せたぜ」

「え？ あ、はい」

妻の山吹の返事を聞いて、鯉伴は部屋を出た。

二人つきりになるかと思いきや、入れ替わりで別の人が室内に訪れた。

白い着物を身に纏った、黒髪の美女だ。首にはマフラーを巻いており、長い黒髪を後ろに降ろしている。

彼女を見た瞬間、青年は目を見開き、思わず口を開いた。

「氷麗さん……？」

「は？ 誰よソレ？」

青年の呟きに、美女は鋭い目付きで、ぶっきらぼうに答えた。
あれ？ と青年は顔を引き攣らせ、よく女性を観てみる。全体的に容姿は似ているが、雰囲気が若干刺々しい感じで目付きは鋭く、何より特徴的なグルグル模様の瞳が赤い。氷麗の瞳の色は黄色で、この点だけでも彼女とは別人だ。

外見の相違点から、青年が美女の正体を予想した時、後ろに座る安心院が言った。

「さしずめ、氷麗ちゃんの母親と言ったところかな」

俺もそう思います、と青年は心中で相槌を打った。
すると、青年の視線を受ける美女が、顔を顰めた。

「何ジロジロ見てるのよ？ 気持ち悪いわね」

美女のキツイ言葉に、青年は大きな精神ダメージを受けた。
しかし、シヨックを受ける半面、彼女の氷のような冷たい眼差しを良いと感じてしまう自分が居た。そう思った時、改めて自分は変態になったんだな、と実感して少し悲しくなった。羽衣狐の虐めは、マジで半端無いんです。

色んな意味で落ち込んでいると、山吹が苦笑いを浮かべて美女に言った。

「雪麗さん、流石に言い過ぎですよ。ところで、どうしたんですか？」

「ソコの怪しい男が、あんたに手え出さないように見にきたのよ」

ガクツ、と青年の心に氷の刃が突き刺さり、更に頂垂れた。

——お、俺って、やっぱりそんな風に見えるんだ……。ふ、ふふ……。終わった……。ワイはクスや……。！ 人間的に、ワイは終わリや……。！

雪麗の言葉が、かなり堪えたようで青年の周囲は、どんよりと重い空気に変わった。シヨックが大き過ぎて、言い返す事すら出来ない。何より、本人が変態である事を自覚してるので、反論など出来るハズも無い。

そこへ、優しい山吹が弁護した。

「雪麗さん、言い過ぎですよ。それに、彼は悪い人じゃありません」
「ふんっ」

山吹の言葉に鼻を鳴らすも、少し間を空けて雪麗は言った。

「……まあ、乙女ちゃんを庇ったのは本当みたいだから、その事に關しては礼を言うわ」

不意にお礼の言葉を聞かされ、青年は顔を上げた。

ぶっきらぼうでキツイ態度をしているが、本当は優しい女なのだと察した。心根が優しいと言う点では、羽衣狐と似たところがある。場の気まずい空気が少し払拭され、しばし三人で雑談を交わした。

しばらくして、鯉伴が部屋に戻ってきた。

「よお。ちょっと外に出てくる。お前さんはゆっくりしてな」

最後に青年に言い残して、鯉伴が去ろうとした。
そこで、青年は慌てて鯉伴の背中へ声をかけた。

「あの、何処に行くんですか？」

「ん？ なに、ちょっと野暮用でな」

「百物語、ですか……？」

青年が、その名を口にした途端、空気が少し張り詰めたモノに変わった。

背中を向ける鯉伴は、僅かに顔を動かし、横目で青年を見る。

一同の注目を浴びる中、青年はおずおずと言った様子で申し出た。

「その……俺も一緒に、行ってもいいですか……？」

鯉伴は答えず、黙って青年を見据える。

受けて青年も、今度は目を逸らさずに見つめ返す。鯉伴の反応から察するに、向こうも百物語について調べてる様子だ。もし、そうならば、同行して調査すれば山本“真”に近付けるかもしれない。そう思ったのだ。

静寂な空間で、互いに視線をぶつけ合う二人の男。

ややあって、鯉伴が笑みを浮かべ、口を開いた。

「いいぜ。ついてきなっ……！」

鯉伴は、青年を信用に足る人物と見定め、申し出を受けた。

屋敷の玄関で、青年は靴を履いて外出の準備をしていた。

これから、まだ見ぬ憎き山ン本と相見^{あいまみ}えるかもしれないと思うと、感情が昂^{あき}ってくる。恋人を利用され、地獄に墮^おとされかけたのだ。必ず“真”を手に入れて、現実世界でぶった斬^きってやる。

心中に意気込み、靴紐を結び終えた。

「あの……」

「山吹さん」

不意に後ろから声をかけられ、振り返ってみると山吹が立っていた。見送りに来てくれたようだ。

「気を付けて下さいね。相手は妖ですから、無理をしないで……」

「はい。心配してくれて、ありがとうございます」

山吹の純粋な気遣いに、青年は素直に礼を言った。

立ち上がり、玄関の戸を開けようと手をかけた時、山吹が言った。

「貴方は、鯉伴と似ていますね」

「え……？」

振り返り、青年は訝しげに片眉を上げた。

「似てるって……何がですか？」

「あの人は、この江戸の街と人間達、自分の百鬼が大好きな方です。大好きなモノの為に頑張るところは、鯉伴と似ています」

山吹の言葉に、自分の気持ちバレたのか、と青年はどきまぎする。なるべく平静を装い、動揺を顔に表さないようにした。

しかし、青年の心配は杞憂に終わった。

「きっと貴方も、誰か大切な人の為に頑張ってるんですよね。そういう気持ちが伝わってきて、何となく解ります。あの人も同じモノを感じて、貴方を連れて行く事を決めたんだと思いますよ」

聞いた瞬間、青年はホツと安堵した。どうやら、悟られた訳ではないようだ。

しかし、別の理由で青年は、照れ隠しするように頭を掻いた。羽衣狐や山吹の為に動いてる事は確かだが、その事を他人から言われると妙に気恥ずかしくなる。それに、目の前に立つのが大切なモノの一つなので、顔を合わせられない。

気まずい空気を嫌い、青年はさっさと背中を向けた。

「……じゃあ、行ってきます」

「はい。お気をつけて」

玄関の外に出て行く背中を、山吹は笑顔で見送った。

夜の江戸の街に出た青年は、鯉伴達と共に『山本五郎左衛門』と言う名と百物語を手掛かりに、搜索を開始した。個人名は有力な手掛かりとなり、奴良組の情報網はすぐに怪談の会場を突き止めた。何故、青年がこのような情報を持っているのか疑問に思う者は居たが、鯉伴に諭され、詮索はされずに済んだ。そんな事よりも、シマの畏れを奪われてる現状を早く解決する事が、先決でもあった。

怪談会場の場所は、江戸で材木屋を営み、材木の買い占めや蜜柑の江戸輸送で巨利を得た大富商——山本五郎左衛門の屋敷だった。しかし、場所の特定は出来たものの、厄介な問題が一つ。調査の結果、ソコはく招かれた客>しか入れないと言う特殊な境界が張られているようなのだ。それも、客は豪商や位の高い武士ばかり。いかにぬらりひょんと言えど、コレでは容易に入れない。

コレには鯉伴を始めとする奴良組も、頭を悩めた。

その中で、青年はある事を閃いた。

考える組の輪から少し離れ、声を抑えて安心院に話しかけた。

「安心院さん。ちょっと頼みたい事があるんですけど……」

「言つてごらん」

青年の案を、安心院は笑顔で快く受け入れた。

山本屋敷。一商人とは思えない程の広い敷地に、豪華な屋敷が立てられていた。

その屋敷に、続々と豪商達が訪れる。

「銭屋様。高田様。越後谷様。淀屋様。奈良屋様……」

屋敷の入り口で、受付の女性が名前を確認している。

訪れた豪商は皆、山本の百物語と覇者の味がすると言われる茶の味を知り、侵された愚者である。

その様子を、上の階から山本が下卑た笑みを浮かべて眺めていた。金と権力を手に入れた山本は、今宵の百物語で更なるモノを我が物にしようと企んでいた。ソレは、生きながらにして自分自身が仏となり、人々の信心を根こそぎ手に入れ、支配すること。

そして今宵、<百鬼の茶釜ひゃっき ちやがま>が畏で満たされた時、彼の野望は成就するのだ。

野望達成まで後少しと迫り、堪え切れずに歪んだ笑顔を浮かべる。その時、受付の女性が一人の旗本の名を告げた。

「坂井様」

名を明かして屋敷の中に踏み込んだのは、青年だった。

安心院に頼んで、旗本・坂井家の若き跡取りと言う設定にして、屋敷に入れる条件を満たしたのだ。夢の世界で自由に操作出来る安心院にとって、造作も無い事だった。

緊張した面持ちの青年の恰好は、旗本らしい着物姿に変わっていた。コレも安心院の操作によって、衣服を変えてもらったのである。そんな彼の後ろには、セーラー服姿の安心院が顔に笑みを張り付かせて付いてきていた。

そうして見事に潜り込んだ青年と安心院は、先の豪商達に続いて屋敷の奥に進んで行く。やがて、一つの大広間に着いた。ソコには淡い蠟燭の光が灯されており、不気味な雰囲気漂っている。大広間に集められたのは、青年を入れて九十九人。後から訪れる山ン本を加えれば、丁度百人。怪談の数と一致する。

全員が畳みに腰を降ろした時、襖が開かれた。全員の視線が、一斉に開かれた襖の奥に向いた。

暗闇の奥から、声が聞こえてきた。

「やあやあ、お待たせしました……皆の衆……！」

一同の前に姿を現したのは、巨漢。肉の塊と思わせられる程の大男だった。

この男こそ、江戸の闇——山ン本五郎左衛門。

——来たあつ……！

目の前に現れた山ン本を見て、青年の顔がより一層険しくなった。眉根にはシワを寄せ、齒を食いしばり、膝の上で固めた拳を握り締める。百物語に興じる豪商達の熱気に混じって、体全体から煮えたぎるような怒りを燃え上がらせた。

——ずっと待ってたぞ、この時をつ……！ テメエに会うこの時をなっ……！

青年は立ち上がり、力強い一歩を踏み出す。

後ろに居る安心院は、この時、初めて笑顔に一筋の汗を流した。

「どうやら僕とした事が、主君の感情を測り違えたようだぜ……！」

怪談を始める為に円を作る豪商に混じって、青年は座った。
すると、山ン本が挨拶をしてきた。

「これはこれは、坂井家の若き跡取り様……！ 今宵は特別な怪談
……『かいだんひゃくまんべん怪談百万遍』……！ 怪談が終えた時には、えも言われぬ格
別な茶を味わい、特別な力を……得られるでしょう……！」

青年は、グツと感情を抑え込んだ。

こんな欲望と脂肪に肥え太った醜悪な男が、羽衣狐と山吹を利用
したと思うだけで、マグマのような怒りが腹の底から湧き上がって
くる。今すぐにでも殴りかかり、否、殺したいところだが、我慢だ。
まだ動く時ではない。何より、目的を見失ってはいけない。夢江戸
にやってきた目的は、あくまで“真”を得る事だ。

必死に感情を心の壺に押し込め、蓋をする。

そして、丁寧に頭を下げた。

「今宵、ココで語られる百物語の怪談……お聞かせ願いたく候つ……
……！」

> i 3 8 5 7 1 — 4 7 8 5 <

時代を超えて、遂に巨悪・山ン本と対峙するっ……！

“ 真 ” を求めた青年の闘いが、今、始まるっ……！

十一の幕（後書き）

感想お待ちしています。

十二の幕（前書き）

『お知らせだぜ！ 安心院先生！』

安心院先生「良い子の皆、元気にしているかい？ くれぐれも風邪には注意しなよ。帰ったら、うがい手洗いは基本だぜ。それじゃあ、安心院先生のホームルーム始めるよ。今回のお知らせは、しばらく主人公の主君が本編に登場しないって事さ。物語が佳境に入ったから、ここからは羽衣狐ちゃん達のくだらねー戦闘展開一本になるぜ」

青年「先生。とりあえず民事辺りで、作者を訴えていいですか？」

十二の幕

深川にある百物語組のアジト。

内部に突入したリクオ達の破竹の進撃は、止まらなかった。

侵入者を排除せんと迫りくる妖怪の群れを前にしても、リクオは慌てずに刃に畏を乗せる。しかも、単純な畏を乗せた技では無かった。黒く変色した二振りの刃に、炎が纏われた。

次の瞬間、刃を振り抜き、炎の斬撃が妖怪に飛ばされた。炎の刃は肉を断つと同時に焼き尽くし、妖怪を塵に還していく。

明鏡止水・桜を斬撃に乗せて、炎の剣に変えたのだ。リクオが自力で編み出した技であり、基礎技術を教えたイタクは内心では驚いていた。

「ほう。お前も少しは出来るようになったようじゃのう」

襲い掛かる妖怪を尻尾で蹴散らしながら、羽衣狐が不敵な笑みで呟いた。京都の時に比べれば、リクオ本人の実力は数段上がった。その点については、羽衣狐も認めた。

進撃の勢いを緩めず、一行は奥に進んで行く。

その時、先頭を走っていたリクオが急に止まった。

「待て……。何だこれは……？」

何かを見つけ、リクオは顔を陰しくさせた。

広い下水空間に、巨大な残骸が転がっていた。欠けている箇所があるが、頭蓋骨のような形をしている。随分長い間、下水に放置されていたらしく、苔が群生ぐんせいして年月の長さを物語っていた。

「デカいな。親父達の世代の大物妖怪かもしれん……」

羽衣狐も、欠けた頭蓋骨を眺める。

その時、自然と胸中に不快な思いを抱いた。コレが何かは知らないし、見るのも初めてだが、腹の底から憎悪が込み上げてくる。眉根にシワを寄せて、不快感と憎しみを露にした。

「お姉様。どうかなさいましたか？」

「いや、何でもない」

狂骨に心配をかけまいと羽衣狐は、気持ちを落ち着けて返事をした。

再び前に進もうとしたところで、一行は気配を察した。地下道の奥から、沢山の畏れを感じるのだ。恐らく、百物語組の妖怪の群れが、大量に押し寄せて来てるのだろう。

敵の数に、思わずリクオはしかめっ面で舌打ちした。

「こりゃー六人じゃ少な過ぎたかもな……」

青田坊はカナや清継達を本家に護送する役目を任せ、がしやどくろは単純に体が大き過ぎて入れずに外の敵の相手をしている。竜二の妹で破軍使いのゆらも、今は京都に居る。

大人数の敵を一掃出来る程の妖怪は、一行の中にはいなかった……
…
かのように思われた。

「何じゃお主等、もう力尽きたのか……？」

「え……？」

不意に美しい声が上がり、リクオ達は振り向いた。

苦渋の表情の一同と違い、絶対の自信と余裕に満ちた笑顔の羽衣狐が居た。立ち止まるリクオ達の間を通り抜け、先頭に出る。

「不甲斐無い男共だ……。お主等は後ろに下がっておれ、妾^{めかけ}がやる
う……！」

地下道の奥から迫りくる妖怪の群れを見据え、羽衣狐は落ち着いた動作で九尾の一本に手をつ込む。金色の毛の中から取り出されたのは、真つ黒に塗りつぶされた弓と矢だった。京都の決戦では見せなかった、羽衣狐の武器だ。羽衣狐は、転生をする度に強くなる妖怪であり、攻撃の手数も増えてくる。

侵入者を迎え撃たんと、武器を構えた妖怪の群れが押し寄せてくる。

眼前の敵に狙いを定め、羽衣狐は畏を乗せた弓矢を構えた。

「六尾^{ろくび}の弓矢“魔弓^{まきゆう}”つ……！」

次の瞬間、羽衣狐の手から黒い矢が放たれた。

強大な畏を纏った矢は、高速で宙を翔けて黒い線を引く。放たれた矢は、先頭を走る妖怪の胴体を射た——のではなく、木っ端微塵に吹き飛ばした。矢の勢いは緩まず、後ろに居る妖怪を次々と仕留めていく。しかも、纏われた畏が風の刃となり、軌道の外に飛ぶ妖怪も巻き込んで体を切り裂き、肉塊に変えていった。

羽衣狐の一撃で、妖怪の群れは物言わぬ骸に変わり果ててしまった。

圧倒的破壊力に啞然とする一同に、羽衣狐は振り返って年相応の素敵な笑顔を向ける。

「そら、道が出来たぞ……！ 妾に付いてくるがよいっ……！」
「はいっ！ やっぱり羽衣狐様が一番お強いですっ！」

狂骨だけが元気よく応え、すぐに駆け出した。

黒の衣を纏い、部下を連れて羽衣狐は先に進む。

残された一同は、遠ざかっていく羽衣狐の背中を無言で見つめていた。

先ほどリクオも、強化した刃で同時に複数の敵を葬ったが、羽衣狐が倒した数はその比では無い。現に、地下道に感じる畏の大半が、今の一撃で消えてしまった。

京都では見せなかった羽衣狐の力を目にして、竜二は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「あの女狐……ちから どんだけの力隠してやがるんだ……？」

「少なくとも、京都の時より強えつてのは確かだ……！」

答えるリクオの顔も、苦笑いが浮かんでいた。正直な気持ち、今回は味方でホッとしている。

「行くぞ。グズグズしてる暇はねえだろう」

「ああっ！」

イタクの言葉に答え、リクオ達も羽衣狐に続いて奥に向かって突き進んだ。

*

「ゲエエー！？ ア、アレは羽衣狐えっ……！？」

監視の映像を見て、一匹の妖怪が恐れに震えた声を上げた。バラバラに分かれた各部位を統括して、地獄に居る山ン本の思念を共有している“山ン本の脳”である。髑髏の上に脳が剥き出しと

なっている醜悪な姿をしており、畏の集まる場所にて自分が入る器の完成を待っていた。

そこへ羽衣狐達の襲撃を目にして、激しく取り乱す。

「奴のせがれだけでなく、羽衣狐までも……！ え、圓潮っ！ コは任せた……！ ワシは逃げるっ！ 朝まで逃げ切れれば、復活出来るのじゃろう！？」

形勢の悪さを察した脳は、リク才達を圓潮に任せて一人だけ逃げようとする。復活の時間が迫る中、こんな所で脳を失う訳にはいかない。何が何でも生き延びるのだ。

「夜明けは近いっ……！ もう畏は集まってるんじゃないか！？ とにかく畏を集めた器は、何とか隠しておけよ……頼むぞっ……！？」

羽衣狐一派と奴良組の進撃に恐れをなしてか、慌ただしく脳は指示を出す。

しかし、動揺する脳とは反対に、圓潮は不気味な程に落ち着いていた。まるで、コレも全て計画の内であるかのように。

そして、彼の偽りの面が、ゆっくりと剥がされた。

「……そうですね。そろそろですね……！」

「何……！？」

圓潮の雰囲気違和感を覚え、脳は困惑した。

*

一方、進撃を続ける羽衣狐達は、残った雑魚を蹴散らして奥の間に続く扉の前に辿り着いた。

この扉の奥に、圓潮が居る。そう思うだけで、リクオの中から怒りが噴き上がってくる。人々を恐怖に陥れ、命を奪ってきた外道を許しはしない。

羽衣狐も、尾に抱く青年に牙を向けた百物語組を潰す気を、胸中に膨らませていた。

「圓潮っ……！」

黒塗りの扉を破り、奥の間に突入する一行。

踏み込んだ瞬間、衝撃の光景が目に見え込んできた。

頭部を刃で貫かれ、床に鮮血を飛び散らして赤い斑点を作る。鈍く銀色に光る刃が引き抜かれ、刺し傷から出血を起こして今度は血の池を広げた。頭部を刺された人物は、前のめりに倒れる。

血の池に崩れ落ちたのは脳、後ろから彼を刺したのは圓潮。

無表情に刃に付着した血を紙で拭き取り、倒れた脳を見下ろす。

「うるさいよ、お前……！」

全く予想外の展開に、突入したリクオは混乱する。羽衣狐も状況を把握出来ず、怪訝そうに眉根を寄せた。

辿り着いた部屋には、圓潮と倒れた脳の奥にもう一体妖怪が居た。戦国武将のような鎧を身に纏い、床に座り込んで微動だにしないで沈黙を守っている巨大な怪物だ。体の前に構えている両手には、黒い茶釜のような物が持たされている。

しかし、今は奥の巨人よりも、圓潮の行動の不可解さに意識が集中していた。

「なに……してんだ……？」

絞り出したようなリクオの声に、圓潮は見向きもしないで足元で倒れてる脳を見下ろしていた。

すると、まだ息があつた脳が声を出した。

「な……何故……何故……何故じゃ……？ 圓潮お……！？ ワシを、誰だと思つとる……？ ワシは……山ン本じゃぞつ……！ ぬしらの……父じゃぞつ……！？ こんな事をして……いいと……」

地獄にいる山ン本が脳を通じて、凶刃を向けてきた圓潮に訴える。しかし圓潮は悪びれた様子を見せず、冷徹な仮面でもって言い放つ。

「貴方は、ただの脳でしょう……」

「脳……？」

圓潮の言葉に羽衣狐は目を細め、彼の足元に倒れてる脳が剥き出しの妖怪を見る。

「ち……違つ……！ 今話しているのは、ワシじゃつ……！ 地獄から……ワツ……！」

台詞を言い切る前に、無情にも脳は頭を踏みつけられた。自らが産んだモノに裏切られるとは、息子に地獄に墮とされかけた羽衣狐と同じで哀れである。

「貴方の役目は終わった。元々雑多な妖を束ねる“山ン本”^{おまえ}が必要なだけでしたし……」

百物語組は、今日で解散ですよ……！」

踏みつけた脳を棄て、圓潮は羽衣狐とリクオに顔を向けた。
そして、不敵な笑みで一同を迎える。

「『鬼ここにみつけたり』……って顔じゃないね……」

その時、室内のあちこちから、不気味な声が聞こえてきた。

救世主をつ……！ 救世主をつ……！

誰か助けてつ……！

救世主をつ……！

リクオを殺すと言う救世主は……まだかつ……！

禍々しい声音で聞こえてくるのは、圓潮の嘸はなによって恐怖を植え付けられ、予言の救世主を求める人達達の渴望の声だった。

希望、絶望、殺意——人間のあらゆる念が声の一つ一つにこもっており、氷麗や狂骨は寒気を感じた。

一方で圓潮は、渴望の声を愉快げに聞いていた。

「今宵は……よく広がるね、あたしの嘸……」

「てめえ、何なんだ……？ 意味……わかんねーぞつ……！？」

リクオは睨みを利かせ、凄んでみせる。

しかし圓潮は動じず、手に持つ扇子を広げ、不気味な笑顔を張り付けて答えた。

「あたしはただ……怪談を語りただけの男ですよ。嘸家としてね……。ただ……人が恐怖する怪談を語りただけなのです……！」
「……だけ……だと……！？」

圓潮の言葉に、リクオの怒りが更に込み上げてきた。
彼の感情を意に介さず、圓潮は続ける。

「雷電も珠三郎も鏡斎も……そして、あたしも皆そう……。山…
本さんの一部ですから……。全く、それぞれ嫌なところが似たよう…
で……」

口元を扇子で隠し、自嘲染みた笑みを浮かべる。

圓潮の言葉、仕草、全てが癪に障り、ついにリクオは声を荒げた。

「要領を得ねーんだよっ！ てめえらの、その勝手な欲望で……ど
んだけの人間を苦しめるつもりだっ……！」

刃を向けるリクオの後ろに、イタクが駆け寄った。

「リクオ！ ソイツが圓潮かつ！？」

両手に鎌を持ち、眼前の圓潮を睨む。

怒りに心を震わせるリクオの隣で、羽衣狐は口を閉ざして考え込
んでいた。先ほどの圓潮と脳の会話が、どうにも引つ掛かる。察す
るに、圓潮は山本の一部でありながら、彼を復活させる気が無い
ように思える。

思考を続けてる間に、圓潮が語る。

「そう。嘶家として、歴史を……伝説を語る者となる」
「どうしたリクオ……？ 行かねえなら、オレがやるぜ」

イタクには相手の話を聞く気は無く、得物を構えて刈り取る体勢
に入っていた。

しかし、リクオが制した。

「いや待て……。奴は俺がやるっ……！」

目を鋭くさせ、二振りの刃を振りかぶって圓潮に斬りかかる。そこへ、圓潮が驚愕の目的を口にした。

「すなわち——鵠の再誕をつ……！」

聞いた一同に動揺が走り、リクオは驚愕のあまり刃を止め、羽衣狐も目を大きく見開いた。

「鵠、じゃと……？」

震える声で問うたのは、羽衣狐だった。

圓潮は彼女に笑顔を向けて、言った。

「そうですよ……。鵠……安倍清明の母親・羽衣狐……！ 貴女の御子息の再誕……今夜は、その序章ですよ……！」

その時、彼の背後の巨人から二つの人影が現れた。

一つは、四国、京都と続いて暗躍していた夜雀。

しかし、もう一つは完全にその身を一同に晒さず、正体が見えない。

救世主をつ……！

救世主をつ……！

街中から集まる畏、人々の思念が、茶釜に吸い込まれていく。禍々しい空気に満ちていく室内で、氷麗は危険を察して声を上げた。

「リクオ様！ 危ないっ！」

直後、リクオを大きな塊が襲った。

咄嗟に腕で防御するも、衝撃を受け切れずに後ろに吹き飛ばされ、圓潮から離されてしまう。壁に叩きつけられ、床に崩れ落ちた。すぐに体を起こして、襲撃者を目にする。

「何だ……アイツは……！？」

圓潮の背後に置かれていた巨人が、動き出して拳を突いてきたのだ。

動揺する一同の前で、圓潮は今宵最後の怪談を語り出す。

「ええー……人の心とは恐ろしいもので、それがすぐれるものとなれば……人の死さえ望んでしまうものなのですから……。我が身可愛さに、救いを求める世……そしてキミは、その供物……」。

今宵最後の噺は、百物語に終わりを告げる『妖怪・青行燈』……
あおあんどん
！ どうぞ、お楽しみをつ……！」

巨人——青行燈が巨体を起こし、活動を開始する。頭部を包んでいた兜は外れ、人間とかけ離れた醜悪な顔を晒す。街中から集められた大量の畏を纏い、頭に被された布の隙間から覗く目で、標的に狙いを定める。

攻撃の矛先をリクオに定め、巨大な拳を突き出す。

「リクオ様っ！」

氷麗が両者の間に割って入り、氷の防壁を作る。

だが、圧倒的な破壊力の前に脆くも崩れ、二人は拳打を受けて壁

に叩きつけられた。

「リクオ！ 雪女！」

イタクが駆け付けける中、圓潮の語りは続く。

「えー、この妖は“キミ”に向けられた東京都民一千万人の殺意と希望の塊……！ 世が不安に堕ちた“証”……置き土産に受け取っておくれっ……！」

——コイツは……！ なんだ、この強い思念は……！？ 尋常じゃないっ……！ コレが圓潮の……力っ……！
青行燈から感じる異常な人々の思念と畏を感じて、竜二は言霊の強大さを知る。

「今日のゲームは楽しかった……！」

冷酷な笑みを顔に浮かべ、圓潮が牙を剥く。
標的を叩き潰さんと、人々の渴望の念に突き動かされて青行燈は再びリクオ達に拳を突く。迫りくる巨大な拳は、まさに圧巻で、あの土蜘蛛に匹敵する大きさだ。まともに受けては、ひとたまりもない。

しかし、リクオと氷麗は打撃を受けたばかりで、反応が遅れて回避も防御も間に合わない。イタクの鎌でも、拳圧を纏ったアレは防ぎきれない。

しかし、拳はリクオ達まで届かなかった。当たる寸前、両者を挟んで巨大な壁が出現して、突きを受け止めたのだ。

「なっ……！？」

突如、目の前に現れた壁に、リクオは驚いて目を丸くした。
一同の危機を救ったのは、巨大な黒い鉄扇だった。コレを扱う妖怪を、リクオ達は一人しか知らない。

「二尾の鉄扇っ……！」

青行燈の一撃を止めたのは、羽衣狐だった。

「羽衣狐っ！？」

「……お前が死んでは、山吹が悲しむ」

リクオに理由を告げて、羽衣狐は青行燈と対峙する。

「そちらに付くんですか……？」

青行燈の後ろから、圓潮が声をかけてきた。

羽衣狐は、二尾の鉄扇を片手に視線を向ける。その顔は僅かに陰しく、少し感情的になっていた。大将である山本と繋がる脳は潰されたが、青年を追い詰められた怒りは収まった訳ではない。

黒い瞳で視線を交わして、圓潮が言う。

「奴良組を手助けして、鵺の再誕を願うあたしに牙を剥くと言う事は、愛しい御子息を裏切る事と同じですよ……？ それでも構わないんですか……？」

今宵の目的を達成した圓潮は、立ち去る前に羽衣狐に言霊を向けた。羽衣狐程の大妖怪を完全に操る事は出来ないが、ある程度揺さぶりをかける事は可能だ。

羽衣狐は、何か思いつめたように目を細めた。いずれ、このような選択を迫られる時が来る事は、分かっていた。そして、答えも、

覚悟も決まっている。

圓潮の言霊に惑わされず、迷わず、羽衣狐は答えた。

「妾は、酷い母じゃ……！ 愛しい晴明はるみよりも、妾を好いた愛する物好きおとしを選んだのだっ……！」

苦渋の選択を、羽衣狐は決然とした態度で告げた。

引き込みは不可能と早々に判断して、圓潮は短く笑った。

「そうですね……。では、リクオ共々、ココで消えてもらいましょう……！」

「ふっ……！ 妾を、このような木偶の坊で倒せると……？」

一変して羽衣狐は笑い、巨大化させた鉄扇を元の大きさに戻して、口元を隠すように構えた。

「舐められたものじゃな……！」

充実した畏を纏い、羽衣狐は戦闘態勢に入った。

青年、未だ目覚めず。

そして羽衣狐、巨大妖怪・青行燈を前に、動くっ……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7870z/>

退魔伝 アヤカ死～百物語篇～

2012年1月8日10時49分発行